

TOKYO WONDER SITE

ANNUAL REPORT 2015

ト
ー
キ
ョ
ー
ワ
ン
ダ
ー
サ
イ
ト
で



開く可能性の扉 : Meets TWS

Meets TWS

トーキョーワンダーサイトで開く 可能性の扉

トーキョーワンダーサイト(TWS)の活動をご存知でしょうか？

公募による展覧会、初個展、クリエイター・イン・レジデンス、実験的な企画……。

東京を拠点に、さまざまな活動の場をつくり、アーティストを支援してきたTWS。

ここでは、実際に活動してきたアーティストの声とおしてその活動をご紹介します。

TWSとの出会いをきっかけに、ステップアップしていったアーティストたち。

TWSは、彼らのように、無限の可能性を秘めたアーティストたちに活動の場を提供し、

創造と実験の場を生み出して観客の皆さんと共に共有していきます。

Based in Japan's capital city, Tokyo Wonder Site (TWS) creates platforms for a wide range of activities and supports artists by organizing open-call exhibitions, artists' first solo exhibitions, residency programs, and other experimental projects.

Through the voices of artists who have worked with TWS,

this publication presents the diverse activities that take place at TWS.

Many of the artists have since successfully advanced their career after participating in these programs.

TWS continues to provide opportunities for artists with unlimited potential, and share platforms for creativity and experimentation with audiences.

アーティストインタビュー Artist Interview

vol.1 佐藤 翠 Midori SATO

川久保ジョイ Yoi KAWAKUBO vol.2

vol.3 ラウル・ワルヒ Raul WALCH

鈴木ヒラク Hiraku SUZUKI vol.4

vol.5 宮内康乃 Yasuno MIYAUCHI

ディン・Q・リー Dinh Q. LÊ Special!

トーキョーワンダーサイトのミッションと活動
Tokyo Wonder Site Mission & Activity



はじめの一步を後押し 公募から個展、そしてその先へ

SUPPORT FOR THE FIRST STEP:
FROM AN OPEN-CALL EXHIBITION
TO SOLO SHOWS, AND BEYOND



服が並んだクローゼット、高いヒールが並ぶ棚、鮮やかに彩られた花々など、女性らしいモチーフと大胆なタッチで見るものを引き込む作品を描く、佐藤翠。近年ではギャラリーでの展示のほかに、本の挿画や映画への絵画協力などにも活躍の場を広げる彼女に、トーキョーワンダーサイトのプログラムはどのようなきっかけをもたらしたのだろう。

Midori Sato's work depicts feminine motifs with a bold touch, from closets full of clothes to shelves lined with high heels or vividly colored flowers. In addition to exhibiting at galleries, she also works widely in other fields, such as creating art for books and films. What kind of opportunities did the Tokyo Wonder Site program give her?

自身の個展「Secret Garden」
(8/Art Gallery/ Tomio Koyama Gallery, 東京, 2016)にて
Courtesy of Koyama Art Projects

トーキョーワンダーウォールから TWS-Emergingへ

大学院に入学して、学外でも発表してみたいと思ったのが、「トーキョーワンダーウォール」(以下、TWW)にチャレンジしたきっかけです。初めて応募したのは1年生のときですが、そのときは選考に通りませんでした。でもそれも、厳しい世界であることを知れたのと作品をより良くしようというモチベーションになったので、良い経験になりました。その翌年の2009年に入選し、東京都現代美術館という憧れの美術館で、自分の作品が展示できるのが嬉しかったのを今でも覚えています。TWW入選者は次のステップとしてトーキョーワンダーサイト(以下、TWS)での個展「TWS-Emerging」(以下、Emerging)の機会が得られるというので応募しました。プレゼンをするときには、会場となるTWS本郷の一番広い部屋でやりたい、と意気込んでいたのですが、当時のTWSのプログラム・ディレクターに「小さい奥の部屋の方がやりたいことに合っていると思う」とアドバイスしていただいたのは勉強になりました。実際そのとおりで、プライベートな部屋のような空間を生かして、絵画と立体を使ったインスタレーションをつくることができました。

「Emerging」は自由度が高くて、基本的にアーティストの側に任せてもらえました。これが私にとって初めての個展でしたが、やりたいことをやって、自分が形にしたいものを実現できたのが良かったですね。また、ギャラリストの小山登美夫さんをはじめ、見てくださった方から後に声を掛けていただくなど、次につながる驚きの展開が生まれたのもこの個展でした。

2011年には、「Emerging」参加アーティストとして、TWS Art Cafe kurageで作品を展示しました。その展示で私の作品を見た方が後に作品を購入してくださるなど、ひとりの作家として世の中に発表できている、という実感を得ることができました。



「TWS-Emerging: Blissful moment」(TWS本郷、2010)
展示風景

アーティストの成長を継続的に応援

TWSのプログラムは大学を出て、次の一步をどう踏み出していこうか迷っている若手アーティストに、焦点をあててくれる数少ないプログラムではないかと思います。公募を窓口 to 個展へのステップがあったり、また海外のレジデンスで滞在制作をするチャンスが得られたりと、アーティストの成長を持続的な目で応援してくれているんだなと感じています。私自身、あのときにTWWに挑戦していなかったら、今の自分はいなかったかもしれないと思うので、TWSは最初の一步を後押ししてくれた大切な場所です。

これからTWSのプログラムへ参加される方は多くの方に見てもらえる機会なので、積極的に挑戦していただきたいです。私も新しいことに取り組む姿勢というのは今でも大切にしているので、今後は海外のレジデンス・プログラムなども視野に入れて活動していきたいと思っています。



「TWS-Emerging: Blissful moment」をきっかけに行った、TWS本郷に併設するカフェでの展示「Pont Marie」(TWS Art cafe kurage、2011)



初めての個展「TWS-Emerging: Blissful moment」(TWS本郷、2010)でのアーティスト・トークにて。左はゲストのキュレーター・窪田研二氏

Continuing Support for Artists' Growth

I was in my first year of graduate school when I applied to take part in Tokyo Wonder Wall (TWW). I wasn't selected, but I succeeded the following year, in 2009. Even now, I remember how happy I was to have my work displayed in the Museum of Contemporary Art Tokyo. I then applied to Tokyo Wonder Site (TWS) for a solo exhibition in TWS-Emerging. Although it was my first solo show, I was able to achieve what I wanted. People who came to the show approached me afterwards, including a gallerist, which led to some surprising developments. I think the TWS program provides

something rare for young artists to focus on when they are searching for the next step after university. It offers continual support for artists' growth through solo exhibitions and overseas activities. Personally, I wouldn't have built up the career I have today if I hadn't applied to TWW, so for me TWS is a special place that provided support for my big first step. I hope that people who participate in TWS programs will actively try new things. I try to keep tackling new challenges even now, and I have my sights set on participating in an overseas residency program in the future.

さとう・みどり

1984年愛知県生まれ。2010年東京造形大学大学院修士課程修了。主な個展に「Secret Garden」(8/ART GALLERY/Tomio Koyama Gallery、東京、2016)、「TWS-Emerging: Blissful moment」(TWS本郷、2010)など、グループ展に「コレクションテーマ展40 VOCA大原美術館賞の10年」(大原美術館、岡山、2016)、「絵画を抱きしめて Embracing for Painting」(資生堂ギャラリー、東京、2015)など。

Midori SATO

Born in Aichi in 1984. Graduated with an MA in Art Studies, Art and Design from Tokyo Zokei University in 2010. Solo exhibitions: "Secret Garden" (8/ ART GALLERY/ Tomio Koyama Gallery, Tokyo, 2016), "TWS-Emerging: Blissful moments" (TWS Hongo, Tokyo, 2010). Group exhibitions: "Collection Theme Exhibition 40 10 Years of Ohara Museum of Art Prize of Exhibition VOCA" (Ohara Museum of Art, Okayama, 2016), "Embracing for Painting" (Shiseido Gallery, Tokyo, 2015).

New Work!



個展「Secret Garden」(8/Art Gallery/ Tomio Koyama Gallery、東京、2016)

Photo: Kenji Takahashi

©Midori Sato, Courtesy of Koyama Art Projects

Meets TWS vol.2
Yoi
KAWAKUBO

川久保
ジョイ

制作に影響を与えた レジデンスでのアーティストとの交流

INFLUENCED BY INTERACTIONS
WITH OTHER RESIDENCY ARTISTS

前職は金融トレーダーという、異色の経歴を持つ川久保ジョイ。写真作品をはじめ、近年ではさまざまなメディアを扱うインスタレーションまで、制作の幅を広げている。海外での活動を視野に入れて参加したトーキョーワンダーサイトのプログラムからどのようにステップアップを経てきたのだろうか。

Yoi Kawakubo's unconventional background includes previous occupation as a financial trader. His work as an artist is always expanding, from photography to recent installations involving a wide range of different media. Having participated in Tokyo Wonder Site programs with the future aspiration of working overseas, how has his career been subsequently boosted?

「OPEN STUDIO 2013」(TWS 青山:クリエイター・イン・レジデンス、2013)にて、他の参加アーティストとの交流の様子



「TWS-Emerging 2012」(TWS本郷、2012)に出展した作品
《Speak the Unspeakable》

海外のレジデンスを目指して

トーキョーワンダーサイト（以下、TWS）のプログラムで最初に参加したのは2011年の「トーキョーワンダーウォール」（以下、TWW）です。次に参加した2012年の「TWS-Emerging」は、表現の幅をひろげようと考えていた頃でした。本当は海外のレジデンスに行きたいと思い、TWWの前に「二国間交流事業プログラム」（以下、二国間）に応募したのですが、TWSのプログラムに参加することなく、いきなり挑戦するのは難しかったようです。二国間の帰国報告会を聞きに行った際に、TWSのプログラムがTWWなど公募展からのステップアップを想定した構成になっていることを理解しました。その帰国報告会では、略歴やポートフォリオの掲載順、応募書類や計画書の書き方、推薦者の選び方など、応募に関するコツやアドバイスがあり、他のレジデンス・プログラムに応募する際も参考にさせていただきました。いま振り返ってみると、2013年の「国内クリエイター制作交流プログラム」（以下、国内クリエイター）の経験は大きかったです。当時、青山にあったレジデンス施設には国内クリエイターのアーティストが自分のほかに3人、ほかにも交流事業や推薦プログラムなどで滞在している海外のアーティストも常に複数いて、寝食を共にしました。こうした国内外の

アーティストとのコミュニケーションを通し、さまざまな考え方や視点に気づきました。ここで自分の考えもかなり変わった気がします。ジャンルや手法にこだわらずに表現していくこと、またアーティストにとって作品が売れることだけが第一ではなく、考え方や生き方、いかに面白い表現ができるかの方が重要だと思うようになりました。

活動場所を東京からロンドンへ

国内クリエイターでの経験は、結果的にネットワークを広げることもつながりました。その後「二国間交流事業プログラム」（2014）の派遣クリエイターでロンドン芸術大学にレジデンスをしましたが、そこでの出会いも他の展示やレジデンスなど次のステップにつながったり、他国の知人が増えたり。ロンドンは日本よりもコミュニティの母体も大きいのでたくさんのアーティストやコレクター、キュレーターに出会うことができました。2016年3月から、ポーラ美術振興財団や文化庁の制度を活用してまたロンドンに滞在しますが、これまでの経験やつながりが切り開いてくれた機会だと感じています。私のように、さまざまなフィールドへ出ていくことを希望するアーティストにとって、TWSのプログラムは有効だと思います。



「トーキョー・ストーリー2014 | 第1期」(TWS 渋谷、2014)に出展した作品《When the mist takes off the suns》



アーティストのグスタヴォ・テリアコ企画の展示「A room of wonder | Tokyo」(「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバルVol.8」内、TWS 渋谷、2013)にて行ったインスタレーション

A Step Up for Expanding Fields

The first Tokyo Wonder Site (TWS) program that I participated in was Tokyo Wonder Wall in 2011. I was then able to participate in TWS-Emerging. The experiences I gained through the Local Creator Residency Program were especially significant. At the residency site, located at that time in Aoyama, there were three other artists from the same program, as well as several overseas artists who were either part of exchange programs or invited artists. We all lived and worked together. Through communicating with both local and international artists, I came to perceive different perspectives, radically trans-

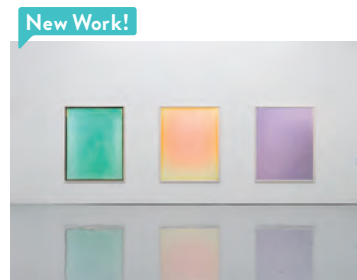
forming my way of thinking. I came to believe that it is critical to create work without sticking to a certain genre or method. For an artist, the way he or she thinks and lives has a big impact on the level of their art. These experiences helped me expand my network. I will start living in London from 2016. Though this is through the support of a different grant, the opportunity came about precisely because of my past experiences and network. For artists such as myself who wish to explore different fields, TWS programs are very useful.

かわくぼ・じょい

1979年トレド(スペイン)生まれ。2003年筑波大学第二学群人間学類卒業。主な個展に「To tell a (hi)story」(Husk gallery、ロンドン、2015)など、グループ展に「トーキョー・ストーリー2015」(TWS本郷、2015)、「VOCA2015」(上野の森美術館、大原美術館賞受賞、2015)、「内臓感覚」(オルタ×川久保ジョイにて出展、金沢21世紀美術館、石川、2013)など。

Yoi KAWAKUBO

Born in Toledo (Spain) in 1979. Graduated with a BA in Human Sciences from the University of Tsukuba in 2003. Solo exhibition: "To tell a (hi)story" (Husk gallery, London, 2015). Group exhibitions: "TOKYO STORY 2015" (TWS Hongo, Tokyo, 2015), "VOCA2015" (The Ueno Royal Museum, awarded the Ohara Museum of Art Prize, Tokyo, 2015), "Organela and the sound of the singular point" (Collaboration work with Olta, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, 2013).



「第10回 shiseido art egg」川久保ジョイ展」(資生堂ギャラリー、東京、2016)でのインスタレーション《Fall / フォール》



原発事故から移民問題まで 日本の社会に向き合う

FROM NUCLEAR DISASTER TO IMMIGRATION:
CONFRONTING ISSUES IN JAPANESE SOCIETY

彫刻からパフォーマンスまで、ジャンルを越えて社会的なアプローチを試みるドイツ人アーティスト、ラウル・ワルヒ。これまでに世界の様々な場所で、その土地の課題が浮き彫りになるような作品を発表してきた。二度にわたる日本での滞在制作で、彼は何を感じたのだろうか。

From sculpture to performance, German artist Raul Walch transcends media categories in his explorations of social issues. His work uncovers the challenges faced by many different places around the world. What was his impression of participating twice in Tokyo Wonder Site's residency program?

ラウル・ワルヒ

1980年フランクフルト生まれ。現在、ドイツとエチオピアにて活動。2012年、ベルリン芸術大学附属空間実験研究所修了。近年の主な活動に「海外クリエイター招聘プログラム」にて滞在(TWSレジデンス、2015)など、主な個展に「Azimut」(Lichthaus Arnsberg, アルンスベルグ、ドイツ、2016)など、主なグループ展に、「Cinema Lada」(Modern Art Museum, アディスアベバ、エチオピア、2015)、「Festival of Future Nows」(新ナショナルギャラリー、ベルリン、2014)など。

Raul WALCH

Born in Frankfurt in 1980. Lives and works in Berlin and Addis Ababa. Graduated with a BFA in sculpture from Kunsthochschule Berlin-Weissenhof. Graduated from Universität der Künste Berlin / Institut für Raumexperimente in 2012. Recent main activity: "International Creator Residency Program" (TWS Residency, Tokyo, 2015). Solo exhibition: "Azimut" (Lichthaus Arnsberg, Arnsberg, Germany, 2016). Group exhibitions: "Cinema Lada" (Modern Art Museum, Addis Ababa, Ethiopia, 2015), "Festival of Future Nows" (Neue Nationalgalerie, Berlin, Germany, 2014).



福島、石巻、東京でのリサーチから

初めてトーキョーワンダーサイト (TWS) の「リサーチ・レジデンス・プログラム」に参加したのは2013年。原発事故に焦点をあてた作品を制作しました。実際に、福島第一原子力発電所のある福島県双葉町や、地震や津波の被害を受けた宮城県を訪れ、伊東豊雄の「みんなの家」や宮城県石巻市の復興プロジェクトなど、現地で行われている重要なプロジェクトをリサーチしました。2015年には「海外クリエイター招聘プログラム」に参加しています。この期間中は、建築空間における布の使用について、また不法長期滞在とされる人々についてリサーチを行いました。ドイツでは2011年以降、国内の原発の稼働が徐々に停止され、2022年末にはすべての原子力発電の廃止を目指していますが、この決断は福島の出来事に影響を受けていました。そこで反対に、二度目のレジデンスの際にドイツで難民を受け入れる決断がされたことに対し、日本ではどのような政治的な反応があるのか知りたく考えました。それで移民に焦点をあて、茨城県にある入国管理センターを訪れたのです。ドイツ人の視点から、日本では移民や国内の災害を受けた避難住民などに、どのような政策を行っているのか、大きな関心を寄せています。

日本人アーティストとの出会い

レジデンス・プログラムに参加することで、日本人アーティストとの良い出会いもありました。最初のレジデンス期間中に一緒に双葉町を訪れた川久保ジョイとは、アート全般についての対話、とりわけアーティストがどのように社会の現実や社会そのものと向き合うかについて話をしました。ま



2013年のレジデンスの際、福島でのリサーチをもとに制作した映像作品《Jusqu'ici tout va bien》(2013)

た、ベルリンの空間実験研究所で知り合い、TWSでも活動経験のある田村友一郎とは2017年にケルン日本文化会館で一緒に展覧会をする予定です。海外でプロジェクトを行うには、現地での仲間や繋がりを見つけることはとても大事です。TWSのレジデンス・プログラムは東京の街やそのアートシーンを知り、プロジェクトを実現するのに適しているだけではなく、現地の日本人アーティストと出会い、関係を構築する素晴らしい機会となると思います。

Exploring Social Issues through Local Research

I first participated in Tokyo Wonder Site (TWS) residency program in 2013, when I created work focusing on the Fukushima nuclear disaster. During my second residency at TWS in 2015, I conducted research on immigrants who are overstaying in Japan. Germany aims to shut down all its nuclear power plants by 2022, influenced by the Fukushima disaster. When Germany decided to take in refugees in 2015, I then wanted to learn about the political response to this decision in Japan. From a German perspective, I have a great interest in Japan's policies toward evacuees from natural disasters and immigrants, so I visited an immigration center as part of my research. The residency gave me a good chance to meet Japanese artists. In this sense, TWS program is not only ideal for getting to know Tokyo and its art scene, or for realizing a project, but it also helps participants connect with local Japanese artists and build relationships.



「OPEN STUDIO 2015-2016」(TWSレジデンス、2015)にて、作品を前に来場者と交流の様子

振り返ればきっかけになっていた 新しいことに挑戦できる環境が力に

IN RETROSPECT, IT WAS ALWAYS THE CATALYST:
HELPED BY AN ENVIRONMENT WITH THE FREEDOM
TO TRY NEW THINGS

平面作品のほか、壁画、インスタレーション、映像、彫刻など多岐にわたる制作活動を展開する、鈴木ヒラク。国内外での展覧会のみならず、音楽家とのセッションによるライブ・ドローイングパフォーマンスや、アニエス・ベーやコム・デ・ギャルソンといったファッションの分野とのコラボレーションも行なうなど、ドローイングの可能性を拡張し続けている。トーキョーワンダーサイトでの経験が彼の制作にどんな影響を与えたのか、振り返ってもらった。

Hiraku Suzuki creates murals, installations, video art, and sculpture in addition to 2D work. He strives to expand the possibilities of drawing, collaborating with fashion brands such as agnès b. and Comme des Garçons, and producing live drawing performances with musicians. He looked back on the impact his experiences with Tokyo Wonder Site have had on him.

「Glyphs of the Light 2011」
(WIMBLEDON space、ロンドン、2011)にて、
オープニングに行ったライブ・ドローイング



「Glyphs of the Light 2011」(WIMBLEDON space、ロンドン、2011)。
二国間交流事業プログラムにて、ロンドンで制作した作品

キーワードを手に入れた個展

ちょうど大学院を修了するタイミングで参加した、2007年末から2008年にかけてのトーキョーワンダーサイト（以下、TWS）青山：クリエイター・イン・レジデンスでの2ヶ月間のレジデンス、そしてその後のTWS渋谷での個展「TEAM 11/NEW CAVE」。この時期の一連の経験は、自分がアーティストとして生きていく一歩を踏み出す大きなきっかけになりました。

少し遡れば、今も継続している土と葉脈を使った作品シリーズは20歳の頃から制作していましたし、バックパッカーをやったり、実験的な音楽やストリートアートのシーンなどに関わりながら、ずっと独自に動いてきました。そんな中で、アニエス・ベーさんとの出会いを始め、理解者や海外で発表する機会を少しずつ得てはいたのですが、自分がアーティストだと自覚したり、アーティストになろうと思ったことは特になかったんです。それよりも、色々なことを区別せずにひたすら行動し考えて、とにかく前に進もうとしていました。ただ、ちょうどTWSでの個展の前に、自分の中で「ドローイング」という言葉が新たな意味を持って浮上してくる瞬間があった。自分の全ての仕事に通底する一本の線を「ドローイング」というキーワードで表すことで、作品自体も、生き方としても、ピントが合って、可能性が広がったと思います。

個展「TEAM 11/NEW CAVE」(TWS渋谷、2008)。壁に掛かるのは葉脈によるドローイング「bacteria sign」シリーズ、中央はアスファルト片による作品「road sign - spiral」
Photo: Ooki Jingu



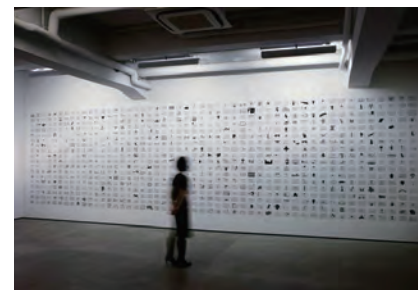
制作の方向性の変化

2008年と2009年に開催されたグループ展「都市のディオラマ：Between Site & Space」(TWS渋谷 / ARTSPACE、シドニー) では、2ヶ月間シドニーに滞在しました。海外の長期レジデンスは初めてだったので、まささな気持ちで、その場所との偶然の出会いを期待して、ほぼ手ぶらで行きました。

2011年の「二国間交流事業プログラム」でロンドンに行ったときは、シドニーの時とは全くアプローチが違いました。この滞りが東日本大震災の直後であったということも大きく影響していたのですが、自分の興味が目の前の物質性や場所性よりも、考古学などの学問や、「人間とは何か」といった根源的な思考へと変化していたんです。そのため、ロンドン滞在では自分がやりたいことへのフォーカスがしぼれていて、「光と文字の関係性」というテーマで制作と発表を行うことができました。その後も海外滞在の機会が増えるのですが、ローカルな文脈との偶然の出会いに直接影響を受けるだけでなく、普遍的な「ドローイング」という自分の研究を進めるように制作の方向性が変化してきたと感じます。こうして振り返ってみると、自分の作品がぐんと伸びる時期にTWSのプログラムが重なっていたと思います。自由に新しい挑戦をさせてもらえた、ということが僕にとっては大きかったので、TWSのプログラムへ参加して、のびのびとやりたいことができる環境を得ることが、これから参加する人にとっても作品の可能性を広げる突破口になるかもしれません。



「Glyphs of the Light 2011」(WIMBLEDON space、ロンドン、2011)にて、オープニングに行ったライブ・ドローイング



「都市のディオラマ：Between Site & Space」(ARTSPACE Visual Arts Centre、シドニー、2009)。TWS渋谷での展覧会の巡回展、オーストラリア人作家3名と日本人作家3組が参加した

Breakthrough and Milestone as an Artist

My two-month residency at Tokyo Wonder Site (TWS) Aoyama at the end of 2007 was a critical juncture for me as an artist. The possibilities for my later work then expanded following my solo exhibition, "TEAM 11/NEW-CAVE," at TWS. A major aspect was how I newly acquired drawing as a way to approach my work. I was able to capture the artistic context for what I wanted to do, and gained an awareness of the structure of my process. I also made the decision to live as an artist at this time. It was through a TWS program that I could experience residency programs overseas in locations such as Sydney and London.

The fact that my stay in London came directly after the Tohoku earthquake was also key, but my interests changed from the materiality and locality around me to academic fields such as archaeology and fundamental questions such as "What is humanity?" Looking back, I see that the time my work developed most coincided with the period when I was participating in TWS programs. Being able freely to try new things helped a lot, and I think future TWS program participants will also be able to expand the possibilities of their work in such an environment.

すずき・ひらく

1978年宮城県生まれ、神奈川県出身。2008年東京藝術大学大学院美術研究科修了。主な個展に、「かなたの記号」(国際芸術センター青森、2015)、「NEW CAVE」(TWS渋谷、2008)など、主なグループ展に「日産アートアワード2013」(BankART Studio NYK、神奈川、2013)、「ソンエリュミエール、そして叡智」(金沢21世紀美術館、2012)、「六本木クロッシング2010展」(森美術館、東京、2010)など。

Hiraku SUZUKI

Born in Miyagi in 1978. Graduated with an MFA from Tokyo University of the Arts in 2008. Solo exhibitions: "Signs of Far-away" (Aomori Contemporary Art Centre, 2015), "NEW CAVE" (TWS Shibuya, Tokyo, 2008). Group exhibition: "NISSAN ART AWARD 2013" (BankART, Kanagawa, 2013), "Son et Lumière, et sagesse profonde" (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, 2013), "Roppongi Crossing 2010" (Mori Art Museum, Tokyo, 2013).

New Work!



《歩く言語》
(個展「かなたの記号」、国際芸術センター青森、2015)
Photo: Kuniya Oyama ©Hiraku Suzuki

パフォーマンスの骨格になった、 ボーダレスな挑戦

ENVIRONMENT RECEPTIVE TO INTERDISCIPLINARY
CHALLENGES
TWO SHOWS THAT SHAPED THE FRAMEWORK OF OUR
PERFORMANCE

女性たちを中心とした音楽パフォーマンスグループ「つむぎね」を主宰する、作曲家の宮内康乃。「つむぎね」では声や空間を使った独自のパフォーマンスを展開し、個人の活動でも長年さまざまなジャンルの表現とのコラボレーションを試みてきた。実験的な表現に挑戦し続ける宮内にとって、トーキョーワンダーサイトはどんな場所だったのだろうか。

The composer Yasuno Miyauchi leads the musical performance group Tsumugine, which centers on female performers. With Tsumugine, Miyauchi has developed a unique style of performance using voice and space, and in her solo work, she has also collaborated with a wide range of different fields for many years. What kind of place was Tokyo Wonder Site for a continually experimental artist like Miyauchi?



つむぎねによる公演「そう」
〔EXPERIMENTAL SOUND, ART & PERFORMANCE FESTIVAL
—2008年度受賞記念公演—〕内、TWS渋谷、2009

「つむぎね」の骨格ができた

私がトーキョーワンダーサイト（以下、TWS）の「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル（以下、TEF）」に応募したのは、大学院を卒業して「つむぎね」を立ち上げたばかりで、活動について模索していた頃です。音楽の公募というと、西洋楽器を用いたコンクールがほとんどだった当時、ジャンルを超えたパフォーマンスを募集している場というのは貴重でした。また審査員も一柳さんや山下洋輔さんなど錚々たる方々で、こうした音楽の世界の第一人者にパフォーマンスを見られる、というのも大きな魅力でした。そうして参加した2009年1月のTEFで作品「ね。」を発表しました。ここで、つむぎねのベースとなる、白い衣装で、電球があって、客席が周りを囲んでいて、声をメインにしたパフォーマンスというスタイルができあがったのです。ただ実は、この公演は力不足を実感して、全くうまくいった印象がありませんでした。なので、最優秀賞というお話をいただいたときには本当にびっくりしましたね。その連絡をいただいたのが3月の末で、それから5月末の「受賞記念公演」に向けて2ヶ月間、集中してつくりました。それまではメンバー間でもパフォーマンスに対しての認識に食い違いがあったのですが、それもこの期間に話し合いを持つことで解消することができて、つむぎねのパフォーマンスを自分たちの

納得いく形で実現できたのが、このTWSでの二回目の公演「そう」でした。

発信力とネットワーク

つむぎねの骨格をこれらの公演を通して作ることができたのは、色々やってみていたことに挑戦させてもらえたからだと思っています。それから、まだ駆け出しのつむぎねにとって、TWSの発信力を借りることができたというのも、大きなことでした。自主公演、という形でやっていたら届かなかったような、音楽家やアーティストの方々にも見ていただく機会が持てました。これからTWSのプログラムへの参加を検討している方にも、既成のものにとらわれず、どんどん挑戦していただけたらと思っています。また、私も審査員の方とのつながりや他ジャンルのアーティストとの出会いなど、TWSでさまざまなご縁をいただけてきたので、積極的にプログラムに参加するほど、人との出会いがあり、良いネットワークをつくるチャンスになるのではないかと思います。今後の活動としては、これまではアウトプットに追われてきたので、インプットに時間をかけたいと考えています。TWSに初めて参加してから既に9年ほどの月日が経っているので、ここで一区切りつけて、もう一度新しいスタートを切りたいです。

「スクエアわいど」(アサヒ・アートスクエア、東京、2015)にてワークショップを行う宮内

つむぎねによる公演「音、粒、立ち昇り、昇れ」(「NEXT - TWS10年!」内、TWS渋谷、2011)



Photo: KENJI KAGAWA



「EXPERIMENTAL SOUND, ART & PERFORMANCE FESTIVAL」(TWS本郷、2008)にて公演終了時、つむぎねのメンバーと



「トーキョーワンダーサイト×N響 共同企画『NEW PIONEERS—一次世代の開拓者たち』」でのトーク(藤倉大×宮内康乃×山根明季子/モデレーター:岡部真一郎(音楽学者、明治学院大学教授)、TWS渋谷、2010)

The Performance that Shaped Tsumugine

I submitted my proposal to Tokyo Experimental Festival (TEF), which is run by Tokyo Wonder Site (TWS), around the time that I finished graduate school and had just formed Tsumugine. Given that open-call music contests were then only open to western musical instruments, TEF was rare in the sense that it was open to performances that transcend genres. And since the jury included such well-established artists as Toshi Ichianagi and Yosuke Yamashita, to be able to show my work to these pioneering musicians was one of the appeals of TEF to me. From this, the current basis for Tsumugine's work came about: a focus on voice, and using white costumes and light bulbs, and perform-

ing in the round. However, I didn't then believe it had gone well and felt our lack of ability was evident in that performance. It took us by complete surprise when we were awarded the first prize. The reason we could build our framework thanks to TEF is that we were given the opportunity to try our creative aspirations. Another point worthy of mention is that we were able to utilize TWS's status in the industry. We presented our work to musicians and artists whom we never could have reached if we had just organized a show by ourselves. It has been nine years since we participated in TWS for the first time, so now is a good time for us to close that chapter and open a new one.

みやうち・やすの

1980年神奈川県生まれ。情報科学芸術大学院大学メディア表現学科修了。2008年、音楽パフォーマンスグループ「つむぎね」を立ち上げる。主な活動に、「宮内康乃 わ・つむぎプロジェクト〜声を聴くワークショップ〜」(アサヒ・アートスクエア、東京、2015)、「フェスティバル/トーキョー2014『春の祭典』」(音楽担当、東京芸術劇場、東京、2014)、主な受賞に、JFC作曲賞(2011)、「EXPERIMENTAL SOUND & ART FESTIVAL」(2008)にて最優秀賞など。

Yasuno MIYAUCHI

Born in Kanagawa in 1980. Graduated with an MA in Media Creation from International Academy of Media Arts and Science (IAMAS). Started up a music performance group "tsumugine" in 2008. Recent main activities: "Yasuno Miyauchi WA-Tsumugi Project" (Asahi Art Square, Tokyo, 2015), "Festival/Tokyo 2014 The Rite of Spring" (Composer, Tokyo Metropolitan Theatre, Tokyo, 2014), Awarded "JFC Composers Award" (2011), "EXPERIMENTAL SOUND & ART FESTIVAL" Grand Prize (2008).

New Work!



独自の作曲法「つむぎねメソッド」をコミュニケーションツールになる可能性を発展させる取り組み「わ・つむぎプロジェクト」の最終発表パフォーマンス「灯音会」(アサヒ・アートスクエア Grow Up!! Artist Project 2015、東京、2015)

Photo: KENJI KAGAWA



グループ展「in the AIR」(TWS本郷、2012)では、東北の被災地を扱った作品をはじめ、戦争、被災と記憶をめぐるテーマの新作を発表。

アジアを代表する

アーティストの

ワンダーサイト滞在記



国際的に活躍するベトナムのアーティスト、ディン・Q・リーは、これまでトーキョーワンダーサイトに4回ほど滞在している。新進の作家に限らずキャリアを積んだアーティストにも出会えるのがTWSの魅力の一つだ。

ディン・Q・リーはニューヨーク近代美術館での個展(2010年)やドクメンタへの参加(2012年)、そして2015年は森美術館で個展を行うなど、アジアを代表するアーティストとして国際的に活躍しています。自分と社会の過去であるベトナム戦争と真摯に向かい合い、同時に人間への温かな視線で歴史を見つめる作品は多くの人々の共感を生んでいます。1997年に拠点をベトナムに移して10年後の2007年、ベトナム初のアートセンター「サン・アート(プラットフォームの意味)」をアーティストたちと共同設立するなどアジアのアートのキーマンとして活躍しています。トーキョーワンダーサイト(以下、TWS)とディンさんの出会いは2005年。TWSも当時、アジアのアートシーンとの連携を積極的に進めていました。ディンさんをTWSレジデンスにお誘いしたのは、そのような時。これがディンさんにとって初めてのアーティスト・イン・レジデンスとなり、同時にディンさんの活動

を始めて日本で本格的に紹介する機会となりました。アメリカから故郷ベトナムに戻ってからの激動の10年間の後、ぜひ東京でエ・ポケットのような時間のなかでいろいろと考える時間を持ってもらいたいと招待しました。2009年から、プロジェクトをベースに継続して滞在、東日本大震災後の2011年にも滞在し、ベトナムと日本の両方から、戦争や被災がどのように伝えられるかという大きなテーマに取り組みました。滞在中には、日本とアジアの若手アーティストへのメンタリングやワークショップを開催。私たちそして次世代に大きな影響を残してくれました。ディンさんのようにすでに国際的に活躍するアーティストたちのレジデンスは、そのアーティストの成果だけでなく、同時にTWSレジデンスに滞在用する若手、中堅のアーティストたちへ大きな影響を与えてくれるのです。

文=今村有策

[いまむら・ゆうさく/トーキョーワンダーサイト館長]

Artist's message /

私にとっての特別な場所
ディン・Q・リー

私は数年にわたり何度かトーキョーワンダーサイト(以下、TWS)に滞在できたことを大変嬉しく思っています。一度目の2009年には3ヶ月滞在し、当時のプログラム・ディレクターやスタッフのおかげで、パワフルに、そして心動かされながら作品を制作することができました。それは茨城県の百里基地近くに住む平和活動をしている農家の方々についての作品です。その後もワークショップや展覧会開催のために幾度か滞在をしました。これらの長期にわたる滞在により、日本のアートのコミュニティを紹介する機会もできました。その成果の一つが、2015年に森美術館を皮切りに開催された展覧会「ディン・Q・リー:明日への記憶」です。

TWSは私にとって特別なところ。ここを訪れるアーティスト、キュレーター、ダンサー、作曲家、演奏家、パフォーマーは皆素晴らしい人たちばかり。ここはアーティストにとってネットワークをつくるには天国とも言える場所で、お互いの活動を知り、将来のコラボレーションにもつながります。そしてここではトーク、ワークショップ、スクリーニング、展覧会と、いつも何かが起こっているのです。

TWSはネットワークと交流のプラットフォームを提供し、特に日本の若手アーティストにとっては非常に有意義な場所です。私がTWSで出会った若手アーティストたちは今、国際的に活躍しています。TWSでの経験が成功の大きなカギとなっているのです。TWSは、世界のなかでも最も先端的な考えを持つレジデンスだと言えるでしょう。

ディン・キュー・リー

1968年ハーティエン(ベトナム)生まれ。ホーチミン在住。1978年家族とともにアメリカへ移住。1989年カリフォルニア大学サンタバーバラ校にて美術学士課程修了、1992年ニューヨーク視覚芸術学校美術修士課程修了。近年、森美術館(東京、2015)、シャーマン現代美術基金(シドニー、2011)などで個展を開催。また「メディアシティ・ソウル2014」(ソウル市立美術館、2014)、「ヴェネチア・ビエンナーレ イタリア館」(2003)などの国際展にも多数参加。



茨城県の航空自衛隊百里基地に隣接されている百里平和公園でリサーチ中の様子(2009)



ベトナム戦争をどのように語るかを考え続け、TWSレジデンス滞在中には靖国神社も訪れた(2011)



TWSレジデンス滞在中にはアジアの若手アーティストたちへのメンタリングやワークショップも行われた(2011)

トーキョーワンダーサイトのミッションと活動

Tokyo Wonder Site Mission & Activity

トーキョーワンダーサイト(TWS)は、東京から新しい芸術文化を創造・発信するアートセンターです。「TWS本郷」、「TWS渋谷」、「TWSレジデンス」の3館を拠点に、若手クリエイターの発掘・育成・支援や、さまざまなジャンル、ステージのアーティストによる国際文化交流を目的とした展覧会やレジデンス・プログラム、教育普及事業など、「世界創造都市東京」のプラットフォームとしての活動を展開しています。

段階的・継続的なサポートでステップアップ！

1 Mission

若手クリエイターの発掘・育成・支援

若手アーティストの登竜門として公募展「トーキョーワンダーウォール」を開催。「TWS-Emerging」「TWS-NEXT」など次のステップの場も提供しています。また、作品を展示・販売する「ワンダーシード」、渋谷にあるTWSアートカフェでの展示、子供向けワークショップなどさまざまな機会を通して若手クリエイターの活動を支援しています。

Along with Tokyo Wonder Wall, an open-call program that is a steppingstone to success for young artists, TWS also organizes TWS-Emerging and TWS-NEXT as platforms for emerging artists to move on to the next stages in their careers. In addition, TWS supports young artists through presenting a wide range of opportunities such as Wonder Seeds, which exhibits and sells artworks, as well as exhibiting works at TWS Art Cafe in Shibuya, and organizing workshops for children.



トーキョーワンダーウォール
Tokyo Wonder Wall



TWS-Emerging 2015



ワンダーシード 2016
WONDER SEEDS 2016



TWS-NEXT @tobikan「クレアボヤンス」
TWS-NEXT @tobikan "clairvoyance"



Tokyo Wonder Site Art Cafe WINDOWS



夏のこどもワークショップ
Summer Kids Workshop

東京・各国で年間約50名のクリエイターが制作・交流！

2 Mission

国際文化交流

才能あるアーティスト・クリエイターを世界に派遣し、また東京へも迎え入れ、リサーチや創作の機会を提供するレジデンス事業を展開。その成果を展覧会やオープン・スタジオで紹介しています。これまでの活動をとおり、世界的なアートセンターとのネットワークを構築しています。

TWS organizes vibrant creator-in-residency programs, sending Japanese artists abroad as well as hosting overseas artists in Tokyo who want to conduct research and create new projects. In order to showcase the results of their research and work, TWS also organizes exhibitions as well as open studio events, developing its activities by utilizing an international network of art centers across the globe.



OS-XX ～都市未来のオペレーション・システムへの序章～
OS-XX -Prelude to the operation systems of the future city



クリエイター・イン・レジデンス・プログラム
Creator-in-Residence Program



トーキョー・ストーリー2015
TOKYO STORY 2015

伝統芸能、音楽、美術、ダンス、あらゆる表現が出会う！

3 Mission

創造における実験を応援

既存のジャンルにとどまらない実験的なプロジェクトを紹介する「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル」、表現を社会に届ける企画力を養う現代音楽企画ゼミや展覧会企画公募などとおして、創造における実験の機会を提供しています。

TWS offers opportunities for creative experimentation through Tokyo Experimental Festival, which introduces projects that transcend conventional categories and fields, the Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists, which cultivates abilities to disseminate creativity, and the Emerging Artists Support Program.



トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル
TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL – Sound, Art & Performance



若手のための現代音楽企画ゼミ
Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists



展覧会企画公募
Emerging Artists Support Program

TOKYO

WONDER SITE

Annual Report 2015

凡例

Explanatory Notes

人名をフルネームで記載する場合の姓・名の順は、特に指定がない場合は各言語における標記の順に従った。
Names are written in the order for names used in each respective language with the exception of Japanese names, which are written in the Western order (first name, surname).

アーティスト、クリエイター、委員、講師の名前は敬称を省略し、委員、講師の肩書きは事業開催当時のものを記載した。
Honoric titles of artists, creators, jury members and lecturers have been omitted.
Titles of jury members and lecturers appear as they were at the time of each respective event.

アーティスト、クリエイターのプロフィールは、2016年3月現在の情報を記載した。
The profiles of artists and creators appearing in this publication are current as of March 2016.

プロフィールは、アーティスト、クリエイターより提供のあった資料に基づき編集・作成した。
Profiles have been created and edited based on documents provided by the artists and creators.

作品情報は、作家名、作品名、制作年の順に記載した。
Information about artworks is listed in the following order: artist name, title of artwork and year of production.

展覧会情報は、「展覧会名」(会場名、都市名、年)の順。ただし、海外での展覧会は会場名、都市名、国名の順とし、首都や世界都市においては国名を省略した。

Information about exhibitions is written in order of exhibition title (venue name, city name, year). However, exhibitions held overseas are written in order of venue name, city name, and country name, though country names of capitals and major international cities have been omitted.

作品は《》、展覧会名は「」、書名、映画タイトル名は『』で示した。
Artwork and publication titles are written in italic font. Quotation marks are used for exhibition titles.

写真クレジット: 展示風景、活動風景、およびポートレートの撮影者は奥付にまとめた。アーティスト、クリエイターから提供された写真には、クレジットを記載した。
Photo credits: Credits for photographers who took photos of exhibition views, activities and portraits are summarized in the colophon. Credits are included for photos provided by the artists and creators.

著作権: 特に記載のない場合、著作権はすべてトーキョーワンダーサイトに帰属する。
Copyright: All rights reserved by Tokyo Wonder Site unless otherwise specified.

はじめに

トーキョーワンダーサイト (TWS) は東京から新しい芸術文化を創造・発信する先駆的なアートセンターとして、2001年の開館以来、多様なプログラムを実施してきました。2015年度は前年に青山から墨田区へ移転したTWSレジデンスが年間を通して稼働し、41組のクリエイターが東京で滞在制作やリサーチなどの活動を行いました。また、公募プログラムには海外からも多数の応募があり、TWSは東京そして世界のアートの拠点として、認知されています。

「トーキョーワンダーサイト アニュアル 2015」では、2015年度のプログラムや参加クリエイター315組の紹介に加え、TWSのプログラムに参加し、活動の場を広げている30代のアーティストへのインタビューを掲載しています。また、TWS 青山：クリエイター・イン・レジデンスに複数回滞在し、一緒にプロジェクトを行った世界的なアーティスト、ディン・Q・リーからのメッセージや2015年度のプログラムにご協力をいただいた審査員やクリエイターにご寄稿いただき、事業報告書の域を超えたTWSの生きた活動を伝えるツールとなるよう、作成・発行いたしました。TWSのプログラムに挑戦したことで活躍の場が広がったクリエイターたちや、公募展、海外派遣など段階的・継続的なTWSの育成プログラムに、ぜひ注目していただきたいと思います。

TWSでは、これからも若手アーティストやアーティストを目指す若い世代が飛躍していく上での有効な場となり、また、中堅のクリエイターがTWSの持つ国際的なネットワークを通じて、更なる活動を進めていけるよう、プログラムの充実を図っていきます。TWSが掲げている3つのミッション、「若手クリエイターの発掘・育成・支援」「国際文化交流」「創造における実験を応援」を着実に継続していくことが、日本の創造力を発信し、芸術文化によって世界に貢献していくことであると信じ、活動を続けて参ります。今後もこれまで同様皆様にご支援をいただきますようお願い申し上げます。

トーキョーワンダーサイト館長
今村有策

Introduction

Tokyo Wonder Site (TWS) has organized a wide range of programs since its opening in 2001 as a pioneer of art centers, creating and presenting new art and culture from Tokyo. Last year, after its relocation from Aoyama to Sumida City in the year before, TWS Residency carried on a full-scale operation with 41 creators/groups coming from around the world, who created works and conducted a research in Tokyo. We received a great number of applications to our open-call residency programs, indicating a wide recognition of TWS as a hub of art in Tokyo and in the world.

Along with the introduction of 315 artists/groups who took part in TWS programs in 2015, *Tokyo Wonder Site Annual Report* features interviews with artists, who are in their thirties and have successfully built their career after participating in TWS programs. Also included is the message by the internationally recognized artist Dinh Q. Lê, who has participated in several residency programs at TWS Aoyama: Creator-in-Residence and developed projects with us. We are pleased to present the text contributed by jury members and creators as well, who cooperated and supported our programs in 2015. The publication is more than a mere annual report and introduces vibrant activities that TWS conducted in Tokyo. We hope that the readers will find it interesting to learn about the episodes of the creators who developed their artistic practices by participating in TWS programs and the ideas of the step-by-step programs that TWS offers, including open-call exhibitions and international residency.

Tokyo Wonder Site will further enhance programs for young and emerging artists to cultivate their artistic talents and for established artists to further expand their activities through the international network we have. We wish to continue advancing our three missions to discover, nurture, and promote emerging creators, to promote international cultural exchange, and to encourage creative experiments, and believe that our continued efforts in supporting creativity and cultural activities in Japan will contribute to the world.

Yusaku Imamura
Director, Tokyo Wonder Site

トーキョーワンダーサイト

アニュアル 2015

目次

001

Meets TWS

029

ドキュメント

105

レビュー

156

施設案内

Tokyo Wonder Site

Annual Report 2015

INDEX

001

Meets TWS

029

Document

105

Reviews

156

General information

トーキョーワンダーサイト アニュアル 2015 : ドキュメント Tokyo Wonder Site Annual Report 2015 : Document



トーキョーワンダーウォール p.030
(2015入選作品展、TWW都庁2014・2015)
Tokyo Wonder Wall



TWS-Emerging 2015 p.036
TWS-Emerging 2015



ワンダーシード 2016 p.044
WONDER SEEDS 2016



TWS-NEXT @tobikan「クレアボヤンス」 p.046
TWS-NEXT @tobikan "clairvoyance"



Tokyo Wonder Site Art Cafe WINDOWS p.050
Tokyo Wonder Site Art Cafe WINDOWS



夏のこどもワークショップ p.051
Summer Kids Workshop



OS-XX ～都市未来のオペレーション・システムへの序章～ p.052
OS-XX -Prelude to the operation systems of the future city



クリエイター・イン・レジデンス・プログラム p.057
Creator-in-Residence Program



トーキョーワンダーサイト レジデンス成果発表展 p.081
「トーキョー・ストーリー2015」
TWS Creator-in-Residence Exhibition "TOKYO STORY 2015"



トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル Vol.10 p.087
TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL
- Sound, Art & Performance Vol.10



若手のための現代音楽企画ゼミ p.098
Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists



第9回展覧会企画公募 p.100
The 9th Emerging Artists Support Program



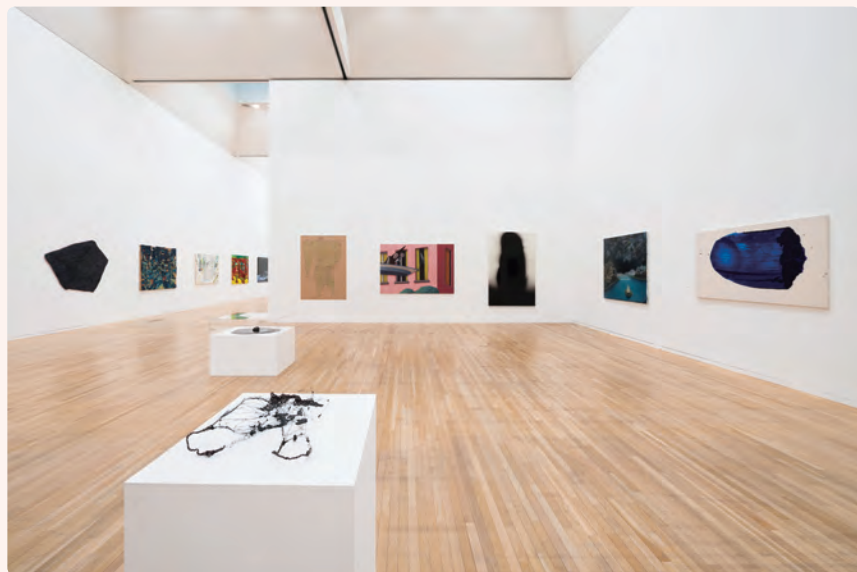
トーキョーワンダーウォール
Tokyo Wonder Wall

2000年から始まった若手アーティストの登竜門 16年目の開催

「トーキョーワンダーウォール (TWW)」は全国の若手アーティストの育成・支援を目的とし、作品発表の機会を提供する公募プログラムです。東京都とトーキョーワンダーサイトが連携して実施しています。2015年度は、683名の応募者の中から89名が入選し、東京都現代美術館で開催する入選作品展で作品を発表。入選者の中からTWW賞に選ばれた12名が、東京都庁で実施する「TWW都庁2015」で展示の機会を得ました。さらに、入選者には個展形式の展覧会「TWS-Emerging」への参加のチャンスなど、更なるステップアップのプログラムを用意しています。

The 16th iteration of this gateway to success for young artists since 2000

Tokyo Wonder Wall (TWW) is an open-call program whose aim is to nurture and support young artists from all over the country by offering opportunities to present work. It is organized in partnership between Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Wonder Site. In fiscal year 2015, 89 artists were selected from among 683 applicants to present their work in an exhibition held at the Museum of Contemporary Art Tokyo. The 12 artists subsequently selected from among the 89 participants for the TWW Award were then given the opportunity to participate in an exhibition at the Tokyo Metropolitan Government Building. In addition, the winners also had the chance to participate in TWS-Emerging, a series of solo-show exhibitions offered by TWS as one of a number of career development programs for artists.



トーキョーワンダーウォール公募2015 入選作品展
Tokyo Wonder Wall 2015

トーキョーワンダーウォール公募2015 入選作品展

Tokyo Wonder Wall 2015

2015.6.6(土)～6.28(日)

会場：東京都現代美術館 企画展示室3階

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

協力：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

「トーキョーワンダーウォール (TWW) 公募2015」では、応募総数683名から入選した89名のアーティストによる作品を約1ヶ月にわたって東京都現代美術館で展示しました。入選作品からTWW賞に選ばれた平面作品部門10名と立体・映像・インスタレーション作品部門2名には、東京都庁での展示の機会が提供されました。

In Tokyo Wonder Wall (TWW) 2015, the work of 89 artists selected from 683 applicants was exhibited for a one-month period at the Museum of Contemporary Art Tokyo. From these finalists winners were then selected for the TWW Award. These 10 artists from the 2D section and two artists from the 3D, video and installation section were given the opportunity to present their work in an exhibition held at the Tokyo Metropolitan Government Building.

〈審査員〉

石原慎太郎

(作家)

大巻伸嗣

(美術家、東京藝術大学准教授)

鴻池朋子

(美術家)

杉戸 洋

(美術家、東京藝術大学准教授)

丸山直文

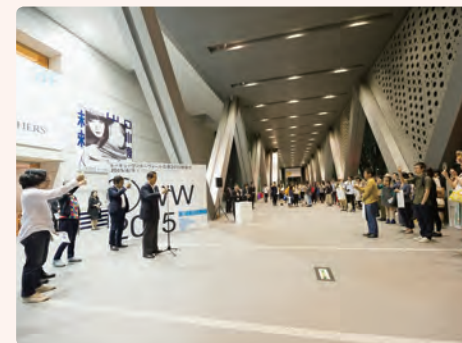
(美術家、武蔵野美術大学教授)

山村浩二

(アニメーション作家、東京藝術大学教授)

今村有策

(トーキョーワンダーサイト館長)



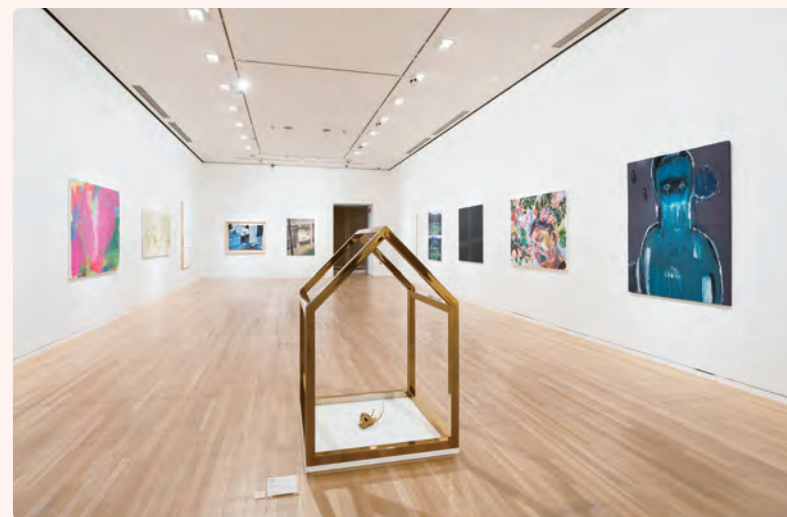
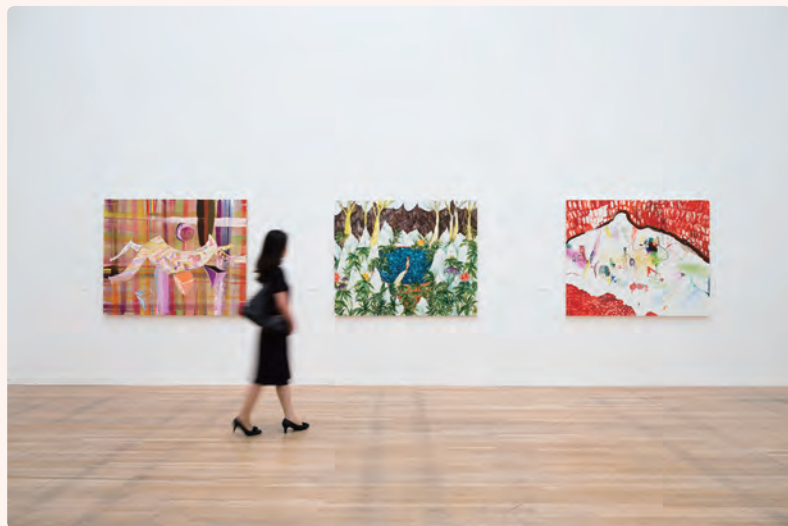
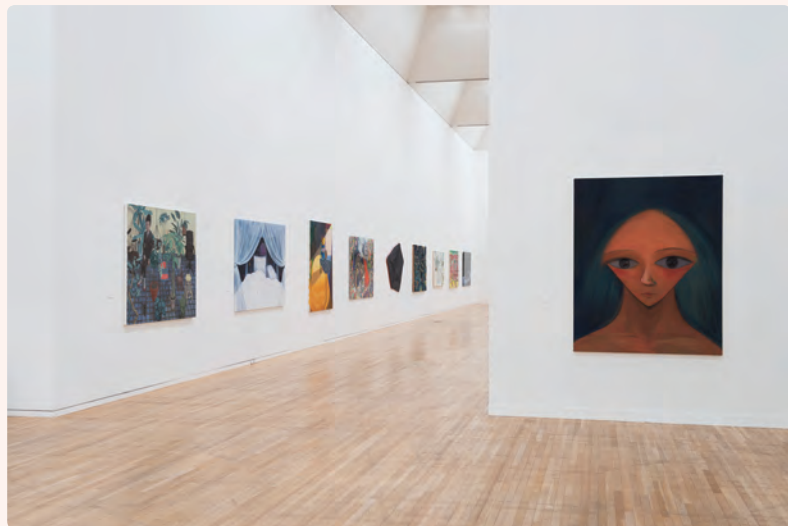
トーキョーワンダーウォール賞

〈平面作品部門〉

稲川江梨	香月美菜	庄司朝美	タナカヤスオ	千原真実
中尾慶一郎	中野奈々恵	水上愛美	村上 早	吉田裕亮

〈立体・映像・インスタレーション作品部門〉

片貝葉月	桜間絨子
------	------



トーキョーワンダーウォール審査員賞

〈平面作品部門〉

赤池千怜	鴻池朋子賞
小川潤也	今村有策賞
中尾慶一郎	丸山直文賞
中野奈々恵	杉戸 洋賞
渡部末乃	石原慎太郎賞

〈立体・映像・インスタレーション作品部門〉

片貝葉月	山村浩二賞
長沢優希	大巻伸嗣賞

トーキョーワンダーウォール都庁2014

Tokyo Wonder Wall 2014 at Tokyo Metropolitan Government Building

〈平面作品部門〉

2015.4.9(木)～4.30(木) 福本健一郎 2015.5.8(金)～5.28(木) 黒宮菜葉

2015.6.4(木)～6.25(木) 白田一馬 2015.7.2(木)～7.23(木) 大人倫菜

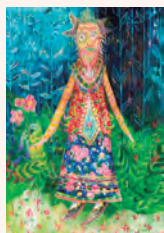
2015.8.6(木)～8.27(木) 須藤晋平 2015.9.3(木)～9.24(木) 飯田美穂

会場：東京都庁第一本庁舎3階 南側空中歩廊

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

「トーキョーワンダーウォール（TWW）都庁」は、「TWW公募」でTWW賞に選出されたアーティストが東京都庁で作品を発表する展覧会です。「TWW公募2014」平面作品部門で入賞した12名のうち、6名が展示しました。

Tokyo Wonder Wall (TWW) is an exhibition held at the Tokyo Metropolitan Government Building showcasing the work of artists selected for the TWW Award following the TWW. The participants were 6 artists from among 12 who had won the award in the 2D section of the TWW 2014.



福本健一郎《オシャレな君に贈る花》2014



黒宮菜葉《see-through boy》2014



白田一馬《△!クロバット?》2014



大人倫菜《絵画における私の45日間の冒険》2013



須藤晋平《INON》2014



飯田美穂《2=1》2014

トーキョーワンダーウォール都庁2015

Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building

〈平面作品部門〉

2015.10.8(木)～10.29(木) 千原真実 2015.11.5(木)～11.26(木) 中野奈々恵

2015.12.3(木)～12.24(木) 稲川江梨 2016.1.7(木)～1.28(木) 庄司朝美

2016.2.4(木)～2.18(木) 吉田裕亮 2016.2.25(木)～3.10(木) 中尾慶一郎

2016.3.15(火)～3.29(火) 水上愛美 会場：東京都庁第一本庁舎3階 南側空中歩廊

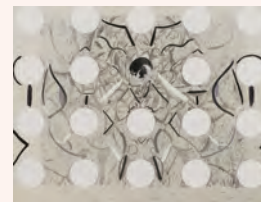
〈立体・映像・インスタレーション作品部門〉

2016.1.15(金)～1.28(木) 片貝葉月、桜間綾子 会場：都議会議事堂1階 都政ギャラリー

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

2015年度の「トーキョーワンダーウォール（TWW）都庁2015」では、「TWW公募2015」に入賞した平面作品部門7名、立体・映像・インスタレーション作品部門2名の作品を展示しました。

In Tokyo Wonder Wall (TWW) 2015, the work of seven artists who won awards in the 2D section and two artists from the 3D, video and installation section of TWW 2015 was exhibited.



千原真実《Untitled》2015



中野奈々恵《二時間半の永遠》2015



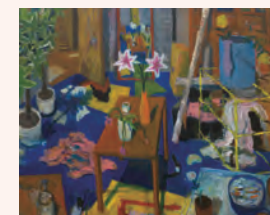
稲川江梨《階段》2015



庄司朝美《うしろ》2015



吉田裕亮《神さまの存在》2015



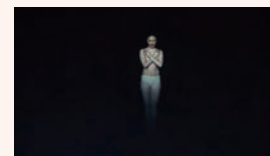
中尾慶一郎《部屋》2015



水上愛美《vision 4》2014



片貝葉月《感情纏身装身具／見世棚》2015



桜間綾子
《バラ色の人生 La Vie En Rose》2014

TWS-Emerging 2015

トーキョーワンダーウォール入選者のステップアップ・プログラム

「TWS-Emerging」は、公募展「トーキョーワンダーウォール」の入選者の中から希望者を募り、審査を経て選出されたアーティストの個展の開催を支援するプログラムです。2015年度は21名が選ばれ、トーキョーワンダーサイト渋谷を会場に7期にわたって展覧会を開催。各アーティストは作品の制作に加え、作品解説、展覧会タイトルの決定、展示レイアウトや照明にいたるまで、個展に向けたさまざまな事柄に挑戦しました。また、展覧会初日に行うゲストを招いたアーティスト・トークでは、作品や制作背景などを自分の言葉で伝えました。このようなプロセスを経ることで、今後の活動に必要な基本的スキルを身につけていきます。

※P.131～141にアーティスト・トークのゲストによる講評文を収録しています

A program for the winners of Tokyo Wonder Wall to take the next step

TWS-Emerging is a program offering support to artists in the form of solo exhibitions. Participants are screened and selected from applicants among the finalists of the open-call exhibition Tokyo Wonder Wall. In fiscal year 2015, 21 artists were selected to participate in exhibitions held at TWS Shibuya over seven terms. In addition to producing their work, the respective artists were challenged to consider various aspects of holding a solo exhibition, such as providing commentary about their work, deciding the exhibition title, and considering the layout and lighting. On the opening day, an artist talk was also held for inviting guest, where the artists conveyed in their own words about their work and the background behind its creation. By going through such a process, the participants are able to acquire basic skills fundamental to future activities as artists.

※P.131～141 Reviews by the guests at artist talks.



第6期アーティスト・トークの様子

TWS-Emerging 2015 第1期 (Part 1)

2015.4.11(土)～5.10(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷 協力：キャノン株式会社(村上賀子)

長田堅二郎 Kenjiro NAGATA

In between



1979年大分県生まれ。2005年東京藝術大学大学院修士課程彫刻専攻修了。主な展覧会に「Where Threads Lead」(Frantic Gallery、東京、2015)、「長田堅二郎 平戸真児 2人展『俯瞰の形象』」(滯画廊、東京、2014)。「第12回大分アジア彫刻展」大賞(朝倉文夫記念館、大分、2014)など。

Born in Oita in 1979. Graduated with an MA in Sculpture from Tokyo University of the Arts in 2005.

大山紗智子 Sachico OYAMA

ない(ある)場所 There are no memories

1986年愛知県生まれ。愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻在籍。主な展覧会に「エミリーのなすがまま」(Photo & Art Gallery ブシユク、愛知、2012)、「きょせんアワー」(青樺画廊、東京、2007)など。

Born in Aichi in 1986. Enrolled in an MA in Oil Painting at Aichi University of the Arts in 2014.



村上賀子 Iwauko MURAKAMI

HOME works 2015



1986年宮城県生まれ。2012年武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻写真コース修了。主な展覧会に「写真新世紀2012東京展」(東京都写真美術館、2012)、「HOME works 2011」(Gallery NIW、東京、2012)。「第59回朝日広告賞」準朝日広告賞(東京、2011)など。

Born in Miyagi in 1986. Graduated with an MA in Photography from Musashino Art University in 2012.

TWS-Emerging 2015 第2期 (Part 2)

2015.5.23(土)~6.21(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

謝花翔陽 Shoyo JAHANA

Magical Heteronomy



1987年沖縄県生まれ。2013年東京藝術大学美術研究科修士課程修了。主な展覧会に「女、彫刻家、音楽、5、好運と満尽」(bambinart gallery、東京、2014)、「アメジスト/月に向かって吠え立てる犬/そして僕は橋を焼く」(bambinart gallery、東京、2013)。「アートアワードトーキョー丸の内2013」グランプリ、(行幸地下ギャラリー、東京、2013)など。

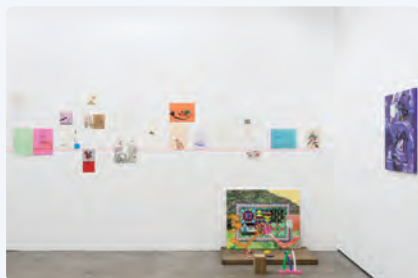
Born in Okinawa in 1987. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2013.

大崎土夢 Tomu OSAKI

さいしんみどうとさんしん The New Temple and Sanshin

1984年福岡県生まれ。2007年宝塚造形芸術大学造形学部卒業。主な展覧会に「OPEN the Door」(D&DEPARTMENT、大阪/東京、2005)、「OMOMA Subway」(AD&A gallery、大阪、2008)。「ブルームバーグ・パヴィリオン プロジェクト」入賞(2012)、「トーキョーワンダーウォール公募2014」トーキョーワンダーウォール賞(東京都現代美術館、2014)など。

Born in Fukuoka in 1984. Graduated with a BA from Takarazuka University of Art and Design in 2007.



笹本明日香 Asuka SASAMOTO

かけらと浮かぶ Floating with my pieces



1984年アラスカ州(アメリカ)生まれ。2008年多摩美術大学絵画学科油画科卒業。主な展覧会に「ワンダーシード2014」(TWS渋谷、2014)、「ワンダーシード2013」(TWS本郷、2013)、「ホルベインPANPASTEL展」(白木屋ギャラリー、栃木、2011)など。

Born in Alaska in 1984. Graduated with a BFA in Oil Painting from Tama Art University in 2008.

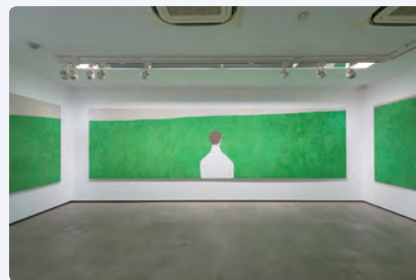
TWS-Emerging 2015 第3期 (Part 3)

2015.7.4(土)~8.2(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

阿部友美 Tomomi ABE

records



1989年茨城県生まれ。東北芸術工科大学芸術学部美術科日本画コース在籍。主な展覧会に「七人展」(こんばる前室、東京、2014)、「上野の森美術館大賞展」(上野の森美術館、2013)、「きんぎょのかい」(フリュウギャラリー、東京、2012)など。

Born in Ibaraki in 1989. Enrolled in an MA in Japanese Painting at Tohoku University of Art and Design.

須藤美沙 Misa SUDO

フォールスカラー False color

1982年群馬県生まれ。2007年埼玉大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修修了。主な展覧会に「ワンダーシード2014」(TWS渋谷、2014)、「ワンダーシード2011」(TWS渋谷、2011)など。

Born in Gunma in 1982. Graduated with an MFA from Saitama University in 2007.



菅 雄嗣 Yuushi SUGA

Enter the 2.5D -No paint no form-



1988年長崎県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画科油画専攻在籍。主な展覧会に「東京藝術大学卒業作品展」(東京都美術館、2014)、「GEISAI#19」(東京都立産業貿易センター台東館、2013)。「トーキョーワンダーウォール公募2014」トーキョーワンダーウォール賞(東京都現代美術館、2014)。

Born in Nagasaki in 1988. Enrolled in an MFA in Oil Painting at Tokyo University of the Arts.

TWS-Emerging 2015 第4期 (Part 4)

2015.8.15(土)~9.13(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

江藤 佑一 Yuichi ETO

漂流シマ Drift



1989年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻在籍。主な展覧会に「東京藝術大学卒業・修了作品展」(東京都美術館、2015)、「アート・コミュニケーション@3331」(アーツ千代田3331、東京、2014)など。

Born in Tokyo in 1989. Enrolled in an MA in Sculpture at Tokyo University of the Arts.

豊田 奈緒 Nao TOYODA

MISS SCORPIUS

1990年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻在籍。主な展覧会に「Mercury」(練馬区立美術館 企画展示室Ⅰ、Ⅱ、東京、2012)、「親愛なる果実」(ローワー・アキハバラ、東京、2012)。「2012年度 東京造形大学卒業研究・卒業制作展」Zokei賞(東京造形大学、2013)。

Born in Tokyo in 1990. Enrolled in an MFA in Oil Painting at Tokyo University of the Arts.



石川 里美 Satomi ISHIKAWA

錯覚の生 A perceptual illusion of Life



1987年東京都生まれ。2011年東京藝術大学美術学部建築科卒業。主な展覧会に「SYC 東京1企画展」(ZOOMAN、東京、2014)、「日本フラワーデザイン大賞2014」(パシフィコ横浜、2014)など。

Born in Tokyo in 1987. Graduated with a BFA in Architecture from Tokyo University of the Arts in 2011.

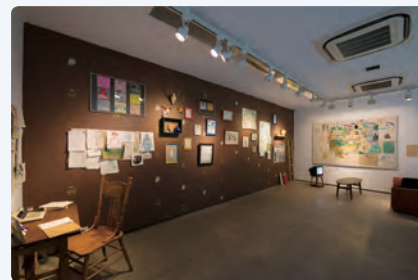
TWS-Emerging 2015 第5期 (Part 5)

2015.9.26(土)~10.25(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷 協賛：株式会社リアークスファインド(大人倫菜)

大人 倫菜 Rina OHITO

ドローイングルーム Drawing room



1987年鹿児島県生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻在籍。主な展覧会に「東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻3年一展」(アーツ千代田 3331、東京、2014)。「トーキョーワンダーウォール公募2014」トーキョーワンダーウォール賞(東京都現代美術館、2014)など。

Born in Kagoshima in 1987. Enrolled in an MFA in Oil Painting at Tokyo University of the Arts.

木浦 奈津子 Natsuko KIURA

過ぎゆく景色 The passed landscapes

1985年鹿児島県生まれ。2010年尾道大学大学院美術研究科油画専攻修了。主な展覧会に「今日を過ごす方法」(高松市塩江美術館、2014)、「ある日の景色」(White Gallery、鹿児島、2014)、「切り取る風景」(Takashi Somemiya Gallery、東京、2014)。

Born in Kagoshima in 1985. Graduated with an MA in Oil Painting from Onomichi University in 2010.



野島 良太 Ryota NOJIMA

絵くんと絵さんが絵しても絵はできない
If a painting gathers another painting, it can't become the painting



1987年東京都生まれ。2012年武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業。「平成23年度 武蔵野美術大学卒業・修了制作展」卒業制作優秀賞(武蔵野美術大学、東京、2012)など。

Born in Tokyo in 1987. Graduated with a BA in Oil Painting from Musashino Art University in 2012.

TWS-Emerging 2015 第6期 (Part 6)

2015.11.7(土)~12.6(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

渡邊拓也 Takuya WATANABE

作った(られた)ものから考える。To Think: Once it's Made (by)



1990年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻在籍。主な展覧会に「多摩美術大学卒業制作展・大学院修了展2013」(多摩美術大学、東京、2014)、「ニチジョウノサケメ」(トキ・アートスペース、東京、2014)。「多摩美術大学卒業制作展・大学院修了制作展2013」卒業制作優秀作品(多摩美術大学、東京、2014)など。

Born in Tokyo in 1990. Enrolled in an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts.

北村拓之 Hiroyuki KITAMURA

Desire / Fixation

1989年広島県生まれ。2013年多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科卒業。

Born in Hiroshima in 1989. Graduated with a BFA in Graphic Design from Tama Art University in 2013.



黒河 希 Nozomi KUROKAWA

畳からの眺め The view from a tatami



1990年愛媛県生まれ。2015年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。主な展覧会に「シェル美術賞展2014」(国立新美術館、東京、2014)、「平成24年度 武蔵野美術大学造形学科卒業制作優秀作品展」(武蔵野美術大学美術館、東京、2013)など。

Born in Ehime in 1990. Graduated with an MFA in Oil Painting from Musashino Art University in 2015.

TWS-Emerging 2015 第7期 (Part 7)

2015.12.19(土)~2016.1.24(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

朴 ジヘ Jihye PARK

Freezing love



1985年ソウル生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻在籍。主な展覧会に「東京藝術大学留学生展」(取手市役所アートギャラリーきらり、茨城、2015)、「Challenge Art in Japan 2015」(韓国文化院ギャラリーMI、東京、2015)。「群馬青年ビエンナーレ2015」奨励賞(群馬県立近代美術館、2015)など。

Born in Seoul (Korea) in 1985. Enrolled in a Ph.D in Oil Painting at Tokyo University of the Arts.

福本健一郎 Kenichiro FUKUMOTO

夢の中へ Into the dream

1986年広島県生まれ。2014年東京藝術大学大学院美術研究科絵画油画専攻修了。主な展覧会に「3331 ART FAIR 2015」(アーツ千代田3331、東京、2015)など。「アートアワードトーキョー丸の内2014」今村有策賞(行幸地下ギャラリー、東京、2014)、「トーキョーワンダーウォール公募2014」トーキョーワンダーウォール賞(東京都現代美術館、2014)など。

Born in Hiroshima in 1986. Graduated with an MFA in Oil Painting from Tokyo University of the Arts in 2014.



大岩雄典 Euske OIWA

わたしはこれらを展示できてうれしいし、あなたはこれらを見てうれしく、これらは展示されてうれしい Pleasure



1993年埼玉県生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科在籍。主な展覧会に「シェル美術賞展2014」(国立新美術館、東京、2014)、「ルールーブルブル」(ORANGE GALLERY、東京、2014)など。

Born in Saitama in 1993. Enrolled in Design at Tokyo University of the Arts.



ワンダーシード 2016

WONDER SEEDS 2016

BUY=SUPPORT 若手アーティストの作品を展示・販売する企画

「ワンダーシード」は、“BUY=SUPPORT”（作品購入が支援となる）をコンセプトに、若手アーティストを対象に公募を行い、入選作品を展示・販売する展覧会です。S10号以下の作品を通して、多くの美術愛好家に若手アーティストの良作に触れていただく場をつくることを目的としています。2015年度は、過去のワンダーシード参加アーティストとキュレーターを招いた関連トーク・イベントを実施。ワンダーシードに応募する若い世代にむけて、公募の利用を含めた公的支援の重要性、アーティストとキュレーターの協働、アーティストに必要な発信力といった3つのトピックのもと、充実した制作活動を行うためのヒントを伝える場となりました。

A program exhibiting and selling the work of young artists to support them financially

Wonder Seeds is an exhibition that takes as its concept the purchase of artwork as a form of support for the artist. It starts with an open call targeting young artists, and selected work is exhibited and offered for sale. Its objective is to create a platform where a great many art lovers can appreciate the excellent work of young artists, made more accessible due to the small size of presented works. In fiscal year 2015, talks were held, bringing together curators and participants of previous Wonder Seeds exhibitions. As the message towards the younger generation, the talks became a juncture for learning about how to lead a fulfilling career as an artist with the topic of the importance of public support, such as open-call exhibitions, as well as cooperation between artists and curators, and the necessity for artists to be able to convey their ideas.



ワンダーシード 2016
WONDER SEEDS 2016

2016.2.13(土)～3.20(日・祝)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

応募者：435名

入選者：83名

販売点数：50点

〈審査員〉

石原慎太郎(作家)

浦野むつみ(アラタニウラボ代表)

鴻池朋子(美術家)

小山登美夫(小山登美夫ギャラリー代表)

吉野誠一(コレクター)

今村有策(トーキョーワンダーサイト館長)



〈関連トーク・イベント〉

2016.3.6(日)

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

ゲストアーティスト：川村麻純(ワンダーシード2009出品)、近藤恵介(ワンダーシード2006出品)、平川恒太(ワンダーシード2007, 2008出品)、平子雄一(ワンダーシード2009出品)

モデレーター：中野仁詞(神奈川芸術文化財団 キュレーター)

TWSプログラム参加アーティストのネクスト・ステップを支援する企画展

「TWS-NEXT@tobikan」は、TWS-Emergingやレジデンス・プログラム等、トーキョーワンダーサイトの事業に参加した若手アーティストを継続的に支援するために東京都美術館で開催しました。5組の作家が、透視、千里眼、優れた洞察力という意味を持つ言葉「クレアボヤンス」をテーマに、私たちの身の回りに存在しながらも目には見えない事象の可視化を試みました。それぞれのアーティストは2011年に起きた東日本大震災を経験し、今まで気づいていなかったことや、多くの見過ごされてきたことに、これまで以上に高い意識をもって制作活動を行っています。会期中は本展のために新たに制作された作品に対して多くの来場者から質問が寄せられ、作品をととしてアーティストと来場者との間で双方向の対話をもたらされました。

An exhibition supporting participants in TWS programs to reach the next stage in their careers

TWS-NEXT @tobikan is an exhibition held at Tokyo Metropolitan Art Museum to provide continuing support to the young artists who participated in TWS-Emerging, the residence program and other such programs run by Tokyo Wonder Site. Taking the theme of 'clairvoyance', which signifies extrasensory perception or profound insight, five artists attempted to visualize phenomena existing around us that are invisible to the eye. Having each experienced the Great East Japan Earthquake that occurred in 2011, the participating artists are producing works with a keen awareness of things that had previously gone unnoticed or had been overlooked until now. During the event, questions from a great many visitors were received in relation to the works newly produced for this exhibition, leading to a reciprocal dialogue between the artists and visitors through the artwork.

2016.2.19(金)~3.6(日)

会場：東京都美術館 ギャラリーB

協力：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

参加アーティスト：鎌田友介、three、平川ヒロ、増本泰斗、三原聡一郎



TWS-NEXT @tobikan
「クレアボヤンス」
TWS-NEXT @tobikan
"clairvoyance"

鎌田友介 Yusuke KAMATA

石油産業とそれに関わる建築家のリサーチから見出した「垂直性」を軸として、設計用のドラフターや図面収納棚など、建築家の部屋を彷彿とさせるインスタレーションを発表。置かれたものを観る人が読み解き、ある建築家の思考を探る展示となりました。

With its drafter for designs and storage shelves for blueprints, this installation was reminiscent of an architect's room and pivoted on the theme of "verticality," which was discovered through research into the oil industry and the architects who work within it.

1984年神奈川県生まれ。2013年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。主な展覧会に「D Construction Atlas」(京都芸術センター、2014)、「D Construction」(児玉画廊、京都、2013)、「TWS-Emerging 2010: Other Perspectives」(TWS本郷、2010)など。

Born in Kanagawa in 1984. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2013.



《Y軸の消失点/建築家の部屋》2016
Vanishing point of Y-axis,
Room of the Architect, 2016

three

福島で活動が続けるアーティストグループ。彼らの身近で拾ったものを詰めた大量の試験管を、円を描くように並べました。それを鑑賞者が検知器によって1本ずつ調べるインタラクティブな作品。東日本大震災から5年が経つなかで、人々の心に潜む福島に対する先入観などの可視化を試みました。

This interactive work used a large number of test tubes filled with familiar objects collected by the artist and as well as detectors. The work was an attempt to give visible form to preconceptions held about Fukushima following the Great East Japan Earthquake.



1986年福島県生まれ。2009年に結成された3人のグループ。主な展覧会に「three is a magic number 11」(西武渋谷店、東京、2015)、「TWS-Emerging 2011: three is a magic number 3」(TWS本郷、2011)など。「トーキョーワンダーウォール公募2010」立体・インスタレーション作品部門にて大賞受賞。
Born in Fukushima in 1986. Activity started in 2009.

《CAUTION Not Contaminated Do not Care》
2016

平川ヒロ Hiro HIRAKAWA

ベルリンで出会ったウイグル人との対話や、彼の故郷である新疆ウイグル自治区を巡り採集したものによるインスタレーション。現地に関し聞き調べた情報と実際に体験して認識することの違いを提示し、日常が極私的な物語のようなものであることを示唆しました。

This installation depicted a dialogue between the artist and someone from Uyghur whom the artist met in Berlin, in addition to various things collected during a tour of Xinjiang Uyghur Autonomous Region, the hometown of the person the artist encountered.

1984年佐賀県生まれ。2009年愛知県立芸術大学美術学部油画科卒業。ベルリン芸術大学造形芸術専攻在籍。主な展覧会に「楽園創造(パラダイス)—芸術と日常の新天地—Vol.1」(Gallery α M、東京、2013)。「トーキョーワンダーウォール公募2009」平面作品部門にて大賞受賞。

Born in Saga in 1984. Graduated with an MA in Oil Painting from Aichi University of the Arts in 2009. Enrolled at Berlin University of the Arts.



《私は水が好き》2016
(プロジェクト「N.W.の部屋の白い壁」の部分)
I like water (one of the project
“white wall paper of N.W.’s room”), 2016

増本泰斗 Yasuto MASUMOTO

美術館の館内や備品を撮影し、写し出されたものの名前を、いつもとは異なる読み方で読み上げた映像作品として展示室に設置。日常に使う言葉を少し変化させるだけで、社会の制度や私達の常識が解きほぐれ、新しいものの見方が生まれることを問い掛けました。

This video installation uses made use of various locations in the exhibition space, in which the names of equipment and other objects that were filmed inside the art museum appeared on screen read differently to how they would normally.



1981年広島県生まれ。2006年東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアアート専攻修了。主な展覧会に「Positive Space」(時代美術館、広州、中国、2014)、「クリテリウム 83」(水戸芸術館、茨城、2012)など。2010年La Chambre Blanche(ケベック)レジデンス・プログラム推薦。

Born in Hiroshima in 1981. Graduated with an MFA in Media Art from Tokyo Polytechnic University in 2006.

《第四名詞》2016
Fourth Noun, 2016

三原聡一郎 Soichiro MIHARA

微生物を用いた未来の発電システムの可能性を考え、エネルギーの概念を生命の観点から捉え直すプロジェクト。台の上に5つの素材を使った装置が置かれ、近い未来に起こりえる「自然としての人工物」のスタディを提示しました。

This project considered the possibilities for future systems of power generation using microbes, conceived as a re-evaluation of the concept of energy from the viewpoint of life.

1980年東京都生まれ。2006年情報科学芸術大学院大学修了。主な展覧会に「札幌国際芸術祭 2014」(札幌芸術の森美術館、北海道、2014)、「空白に満ちた世界」(クンストラム・クロイツベルク/ベタニエン、ベルリン、2013)など。「第18回文化庁メディア芸術祭」にて優秀賞受賞(国立新美術館、東京、2015)。

Born in Tokyo in 1980. Graduated with an MA in Media Expression from International Academy of Media Arts and Science in 2006.



《空白のプロジェクト#3 コスモス》2016
blank project #3 cosmos, 2016

Tokyo Wonder Site Art Cafe WINDOWS

渋谷のアートカフェで若手アーティストの活動を紹介

トーキョーワンダーサイト（TWS）渋谷に併設するアートカフェ24/7 coffee & roasterは、コーヒーとともに気軽にアートにふれることができる空間です。これまでにTWSのプログラムに参加したアーティストの作品展示をとおして、TWSの活動を紹介しています。2015年度はTWS渋谷で同時期に開催している事業と連携した展示を8回にわたって実施しました。

Presenting the work of young artists at an venue in Shibuya

Housed in Tokyo Wonder Site (TWS) Shibuya, Art Cafe 24/7 Coffee & Roaster is a space in which one can freely encounter art while enjoying coffee. It introduces the activities of TWS through exhibitions of the artists who have previously participated in TWS programs. In 2015, a total of eight exhibitions were organized to coincide with programs at TWS Shibuya.

- Vol.16 高松明日香 2015.5.23(土)～6.22(月)
- Vol.17 安藤 充 2015.6.25(木)～8.3(月)
- Vol.18 福田紗也佳 2015.8.6(木)～9.14(月)
- Vol.19 林田 健 2015.9.17(木)～10.26(月)
- Vol.20 小林あずさ 2015.10.29(木)～12.7(月)
- Vol.21 酒井龍一 2015.12.10(木)～2016.1.25(月)
- Vol.22 関山 草 2016.1.28(木)～2.29(月)
- Vol.23 尾花賢一 2016.3.3(木)～3.30(水)

※ Vol.16～21は「TWS-Emerging 2015」サテライト企画。Vol.22, 23は「ワンダーシード 2016」サテライト企画。

会場：TWSアートカフェ 24/7 coffee & roaster(TWS渋谷併設)



Vol.20 小林あずさ



Vol.23 尾花賢一

夏のこどもワークショップ Summer Kids Workshop

若手アーティストとアートの制作を行う夏の体験プログラム

ギャラリーの四方の壁面に模造紙を貼り、全身を使って色鉛筆1本を使い切るまで自由に線を描くワークショップを実施しました。大きな画面に思いきり描くというシンプルなテーマをとおして、子供たちが、もの（物質）と自分の間に生まれる時間について体感し、講師のアーティストとの交流を通して創作の楽しさを経験しました。

A summer workshop for children to create artwork together with young artists

In this workshop, synthetic paper was fixed to all four walls of the gallery before the participants were invited to make full use of their bodies and colored pencils, drawing lines freely until the pencils were used up. Through the simple theme of drawing with abandon on a large surface, the participating children were able to experience a unique sense of time arising between the self and objects (physical materials), in addition to the joy of creation through interaction with the artist instructor.

2015.8.29(土)、30(日)
(13:00～14:00、14:30～15:30、16:00～17:00)計6回

会場：トーキョーワンダーサイト渋谷

提携：ワークショップコレクション 11 in シブヤ



佐々木 愛

1976年大阪府生まれ。2001年金沢美術工芸大学美術学部デザイン科視覚デザイン専攻卒業。トーキョーワンダーサイト2008年度二国間交流プログラム(ソウル)派遣クリエイター。2010年ポーラ美術振興財団在外研修生としてオーストラリアに滞在。主な展覧会に「Four Songs」(ベルナルド・ピュフェ美術館、静岡、2014)、「Invisible scape」(Toi O Poneke Art Centre、ニュージーランド、2008)、「VOCA展」(上野の森美術館、2007)など。

Ai SASAKI

Born in Osaka in 1976. Graduated with a BFA in Visual Communication Design from Kanazawa College of Art in 2001.



OS-XX ～都市未来のオペレーション・システムへの序章～

OS-XX -Prelude to the operation systems of the future city

都市の未来を形づくるオペレーション・システムを考える展覧会

「OS-XX」では、都市の未来についてさまざまな角度から検証しました。アート、デザイン、建築、文化イベント等の各側面から、都市生活の基盤となるOS（オペレーションシステム）について、今後どの様なあり方が求められていくのか、インスタレーションや研究成果のプレゼンテーション形式で紹介しました。会期中は、展覧会に合わせてテーマ毎にセクションした約50冊の本を閲覧できるカフェスペース《純喫茶ほん》をオープンし、来場者がより深い理解や関心をもてるような空間を設けました。また、展覧会のテーマについて、来場者から広くアンケートを集め会場に公開し、自由な意見交換を行いました。

An exhibition inquiring into the “operation system” for shaping cities in the future

“OS-XX” investigated the future of cities from various viewpoints. Ideas relating to the future of “operating systems” that are the basis of urban life were introduced from the perspectives of art, design, architecture and cultural events in the form of installations and presentations of research. During the exhibition, the cafe space Junkissahon was open, providing visitors with a space to deepen their understanding of and interest in the theme of the exhibition through approximately 50 specially selected books. In addition, questionnaires relating to the exhibition theme collected through the website and directly from visitors were on view in the venue, actively encouraging the free exchange of opinions.

第1期：2015.8.8(土)～9.23(水・祝)

第2期：2015.10.3(土)～11.8(日)

会場：トーキョーワンダーサイト本郷

参加クリエイター：九富美香、ペドロ・イノウエ、照屋勇賢、ジャン＝フランソワ・プロスト、幅 允孝、小淵祐介研究室、田中功起、SCI-Arc ジョン・N・ボーン



《純喫茶ほん》

ペドロ・イノウエ Pedro INOUE

資本主義の限界とネットワーク社会への期待、グローバルな問題と私たちとの関係性といった、ニューメディア社会の未来を問う作品。“kawaii”文化を象徴する仮想店舗空間では「ANTI SUPER SILENT」を商標とし、自己主張の少ない日本人の性質に対して問題提起しました。

Taking the form of a virtual store signifying a “kawaii” (cute) culture and with the trademark “ANTI SUPER SILENT,” this work raised a question about the submissive character of the Japanese with humor.

ブラジル、サンパウロを拠点として活動するグラフィック・デザイナー。日本、韓国、フランス、イギリスなどで作品を発表。2001年～2007年ロンドンのバーンブルック・デザインに所属。現在はカナダの雑誌『アドバスターズ』のクリエイティブ・ディレクターを勤める。

Graphic artist & designer based in Sao Paulo, Brazil. Currently Adbusters Magazine creative director.



照屋勇賢 Yuken TERUYA

多言語で切り文字した新聞、版画や紙幣の作品、日本各地の地方新聞の集積による作品で構成。日本で今起きている政治的問題はグローバルな文脈で理解されるべきこと、表象として通貨がもつ芸術性、地域による情報の遅延と遮断の存在などを表現しました。

Yuken Teruya created an installation consisting of words cut out of newspapers in various languages, suggesting that issues occurring today are shared by all peoples.



1973年沖縄県生まれ。多摩美術大学油絵科卒業。スクールオブビジュアルアーツ MFA 修了。主な展覧会に The Simple Truth: Josée Bienvenu Gallery, New York (2015)、「ゴー・ビトウィーンズ展：こどもを通して見る世界」森美術館(東京、2014)など。Born in Okinawa in 1973. Graduated with a BFA in Oil Painting from Tama Art University, and an MFA from School of Visual Arts, NY.

ジャン＝フランソワ・プロスト Jean-François PROST

2012年ロンドンオリンピックの際に、行政がオリンピック会場の敷地予定地を囲った青い壁や、華やかな都市生活とは真逆に地下で働く人々など、都市政策において、強制的に変化する状況に対する人々の受容と適応過程をリサーチした「ADAPTIVE ACTIONS」を紹介しました。

Jean-François Prost introduced Adaptive Actions, a body of research conducted into the processes of reception and adaptation by people whose circumstances are forcibly changed by urban policy-making.

カールトン大学(オタワ)で建築を、ケベック大学(モントリオール)で環境デザインを専攻。芸術の介入がほとんどされない都市研究の分野の境界に興味を持ち、建築、街、都市に対して、ビジュアルアートから飛躍する様な新たな考え方を模索している。

Jean-François PROST: artist, researcher, educator, founder and director of Adaptive Actions platform based in Canada and founded in London in 2007.



小淵祐介研究室 Yusuke OBUCHI Lab

「サステナビリティ＝持続可能性」という概念を改めて考え直し、これまでの建築や建築資材の常識に捉われない研究成果を発表しました。都市と地方との循環、建物と人々・環境の関係などについて新しいあり方を提示し、既存の概念に問いを投げかけました。

Yusuke Obuchi Lab presented the results of research that reconsidered the concept of sustainability, going beyond common sense notions of architecture and building materials in the past.



小淵祐介：1969年千葉県生まれ。南カリフォルニア建築大学卒業、プリンストン大学大学院修士課程修了。RUR Architects 勤務後、ケンタッキー州立大学助教、プリンストン大学客員准教授、AAスクール・デザインリサーチラボ ディレクターなどを歴任。東京大学工学部建築学科准教授。

Yusuke OBUCHI: Associate Professor in Architecture at the University of Tokyo. Researcher, designer and educator.

《CYBERNETIC URBANISM》
2015

田中功起 Koki TANAKA

アーティストが1杯ずつ丁寧に入れたコーヒーと共に、テーブルを囲んでオリンピック開催に向けて起こる変化について、自由に語る場が企画されました。多数の参加者が「文化政策」「ジェントリフィケーション」「体育と体操」「宗教やジェンダー」等をテーマに、活発な議論を展開しました。

While the artist carefully served coffee for each of the participants, everyone sat around tables and talked freely about the changes that would be brought as the Olympics draw nearer, resulting in a lively discussion.

1975年栃木県生まれ。ロサンゼルス在住。アーティスト、ARTISTS' GUILD、基礎芸術。主な著書に『Precarious Practice』(Hatje Cantz, 2015年)、『必然的にばらばらなものが生まれてくる』(武蔵野美術大学出版局、2014年)、『質問するその1(2009-2013)』(ART iT, 2013年)など。

Born in Tochigi in 1975; lives and works in Los Angeles. Tanaka takes part in and collaborates with ARTIST'S GUILD and Contemporary Art Think-tank.

《一時的なスタディ：オープン・ディスカッション#3
東京オリンピック1940 1964 2020》2015
Proisional Studies: Open discussion #3 Tokyo
Olympic 1940 1964 2020, 2015
Photo: Koki Tanaka



SCI-Arc ジョン・N・ボーン SCI-Arc John N. BOHN

最新のシミュレーション技術によって熱力学（エネルギー）的に空間をつくり出すという、新しい建築概念を提案しました。そのコンセプトは、モネ、ゴッホ、北斎が描いた風景にも通じ、エネルギーを優先とした視点で都市と共存する未来の建築のあり方を注目しました。

A new architectural concept was proposed for the creation of a thermodynamic (energy) space based on the latest simulation technology.



JBohn アソシエイツ代表。バージニア大学にて学位、オハイオ州立大学にて建築修士を取得。ロサンゼルス在住。幾何学、構造、表面、空間における複雑性を読解するための伝統的、近代的、そして最新の建築資材や技術、システムを探索することに焦点を当てている。

President of JBohn Associates, Inc. Graduated with a B.S. in Architecture from the University of Virginia and an M. Arch from Ohio State University.

《0th house》2015

九富美香 Mika KUTOMI

2012年ロンドンオリンピックの文化プログラムで重要な役割を果たした人物や、芸術祭の開催地に住む人々へのインタビュー成果を公開しました。文化に関わるプログラムは何を目指すのか、多くの人々が議論に参加できる場として「Tokyo Cultural Open Platform」を提唱しました。

Mika Kutomi gave a presentation sharing the results of interviews she made with people who played important roles in the cultural program of the 2012 London Olympics as well as with those who live in the cities hosting art festivals.

1980年香川県小豆島生まれ。2006年東京藝術大学大学院美術研究科壁画専攻修了。2014年文化庁新進芸術家海外研修制度(短期研修)にてイギリス・ロンドンに滞在。帰国後、アート・リサーチとしての活動を開始。

Born in Shodoshima (Kagawa) in 1980. Graduated with an MFA from Tokyo University of the Arts in 2006.



《2012年ロンドンオリンピック文化プログラムについての調査研究》2015
Tokyo Cultural Open Platform, 2015

幅 允孝 Yoshitaka HABA

本がメニューというコンセプトの《純喫茶ほん》が開店しました。都市の未来を考えるために「コミュニティ」「メディア」「芸術」「建築」「政治」の5つのテーマで絵本から専門書まで約50冊が揃い、大人から子供まで楽しめる空間となりました。

Junkissahon was a cafe opened during the exhibition, offering a menu of approximately 50 books related to the five themes of community, media, art, architecture, and politics.



1976年愛知県生まれ。有限会社BACH(バッハ)代表。ブックディレクター。未知なる本を手にしてもらう機会をつくるため、本屋と異業種を結びつけたり、病院や企業ライブラリーの制作をしている。愛知県立芸術大学非常勤講師。

Born in Aichi in 1976. Book director President, BACH Ltd. Lecturer, Aichi University of the Arts.

《純喫茶ほん》2015
Junkissahon, 2015



クリエイター・イン・レジデンス・プログラム Creator-in-Residence Program

日本最大規模のアーティスト・イン・レジデンス事業 年間約50名が滞在・派遣

2014年秋に墨田区立川に移転したTWSレジデンスで、2015年度より本格的にレジデンス・プログラムを再開しました。二国間交流事業、海外クリエイター招聘、芸術文化・国際機関推薦、リサーチ・レジデンスの4つのプログラムを実施し、30組32名のクリエイターがTWSレジデンスに滞在し、活動、交流を行いました。滞在期間は、5月～7月、9月～11月、1月～3月の3期とし、それぞれの期間の最終月にオープン・スタジオを開催し、成果発表を行いました。また、二国間交流事業プログラムでは、パーゼル、ソウル、ロンドン、台北、マドリッド、ベルリンの6都市に11名の日本人クリエイターを派遣しました。その他、TWSレジデンスでは事業に関わるクリエイターの滞在も受け入れました。

The largest artist-in-residence program in Japan, featuring around 50 participants annually in Tokyo or overseas

Tokyo Wonder Site residency program resumed in 2015 after relocating to Tatekawa in Sumida City in autumn 2014. In fiscal 2015, a number of programs were organized: the Exchange Residency Program, International Creator Residency Program, Institutional Recommendation Program, and Research Residency Program. A total of 30 groups and 32 artists stayed, worked and engaged in exchange at the facility. Residencies were organized into three terms: May to July, September to November, and January to March. At the end of each period, an open studio was organized to show the resulting work. For the Exchange Residency Program, TWS sent 11 Japanese artists to 6 cities (Basel, Seoul, London, Taipei, Madrid, and Berlin).



ランチ・ミーティングの様子

二国間交流事業プログラム(派遣)

田村友一郎 Yuichiro TAMURA	2015.4.3～6.30	バーゼル
播磨みどり Midori HARIMA	2015.5.1～7.29	ソウル
大山エンリコイサム Enrico Isamu ŌYAMA	2015.8.1～10.25	ロンドン
花崎 草 Kaya HANASAKI	2015.9.23～12.20	台北
地主麻衣子 Maiko JINUSHI	2015.10.19～11.29	マドリード
伊東宣明 Nobuaki ITOH	2015.10.19～11.29	マドリード
石井麻希 Maki ISHII	2015.4.6～6.30	ベルリン
中野 岳 Gaku NAKANO	2015.4.6～6.30	ベルリン
谷中佑輔 Yusuke TANINAKA	2015.7.6～9.28	ベルリン
ホンマエリ(キュンチョメ) Eri HOMMA(KYUN-CHOME)	2015.10.8～2016.1.3	ベルリン
シンゴヨシダ Shingo YOSHIDA	2016.1.5～3.31	ベルリン

二国間交流事業プログラム(招聘)

エリック・シュミット Erik SCHMIDT(ドイツ)	2015.5.1～7.29	ベルリン
チョン・ジヒョン JUNG Ji-Hyun(韓国)	2015.5.10～7.29	ソウル
ローナ・バーチャム Lorna BIRCHAM(イギリス)	2015.6.23～7.19	ロンドン
ウィリアム・コビング William COBBING(イギリス)	2015.7.2～8.9	ロンドン
リス・ビャルバ Lys VILLALBA(スペイン)	2015.10.16～11.27	マドリード
アレイシュ・プラデムント Aleix PLADEMUNT(スペイン)	2015.10.16～11.27	マドリード
Hou・イーティン HOU I-Ting(台湾)	2016.1.6～3.31	台北
フランツィスカ・フルター Franziska FURTER(スイス)	2016.1.8～3.31	バーゼル

海外クリエイター招聘プログラム

ケルヴィン・アトマディブラタ Kelvin ATMADIBRATA(インドネシア)	2015.9.1～11.25
ラウル・ワルヒ Raul WALCH(ドイツ)	2015.9.1～11.25
コビール・アフメッド・マスム・チスティ Kabir Ahmed MASUM CHISTY(バングラデシュ)	2016.1.6～3.31
アディティア・ノヴァリ Aditya NOVALI(インドネシア)	2016.1.6～3.31

芸術文化・国際機関推薦プログラム

マリー＝ジョゼ・シマル Marie-Josée SIMARD(カナダ)	2015.10.1～12.20
ジョゼ・ペドノー Josée PEDNEAULT(カナダ)	2016.1.8～3.31
カミュー・ボワテル Camille BOITEL(フランス)	2015.7.4～7.13
アントニ・ムンタダス Antoni MUNTADAS(スペイン／アメリカ)	2015.7.10～7.30
オリバー・ビア Oliver BEER(イギリス)	2015.10.28～11.25
ビョルン・メルフス Bjørn MELHUS(ドイツ)	2016.3.11～3.16

リサーチ・レジデンス・プログラム

フェルメール&ヘイルマンス VERMEIR & HEIREMANS(ベルギー)	2015.9.1～9.28
ハディン・シャーベル Hadin CHARBEL(アメリカ／日本)	2015.9.1.～9.27
デボラ・ロペス Deborah LOPEZ(スペイン／日本)	
チャン・ホンソン JANG Hong Seon(韓国／アメリカ)	2015.9.2～9.26
アレックス・デイヴィーズ Alex DAVIES(オーストラリア)	2015.9.5～9.30
ナタリ・アドニョ Natale ADGNOT(アメリカ／日本)	2015.10.5～11.26
ヴァレリオ・サニカンドロ Valerio SANNICANDRO(イタリア／フランス)	2015.10.7～11.28
バーバック・ハシェミ＝ネジャド Bahbak HASHEMI-NEZHAD(イギリス)	2015.10.15～11.15
ミーシャ・クラニックスフェルト Micha KRANIXFELD(ドイツ)	2016.1.6～2.2
ジョシュア・D・ゴンサルヴェス Joshua D. GONSALVES(カナダ／レバノン)	2016.1.7～2.2
イサベル・デ・セナ Isabel DE SENA (ドイツ)	2016.2.7～3.31
マヌエル・シルヒャー Manuel SCHILCHER (オーストリア)	2016.2.9～3.31
インガ・ザイドラー Inga SEIDLER(ドイツ)	2016.2.13～3.31

二国間交流事業プログラム〈バーゼル〉 Tokyo-Basel Exchange Residency Program

田村友一郎 Yuichiro TAMURA

滞在期間：2015.4.3～6.30

活動拠点：アトリエ・モンディアル Atelier Mondial



Basel Nightmare, 2015

バーゼルの地理や歴史、また、世界有数の製薬会社が本社を置く産業都市としての特徴を綿密に調査して作品を制作。「Café Predawn」「Kalte Füße bekommen」「Basel Nightmare」と題する3つのパフォーマンス／インスタレーション作品を発表しました。

Yuichiro Tamura conducted comprehensive research on Basel's geography, history, and characteristics as an industrial city where global pharmaceutical companies are headquartered. Tamura then created three performances and installations titled "Café Predawn", "Kalte Füße bekommen", and "Basel Nightmare".

1977年富山県生まれ。2010年東京藝術大学大学院映像研究科修士課程修了。東京藝術大学大学院博士後期課程在籍。東京を拠点に活動。主な展覧会に「アート・バーゼル香港2013」(YUKA TSURUNO GALLERY、香港、2013)、「メディアシティ・ソウル2014」(ソウル市立美術館、2014)など。

Born in Toyama in 1977. Graduated with an MFA in Film and New Media in 2010, and Enrolled in a Ph.D in Film and New Media at Tokyo University of the Arts. Lives and works in Tokyo.

二国間交流事業プログラム〈ソウル〉 Tokyo-Seoul Exchange Residency Program

播磨みどり Midori HARIMA

滞在期間：2015.5.1～7.29

活動拠点：MMCAレジデンス・コヤン MMCA Residency Goyang

滞在期間を通し、日々出るゴミを使って毎日ひとつずつオブジェを制作。それをインスタントカメラで記録する「Democracy Demonstrate」を展開し、現代社会の消費行為の背後にあるイデオロギーを探究しました。また、済州島を訪れてシャーマニズムを調査し、アジアに通底する価値体系を再認識しました。

Midori Harima created a sculpture out of waste materials every day throughout her residency period. Documenting each sculpture with an instant camera, she made "Democracy Demonstrates", which investigates the ideology behind consumption in a contemporary society. Additionally, Harima visited Jeju Island to research shamanism and rediscovered universal values in Asia.

1976年神奈川県生まれ。2000年女子美術大学芸術学部絵画科版画コース卒業。2005年よりニューヨーク在住。主な展覧会に「Roadside Picnic」(FLYNNDOG、パームント、アメリカ、2014)、「Ridden」(Des Lee Gallery、セントルイス、アメリカ、2013)、「日常ワケあり」(神奈川県民ホールギャラリー、2011)など。



《Democracy Demonstrates
-90日間韓国で私は何を消費したか》2015
Democracy Demonstrates
-What I have consumed in 90 days in Korea, 2015

Born in Yokohama in 1976. Graduated with a BFA in Oil Painting (Printmaking) from Joshibi University of Art and Design in 2000. Based in New York since 2005.

二国間交流事業プログラム〈ロンドン〉 Tokyo-London Exchange Residency Program

大山エンリコイサム Enrico Isamu ŌYAMA

滞在期間：2015.8.1～10.25

活動拠点：ロンドン芸術大学 University of the Arts London



Improvised Mural, 2015 Artwork © Enrico Isamu ŌYAMA
Photo © Tom Carter

Enrico Isamu Ōyama created an enormous, improvised and vibrant installation on the campus of Chelsea College of Arts. An artist talk with Mark Rappolt, editor in chief of ArtReview magazine, was held at the exhibition site, organized by the Japan Foundation London.

1983年東京都生まれ。2009年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。ニューヨークを拠点に活動。主な展覧会に「Like A Prime Number」(大和日英基金ジャパンハウスギャラリー、ロンドン、2016年)、「Concrete to Data」(ロング・アイランド大学スタインバーグ美術館、ニューヨーク、2015年)など。「VOCA展2016」佳作賞受賞(上野の森美術館、東京、2015年)。

Born in Tokyo in 1983. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2009. Lives and works in New York.

二国間交流事業プログラム〈台北〉 Tokyo-Taipei Exchange Residency Program

花崎 草 Kaya HANASAKI

滞在期間：2015.9.23～12.20

活動拠点：トレジャーヒル・アーティスト・ヴィレッジ Treasure Hill Artist Village

消えゆく文化や風習、可視化されない都市の側面について調査を行い、地元のアーティストや住民とも積極的に交流しました。企画「My Home, Our Treasure」では、独特な歴史的経緯を辿った台北市内の3つの村を取材し、それぞれの住人にとっての「村の宝」を問う映像作品を制作しました。

Conducting research on disappearing cultures and customs, and unseen aspects of a city, Kaya Hanasaki actively engaged with local artists as well as residents. After researching three villages in Taipei with very particular histories, Hanasaki created a video work for a solo exhibition, "My Home, Our Treasure," that explored what each resident regarded as the "treasure" of their village.



《反射しあうわたしたち》2015
I am your past, You are my future, 2015

1987年東京都生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。東京を拠点に活動。主なパフォーマンスに「蚊帳の外」(台北市美術館、台湾、2015年)、「Woman Path」(M.F. フセインアートギャラリー、ニューデリー、2014年)など。展覧会に「花崎 草/2007-2012」(「」藝文展演空間、台北、2013年)、「Art Action in UK」(素人の乱12号店、東京、2012年)など。

Born in Tokyo in 1987. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2012. Based in Tokyo.

二国間交流事業プログラム〈マドリッド〉 Tokyo-Madrid Exchange Residency Program

地主麻衣子 Maiko JINUSHI

滞在期間：2015.10.19～11.29

活動拠点：マタデロ・マドリッド Matadero Madrid



《遠いデュエット》2015
A Distant Duet, 2015

Maiko Jinushi focused on Roberto Bolaño Ávalos, the Chilean novelist and poet who relocated to Spain. Interested in Bolano's life, Jinushi conducted comprehensive research that included tracing the novelist's footprints, studying his literature, and interviewing people in Spain. Jinushi then created a video work reflecting the inside and outside of society and the self.

スペインに移住した、チリの小説家・詩人のロベルト・ボラーニョをテーマに活動。かねてより関心を抱いていた作家の足跡を辿り、文献を調べ、現地の人々にインタビューをするなど、多面的なリサーチを展開し、社会や自己の「内外」を映し出す映像作品を制作しました。

Maiko Jinushi focused on Roberto Bolaño Ávalos, the Chilean novelist and poet who relocated to Spain. Interested in Bolano's life, Jinushi conducted comprehensive research that included tracing the novelist's footprints, studying his literature, and interviewing people in Spain. Jinushi then created a video work reflecting the inside and outside of society and the self.

1984年神奈川県生まれ。2010年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。東京を拠点に活動。主な展覧会に「おおきな口、ちいさな手 もしくは ちいさな口、おおきな手」(Art Center Ongoing、東京、2015)、「仮想のコミュニティ・アジアー黄金町バザール2014」(神奈川、2014)。「パフォーマンスに「馬が近づいてくる音」(blanClass、神奈川、2014)など。

Born in Kanagawa in 1984. Graduated with an MFA in Painting from Tama Art University in 2010. Lives and works in Tokyo.

二国間交流事業プログラム〈マドリッド〉 Tokyo-Madrid Exchange Residency Program

伊東宣明 Nobuaki ITOH

滞在期間：2015.10.19～11.29

活動拠点：マタデロ・マドリッド Matadero Madrid

「本当のアートとは何か」という問いを、美術史上重要な作品を巡りながら探究する映像作品《アート》のスペイン版を制作しました。スペイン各地の主要な美術館から許可を得て、自撮りによる撮影を敢行。日本版と並べて展示することで、アートを取り巻く両国の歴史や状況の差異を浮かび上がらせました。

Nobuaki Itoh created a Spanish version of a video work titled *Āto* that explored the question of what real art is through important masterpieces from art history. Obtaining permissions from major art museums across Spain, Itoh filmed artworks in selfie. By exhibiting the images next to the Japanese version, the different histories and conditions surrounding art in both countries were brought into relief.

1981年奈良県生まれ。2016年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程修了(メディアアート)。京都を拠点に活動。主な展覧会に「アート」(APMoAプロジェクト・アート、愛知県美術館、2015)、「牛窓・亜細亜芸術交流祭」(牛窓シーサイドホール・瀬戸内市美術館、岡山、2014)「おおがきビエンナーレ2013」(情報科学芸術大学院大学[IAMAS]、岐阜、2013)など。

Born in Nara in 1981. Earned his Ph.D in Media Art from Kyoto City University of Arts in 2016. Lives and works in Kyoto.



《アート(日本/スペインVer.)》2015
Āto(Japan/Spain Ver.), 2015

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉在住 Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

石井麻希 Maki ISHII

滞在期間：2015.4.6～6.30

活動拠点：クンストラウム・クロイツベルグ／ベタニエン Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien



Nobody room, 2015

Maki Ishii conducted research on 1950s-60s American lifestyle, interior design and historical background through the comic Tom and Jerry. With the cooperation of a media lab located inside Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien, Ishii created an animation with the images of Tom and Jerry removed. Ishii exhibited sculpture and video work based on the concept of presence and absence.

コミック『トムとジェリー』をとおして、1940～50年代のアメリカの生活様式やインテリア、時代背景をリサーチしました。ベタニエン内のメディアラボの協力を得て、映像からトムとジェリーを取り除いたアニメーションを制作。存在と不在をテーマとした立体・映像作品を発表しました。

Maki Ishii conducted research on 1950s-60s American lifestyle, interior design and historical background through the comic Tom and Jerry. With the cooperation of a media lab located inside Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien, Ishii created an animation with the images of Tom and Jerry removed. Ishii exhibited sculpture and video work based on the concept of presence and absence.

1982年広島県生まれ。2014年フランクフルト芸術大学シュテデル・マイスターシュラー修了。現在、ベルリンを拠点に活動。主な展覧会に「Logis du Paradis」(The Tip、ドイツ、2015)、「FALL」(Jochen Hempel Gallery、ドイツ、2014)など。また、高山明(Port B)による演劇プロジェクト「完全避難マニュアル フランクフルト版」にアーティストとして参加(2014)。

Born in Hiroshima in 1982. Earned her Meisterschuler from Staatliche Hochschule fur Bildende Kunsteschädelschule in 2014. Lives and works in Berlin.

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉在住 Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

中野 岳 Gaku NAKANO

滞在期間：2015.4.6～6.30

活動拠点：クンストラウム・クロイツベルグ／ベタニエン Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien

スポーツのような身体表現や道具の創造によって生活の中の身近な問題と向き合い、日常に変化をもたらす可能性を探りました。ベルリンでは犬の糞を移動させる遊びを通し、ただ楽しむことを目的とした個人の活動が、ゆくゆくは社会に影響を与えるかもしれないことを提示しました。

Gaku Nakano explored the possibility of bringing about changes to challenging problems in society by engaging in activities involving physical expression of sports and creating tools. Through a game of moving dog poop around Berlin, the project aimed to anticipate and share the idea how individual activities with the purpose of simply having fun can be vehicles for potentially changing society in the future.



《ベルリナーズ犬糞ゴルフ》2015
Berliner's Dog Feces Golf, 2015

1987年愛知県生まれ。2014年東京藝術大学美術研究科彫刻専攻修士課程修了。シュトゥットガルトを拠点に活動。主な展覧会に「Somehow the mosaic looks nice.」(児玉画廊、京都、2015)、「非の無い処に煙を立てる。」(拝借景、茨城、2014)など。「Und was machen wir morgen?」(Hohenloher Kunstverein、キュンツェルザウ、ドイツ、2013)オーディエンス賞受賞。

Born in Aichi in 1987. Graduated with an MFA in Sculpture from Tokyo University of the Arts in 2014. Lives and works in Stuttgart.

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉 Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

谷中佑輔 Yusuke TANINAKA

滞在期間：2015.7.6～9.28

活動拠点：クンストラウム・クロイツベルク／ベタニエン Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien



In/Flesh/Out, 2015 Photo : Aisuke Kondo

square in front of Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien, Taninaka assembled them and then performed biting the tomatoes embedded in the sculpture to present an alternative model of public sculpture.

彫刻とパフォーマンスの要素を合わせ持つ Galatea シリーズの新作《In/Flesh/Out》を発表。スタジオで制作したパーツをベタニエン前広場に運んで組み立て、彫刻に埋め込まれたトマトをかじるパフォーマンスを通して、パブリックスカルプチャーの新たなモデルを提示しました。

Yusuke Taninaka exhibited his sculptural and performance work "In/Flesh/Out", the latest in the Galatea series. Bringing the various parts created in his studio to the

series. Bringing the various parts created in his studio to the

1988年大阪府生まれ。2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。京都を拠点に活動。主な展覧会に「Galatea」(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、2014)、「クロニクル、クロニクル!」(Creative Center Osaka[名村造船所跡]、大阪、2016)、「京芸 Trans-mit Program #6「still moving」」(元・崇仁小学校／崇仁地域周辺、京都、2015)など。「アートワードトーキョー丸の内2014」グランプリ受賞(行幸地下ギャラリー、東京、2014)。

Born in Osaka in 1988. Graduated with an MFA in Sculpture from Kyoto City University of Arts. Lives and works in Kyoto.

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉 Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

ホンマエリ(キュンチョメ) Eri HOMMA(KYUN-CHOME)

滞在期間：2015.10.8～2016.1.3

活動拠点：クンストラウム・クロイツベルク／ベタニエン Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien

欧州社会が直面したシリア難民に着目。ベルリンでの受け入れから生活の実態まで、さまざまな手段を駆使してリサーチし、彼らと直接関わりを持ちながら映像作品を制作しました。「生きるために逃げる人々」をテーマに、現代社会の矛盾、共に幸せを築く可能性、アートの役割などを探究しました。



Challenge of Making Smile, 2015

Focusing on the Syrian refugee crisis in faced by European society and researching through a wide range of means how refugees were accepted and lived in Berlin, Kyun-Chome created a video work collaborating directly with refugees. Pursing the theme of people who escape to survive, the art unit explored the contradictions latent in contemporary society, the possibilities for collectively building happiness, and the role of art.

ホンマエリとナブチの男女ユニット。2011年に結成。東京を拠点に活動。主な展覧会に「もう一度 太陽の下でうまれたい」(岡本太郎記念館、東京、2015)、「なにかにつながっている」(新宿眼科画廊、東京、2014)、「SHIBUKARU MATSURI Goes to BANGKOK」(The Jam Factory、バンコク、2015)など。第17回岡本太郎現代芸術賞受賞(2014)。

Art unit formed in 2011, consisting of Eri Homma and Nabuchi. Lives and works in Tokyo.

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉在住 Berlin-Tokyo Exchange Residency Program

シンゴヨシダ Shingo YOSHIDA

滞在期間：2016.1.5～3.31

活動拠点：クンストラウム・クロイツベルク／ベタニエン Kunstraum Kreuzberg/ Bethanien



life in Berlin daily until the last day of his residency. He created and exhibited an installation, projecting video images of Berlin superimposed onto an enlarged photograph of the teddy bear as if they were memory flash-backs.

ゾンネンアレー駅で拾ったクマのぬいぐるみを、忘却されつつある都市ベルリンに重ね、ぬいぐるみを拾った日から滞在の最終日までの毎日、日々の情景を写真や映像で日常を記録。大きく引き伸ばした写真の上にフラッシュバックのように投影する映像インスタレーションを制作、発表しました。

Shingo Yoshida took a photograph of a teddy bear he picked up at Sonnenallee Station, as he felt it represented Berlin being lost in oblivion, and photographed everyday

life in Berlin daily until the last day of his residency. He created and exhibited an installation, projecting video

1974年東京都生まれ。2007年にパリ国立高等美術学校大学院プログラム ラ・セーヌ修了。主な展覧会に「オリバー・ピア | シンゴ ヨシダ」(フランス国立現代美術センター・ヴィラ・アルゾン、ニース、2013)、「BYOB」(パレ・ド・トーキョー、パリ、2012)、「Zona Común」(チリ国立現代美術館、サンティアゴ、2012)など。「POLARIZED! Vision」短編映画コンペティショングランプリ受賞(ロヴァニエミ、フィンランド、2015)。

Born in Tokyo in 1974. Yoshida earned his Post-graduate diploma -Research Program La Seine from Ecole Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris. Lives and works in Berlin.

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉 Berlin-Tokyo Exchange Residency Program

エリック・シュミット Erik SCHMIDT

滞在期間：2015.5.1～2016.7.29

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Photo: Yuichiori Otsuka

Based on local and site specific social customs and cultures, Erik Schmidt creates paintings as well as video works in which he stars. In Tokyo, Schmidt observed daily scenes of businessman including commuter trains and standing soba noodle restaurants as well as homeless people who live side by side with them. Capturing a particular aspect of Japanese society, he created a painting and video.

その土地特有の社会習慣や文化をテーマに、絵画と自らが出演する映像作品を制作するシュミットは、東京では、通勤電車や立ち食いそばなど、サラリーマンの日常的な光景と、それと隣り合わせのホームレスの姿などを観察。日本社会の一面を切り取り、絵画と映像作品に描きました。

Based on local and site specific social customs and cultures, Erik Schmidt creates paintings as well as video

ヘルフォルト(ドイツ)生まれ、ベルリンを拠点に活動。主な展覧会に「Cut/Uncut」(Galerie Krinzinger、ウィーン、2016)、「Downtown」(レオポルド・ホーシュ美術館、デュレン、ドイツ、2014)、「In Situ」(Jason Maccoy Gallery、ニューヨーク、2015)、「PAINTING FOREVER! KEILRAHMEN」(クスト・ヴェルケ現代美術館、ベルリン、2013)など。

Born in Herford (Germany). Lives and works in Berlin. Selected exhibition: Cut/Uncut (Solo exhibition), Galerie Krinzinger, Vienna, 2016.

二国間交流事業プログラム〈ソウル〉 Seoul-Tokyo Exchange Residency Program

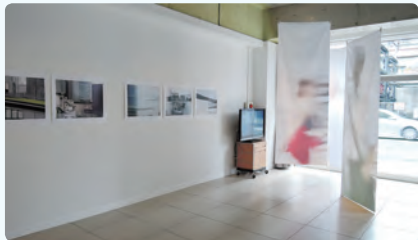
チョン・ジヒョン JUNG Ji-Hyun

滞在期間：2015.5.10～7.29

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

急速な開発による都市の移り変わりを写真を通じて表現するチョンは、2020年のオリンピックに向けて開発が進む湾岸エリアに注目し、移りゆく景観をゆりかもめの車窓から撮影した新作「Transit」シリーズを制作しました。

Known for photography depicting how cities change as a result of rapid urban development, Jung Ji-Hyun focused on Tokyo's Bay Area that had been developed for 2020 Summer Olympics. Jung photographed the shifting landscape from a train window of the Yurikamome railway and created new works in the series "Transit".



1983年ソウル生まれ、在住。主な展覧会に「Site」(GoEun写真美術館 BMW フォトスペース、釜山、2015)、「System planning: Dabang Dabang Project」(KT&G Sangsangmadang、ソウル、2015)、「Scotiabank CONTACT Photography Festival」(MoCCA、トロント、2015)など。

Born in Seoul in 1983. Lives and works in Seoul. Selected exhibition: Site (solo exhibition), GoEun Museum of Photography BMW Photo Space, Korea, 2015.

二国間交流事業プログラム〈ロンドン〉 London-Tokyo Exchange Residency Program

ローナ・バーチャム Lorna BIRCHAM

滞在期間：2015.6.23～7.19

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Lorna Bircham researches sustainable textile design. During her residency in Tokyo, she investigated traditional Japanese indigo dye techniques and "boro," a type of clothing in mountain villages in northeast Japan made from old fabrics patched together. Through interacting with people who pass on these traditions, Bircham searched for textiles that are truly sustainable.

ロンドンを拠点に活動。1978年にロイヤル・カレッジ・オブ・アート修了(テキスタイルデザイン)を取得。ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート講師で、修士課程テキスタイルデザイン専攻のコース・ディレクターを務める。主な展覧会に「One:Place:Ten 2015」(チェルシー・カレッジ・オブ・アート The Cookhouse Gallery、ロンドン、2015)など。

Lives and works in London. Graduated with an MA in Textile Design from Royal College of Art in 1978. Course director for MA Textile Design at Chelsea College of Arts.

テキスタイルのサステナブル・デザインを研究するバーチャムは、天然素材を使用する日本の伝統的な藍染技法や、使い古された布を継ぎ接ぎしてつくられた、東北の山村の衣服、ボロを調査。伝統を受け継ぐ人々との交流を通して、真に持続可能なテキスタイルを探究しました。

Lorna Bircham researches sustainable textile

二国間交流事業プログラム〈ロンドン〉 London-Tokyo Exchange Residency Program

ウィリアム・コビング William COBBING

滞在期間：2015.7.2～8.9

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

安倍公房原作・勅使河原宏監督の映画『砂の女』に素材と質感の着想を得て、彫刻的な感覚を起点としたインスタレーションと映像を発表しました。また、『砂の女』の撮影地である鳥取砂丘で、本格的な作品制作のためのリサーチと撮影を行いました。

William Cobbing created an installation and video work that took its sculptural inspiration for its material and texture from the film Woman in the Dunes, directed by Hiroshi Teshigahara based on Kobo Abe's novel. Cobbing conducted research and a shoot at the Tottori Sand Dunes, where the film was made.



ロンドンを拠点に活動。2010年にミドルセックス大学にて博士号(美術)取得。ロンドン芸術大学ウィンブルドン・カレッジ・オブ・アート彫刻科講師。主な展覧会に「Transactions of Duddo Field Culb」(Hatton Gallery、ニューカッスル、イギリス、2014)、「What's Love Got to Do」(ヘイワード・ギャラリー・プロジェクト・スペース、ロンドン、2014)など。

Lives and works in London. Earned his Ph.D in Fine Arts from Middlesex University in 2010. Selected exhibition: Transactions of Duddo Field Culb (solo exhibition), Hatton Gallery, England, 2014.

二国間交流事業プログラム〈マドリッド〉 Madrid-Tokyo Exchange Residency Program

リス・ビヤルバ Lys VILLALBA

滞在期間：2015.10.16～11.27

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Instagram: @madeintokyoupdate

2001年に出版された、アトリエ・ワンによる『メイド・イン・トーキョー』で取り上げられた70件の建築を実際に訪れ、リサーチを展開。東京という都市の特性を反映した建築物の15年後の姿や役割の変容を、写真・ドローイング・文章で記録しました。

Lys Villalba visited 70 architectural sites featured in Atelier Bow-Wow's book "Made in Tokyo" (2001). Through photography, drawing, and text, Villalba documented these architectural sites that reflected the unique characteristics of Tokyo, capturing their forms and changes in role 15 years after the book's publication.

マドリッド生まれ、在住。2008年マドリッド工科大学建築高等技術学校卒業。複数の建築事務所勤務の後、独立。建築、デザイン、リサーチの領域に跨るような活動を個人、あるいはコレクティブのメンバーとして行っている。主な展覧会に「Uneven Growth: Tactical Urbanism for Expanding Megacities」(ニューヨーク近代美術館、ニューヨーク、2014-2015)など。

Born in Madrid. Lives and works in Madrid. Graduated from Escuela Tecnica Superior de Arquitectura de Madrid in 2008. Selected exhibition: Uneven Growth: Tactical Urbanism for Expanding Megacities, MoMA, America, 2014-2015

二国間交流事業プログラム〈マドリッド〉 Madrid-Tokyo Exchange Residency Program

アレイシュ・プラデムント Aleix PLADEMUNT

滞在期間：2015.10.16～11.27

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

近年「Matter」と題するシリーズで、モノ・生命・宇宙の起源、誕生などをテーマに写真作品を制作、その一環として、東京滞在中、火山活動や地殻変動の研究機関、ロボット技術をリサーチし、大判カメラによる撮影を行いました。

In recent years Aleix Plademunt has been working on a photography series called "Matter" themed around birth and the origins of things, life and the universe. As part of this, he researched institutions specialized in volcanic activity and crustal movements as well as robotic technology, and then shot photographs with a large-format camera.



Photo : Aleix Plademunt

ジローナ(スペイン)生まれ。バルセロナを拠点に活動。2003年バルセロナのカタルーニャ工科大学写真学科卒業。2013年、写真集『Almost There』(MACK, Ca l'Isidret Edicions)を発表。主な展覧会に「Almost There」(CFC Bilbao, ビルバオ、2015)、「Photography Now! Vol.2 -Spanish Horizon」(IMA CONCEPT STORE、東京、2015)、「Premio Revelación PHotoEspaña 2015受賞(2015)など。

Born in Girona (Spain). Lives and works in Barcelona. Co-Founder of the publishing house, Ca l'Isidret Edicions. Publication: Almost There (MACK and Ca l'Isidret Edicions, 2013)

二国間交流事業プログラム〈台北〉 Taipei-Tokyo Exchange Residency Program

ハウ・イーティン HOU I-Ting

滞在期間：2016.1.6～3.31

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



近現代社会における「女性」と「労働」をテーマに作品を制作しているハウは、「弁当」を通して日本社会での女性の役割をリサーチ。また、弁当づくりを社会現象、日台間の歴史を考察し、ワークショップを通して「行為によるアート」への転換を試みました。

Hou I-Ting, whose work is based on the concepts of women and labor in contemporary society, conducted

research on female roles in Japanese society through the custom of "bento" (lunchboxes). Exploring bento-making as a social phenomenon as well as the history of Taiwan and Japan, Hou attempted to transform her insights into "art by action" through workshops.

高雄生まれ。台北を拠点に活動。2008年国立台南芸術大学大学院修了。主な展覧会に「Sewing Fields」(TKG+、台北、2015)、「食物箴言 The Testimony of Food: Ideas and Food」(台北市立美術館、2015)、「Wonder Women」(ミネソタ大学 Katherine E. Nash Gallery、ミネアポリス、2015)など。

Born in Kaoshiung (Taiwan). Lives and works in Taipei. Graduated with an MFA in Institute of Plastic Arts from Tainan National University of the Arts. Selected exhibition: Sewing Fields (solo exhibition), TKG+, Taiwan, 2015

二国間交流事業プログラム〈バーゼル〉 Basel-Tokyo Exchange Residency Program

フランツィスカ・フルター Franziska FURTER

滞在期間：2016.1.8～3.31

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

音、動き、幻覚など、とらえどころのないものをドローイングによって視覚化するフルターは、マンガ、墨流し、いけばなといった日本文化にも影響を受けています。東京では、日本の折り紙やスタンプを使って作品を制作。今後の制作に向けて着物の型紙や水墨画、日本建築などのリサーチも行いました。

Franziska Furter, whose work visualizes what we consider elusive—sound, movement, and hallucinations—through drawing, has been influenced by Japanese culture such as manga, paper marbling, and ikebana (flower arrangement). While in Tokyo, Furter created works using origami and stamps as well as conducting research into kimono pattern, Japanese ink painting, and Japanese architecture for future work.

チューリッヒ生まれ。バーゼルとベルリンを拠点に活動。主な展覧会に「Turbulence」(SCHLEICHER/LANGE、ベルリン、2014)、「Shapes, Traps and Spells」(Lullin + Ferrari、チューリッヒ、2014)、「Dimensione Disegno」(Museo Civico Villa dei Cedri、ベルンゾーナ、2016)、「Trinkets for the Rich」(nationalmuseum、ベルリン、2015)など。



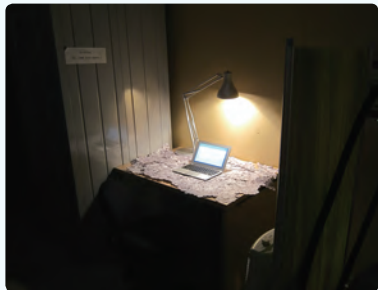
Born in Zurich. Lives and works in Basel and Berlin. Selected exhibitions: Dimensi-one Disegno, Museo Civico Villa dei Cedri, Switzerland, 2016, Trinkets for the Rich, nationalmuseum, Germany, 2015

海外クリエイター招聘プログラム International Creator Residency Program

ケルヴィン・アトマディブラタ Kelvin ATMADIBRATA

滞在期間：2015.9.1～11.25

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Their Destiny Was Foreordained (work in progress), 2015

人間の存在、生死、ジェンダーなどについて、詩的なパフォーマンスやインスタレーションをとおして問いを投げかけています。滞在中は、『GANTZ』などのマンガや日本の少年犯罪を調査し、「必然」「偶然」「運命」「死」について考察を深めました。

Kelvin Atmadibrata raises questions about human existence, birth and death, and gender through poetic performances and installations. While in Japan, Atmadibrata conducted research on manga including Gantz and Japanese juvenile crime, deepening his interest in the themes of necessity, coincidence, fate, and death.

1988年ジャカルタ生まれ、在住。2012年シンガポール南洋理工大学スクール・オブ・アート・デザイン・メディア卒業。主な活動に、「Carbuncle」(SPACE Galeri Pasar, ジャカルタ、2015)、「たけくらべ」(国際交流基金ジャカルタ日本文化センター、2014)、「マラッカ・アート&パフォーマンス・フェスティバル」(St. Paul's Hill, マラッカ、2015)など。

Born in Jakarta in 1988. Works and lives in Jakarta. Graduated with a BFA in School of Art Design and Media from Nanyang Technological University, Singapore in 2012. Selected activity: Carbuncle (solo exhibition), SPACE Galeri Pasar, Indonesia, 2015

海外クリエイター招聘プログラム International Creator Residency Program

ラウル・ワルヒ Raul WALCH

滞在期間：2015.9.1～11.25

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

「Fabric & Space」と題する、布による空間の創出や建築における布の使用をテーマとしたプロジェクトを展開し、大判の布や陶を用いた一連の作品を制作。また、日本における難民政策、不法滞在者の人権問題についてもリサーチを行いました。

Raul Walch developed his project Fabric and Space, which is themed around the creation of space with fabric and the use of fabric in architectural spaces, into a body of work that employed large pieces of fabric. Walch also conducted research on Japanese immigration policies as well as the human rights of immigrants who overstayed in Japan.

Illegal
(Immigrant Detention in Japan), 2015©Raul Walch

1980年フランクフルト生まれ。ベルリンを拠点に活動。ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学彫刻科卒業。2012年ベルリン芸術大学附属空間実験研究所修了。主な展覧会に「Azimut」(Lichthaus Arnsberg, ドイツ、2016)、「Cinema Lada」(近代美術館、エチオピア、2015)、「Festival of Future Nows」(新ナショナルギャラリー、ドイツ、2014)など。

Born in Frankfurt in 1980. Lives and works in Berlin and Addis Ababa. Graduated with a BFA in sculpture from Kunsthochschule Berlin-Weißensee. Graduated from Universität der Künste Berlin / Institut für Raumexperimente in 2012. Selected exhibition: Azimut, Lichthaus Arnsberg, Germany, 2016

海外クリエイター招聘プログラム International Creator Residency Program

コビール・アフメッド・マサム・チスティー Kabir Ahmed MASUM CHISTY

滞在期間：2016.1.6～3.31

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



日本のお化け（妖怪・幽霊）について調査・研究し、近隣の保育園児や地域の大人を対象に、それぞれワークショップを開催。それをもとにストーリーを構成し、アニメーションと人形劇を含むインスタレーション作品を制作しました。

Kabir Ahmed Masum Chisty researched and studied Japanese supernatural creatures (ghosts and apparitions), and held workshops for pre-school children and adults in the neighborhood. He then composed a story based on that experience and made a performative installation of animation and puppet.

ナラヤンガンジ(バングラデシュ)生まれ、在住。ダッカを拠点に活動。ダッカ大学大学院修了(彫刻)。主な展覧会に「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ」(福岡アジア美術館、2014)、「Readymade, Contemporary Art from Bangladesh」(Aicon Gallery、ニューヨーク、2014)、「第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ」(バングラデシュ館、ヴェネツィア、2011)。

Born and lives in Narayanganj(Bangladesh). Works in Dhaka. Graduated with an MFA in Sculpture from University of Dhaka. Selected activity: The 5th Fukuoka Asian Triennale, Fukuoka Asian Art Museum, Japan, 2014

海外クリエイター招聘プログラム International Creator Residency Program

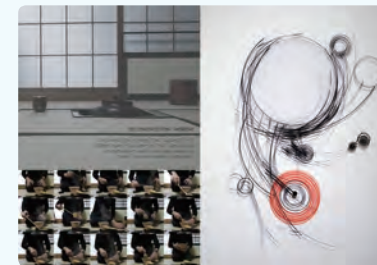
アディティア・ノヴァリ Aditya NOVALI

滞在期間：2016.1.6～3.31

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

日本特有の茶の湯と煎茶に感銘を受け、茶道の哲学、歴史について調査。中国系のインドネシア人として、中国、インドネシア、日本の3つの喫茶文化を比較考察し、「境界」「アイデンティティ」「国家」という概念を問い直しました。

Inspired by Japanese tea ceremony, Chanoyu and Sencha, Aditya Novali researched the philosophy and history of the tea ceremony in Japan. As a Chinese Indonesian, Novali did comparative studies on tea culture in China, Indonesia, and Japan to reconfigure the concepts of boundaries, identity, and nation.



スラカルタ(インドネシア)生まれ、在住。デザイン・アカデミー・アイントホーフェン(オランダ)修了。主な展覧会に「プルデンシャル・アイ・アワード展」(ArtScience Museum、シンガポール、2016)、「Shout!」(ローマ現代美術館[MACRO]、ローマ、2014)、「堂島リバービエンナーレ2013」(堂島リバーフォーラム、大阪、2013)

Born, lives and works in Surakarta (Indonesia). Graduated with an MFA in IM course from Design Academy Eindhoven (Netherlands). Selected exhibition: The Order (solo exhibition), Cemeti Art House, Indonesia, 2014

芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

マリー＝ジョゼ・シマール Marie-Josée SIMARD

滞在期間：2015.10.1～12.20

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



©Jonathan Goulet

打楽器奏者として、桐朋学園大学でマリンバ奏者の安倍圭子氏と共同作業を行ったほか、ガムラン合奏や鼓に挑戦するなど、積極的に活動を展開。東京近郊で行われたさまざまな演奏会に足を運び、日本人演奏家との交流を広げました。

As a percussionist, Marie-Josée Simard collaborated with Keiko Abe, a marimba player at Toho Gakuen College, and furthermore expanded her musical activities trying gamelan and taiko. Visiting a number of music events in Tokyo, Simard engaged in broad exchange with Japanese musicians.

サグネ(ケベック)生まれ。モントリオールを拠点に活動。1979年モントリオール音楽院卒業。楽器のディプロマを取得したカナダ初の女性演奏家となる。2003年ケベック議会よりメダルを授与されたほか、2014年にトリオEn trois couleursとしてPrix Opus 2013ジャズ部門ベスト・コンサートに選出。これまでに8枚のアルバムを発表している。

Born in Saguenay, Quebec. Lives and works in Montreal. Graduated from Conservatoire de musique de Montréal in 1979. Simard was received Prix Opus 2013 for the Best concert – Jazz, with the En trois couleurs trio in 2014.

芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

ジョゼ・ペドノー Josée PEDNEAULT

滞在期間：2016.1.8～3.31

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

写真を中心に、自己の内面を見つめた詩的な作品を制作。紙を日光に長時間さらして感光させる「フォトグラム」という手法に取り組み、紙皿などの些細な日用品と雄大な太陽が形成する、さまざまな構成の作品を生み出しました。

Josée Pedneault creates poetic and self-reflective works using photography and mix media. By fading colour paper under sunlight using various objects and shapes, she realized a series of compositions reflecting on the perception of time, the process of photography and our relation to the cosmos.



Photo : Josée Pedneault

ケベック生まれ、モントリオールを拠点に活動。2005年にコンコルディア大学大学院修了。主な展覧会に「Nævus」(CONTACT gallery、トロント、2015)、「The New Gods」(TYPOLOGY、カナダ、2015)、「Festival les Nuits Photographiques: Where does money go?」(Pavillon Carré de Baudouin、パリ、2015)、「Horror en el Trópico」(チョゴ大学美術館、メキシコシティ、2014)など。

Born in Haute-Rive, Quebec. Lives and works in Montreal. Graduated with an MFA in Studio Arts from Concordia University in 2005. Selected exhibition: Nævus (solo exhibition), CONTACT gallery, Canada, 2015

芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

カミーユ・ボワテル Camille BOITEL

滞在期間：2015.7.4～7.13

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



©Shinsuke Inoue

日本人パフォーマーを対象に、フランス現代サーカスの手法を用いたワークショップを四国で開催後、TWSレジデンスに滞在。新作に向けたリサーチやリハーサルを行い、東京のクリエイターとの交流を深めました。

Camille Boitel stayed at TWS Residency after holding a workshop using French contemporary circus methods with Japanese performers in the Shikoku region. While researching and rehearsing new work, Boitel also cultivated relationships with artists in Tokyo.

トラヴェルセル(フランス)生まれ。パリを拠点に活動。フランスの名門サーカス学校、アカデミー・フラテリーニで学び、ジェームズ・ティエレのもとでプロとして活動を開始。2002年に第1回「サーカスの若き才能」コンクールで優勝し、自身のカンパニーを立ち上げる。2009年初演の「リメディア〜いま、ここで」でMimos賞を受賞(2010)。

Born in Traverseres (France). Lives and works in Paris. Boitel trained at an early age at Ecole de Cirque Annie Fratellini. "L'im-médiat" was premiered in 2009. It was awarded Prix Mimos in 2010.

芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

アントニ・ムンタダス Antoni MUNTADAS

滞在期間：2015.7.10～7.30

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

コンセプチュアル・アート、メディア・アートの先駆者。日・中・韓3ヶ国の「約束事」を比較調査する展覧会プロジェクト「アジア・プロトコル」に向けて、日本の韓国人街、チャイナタウンの調査・研究・撮影を行いました。

Antoni Muntadas is a pioneer in conceptual art and media art. He stayed at TWS Residency to conduct research for "Asian Protocols," an upcoming exhibition project that compares protocols in Japan, China, and Korea, through investigations of Koreatown and Chinatown in Japan.



Antoni Muntadas
Dialog: Redefining Asian Protocols, 2015-2016
Asian Protocols, 2016-
3331 Arts Chiyoda, 2016
©Muntadas Photo: Keizo Kioku

バルセロナ生まれ。ニューヨークを拠点に活動。マサチューセッツ工科大学教授(1990～2014)、ヴェネツィア建築大学客員教授(2004～)。2009年、スペイン文化省よりベラスケス造形芸術賞を授与される。主な展覧会に「Untitled(History)」(第12回イスタンブール・ビエンナーレ、2011)など。

Born in Barcelona. Lives and works in New York. Professor of the Practice at MIT (1990-2014), and visiting professor at the IUAV in Venice (2004-).

芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

オリバー・ビア Oliver BEER

滞在期間：2015.10.28～11.25

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Silence is Golden, 2013
installation view, AOYAMA MEGURO

2015年度大和日英基金アートプライズを受賞し来日。東京では青山 | 目黒と ASAKUSA で個展、TWS レジデンスでは、作曲家でもある自身の作品のコンセプトにふれ、テーマとしている建築空間と音の関係についてトークを行いました。

Winner of the Daiwa Foundation Art Prize in 2015, Oliver Beer came to Japan and held solo shows at Aoyama Meguro and Asakusa galleries, and also presented a talk at TWS Residency. He conveyed the concept of his work as an artist as well as a composer and discussed the relationship between architectural space and sound.

1985年セント(イギリス)生まれ。ロンドンとパリを拠点に活動。主な展覧会に「Life, Death and Tennis」(青山 | 目黒、東京、2015)、「Deconstructing Sound」(ASAKUSA、東京、2015)、「Rabbit Hole」(リヨン現代美術館、2014)、「Composition for New Museum」(Fondation Louis Vuitton、パリ、2014)など。

Born in Kent in 1985. Lives and works in London and Paris. Selected exhibition: Rabbit Hole (solo exhibition), MAC Lyon, Lyon, 2014

芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

ビョルン・メルフス Bjørn MELHUS

滞在期間：2016.3.11～3.16

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

1960～70年代のベトナムと日本を舞台とした新作《MOON OVER DA NANG》のサーチと撮影を行いました。また、同時期に滞在したレジデントや日本人アーティストとのコラボレーションで、東京の街中に映像作品を投影しました。

Bjørn Melhus conducted research and filming for his latest work "Moon Over Da Nang", which is set in Vietnam and Japan in the 1960s/70s. Additionally, Melhus held video projections and relates to the streets of Tokyo in collaboration with a fellow participant in the residency and Japanese artists.



キルヒハイム・ウンター・テック(ドイツ)生まれ。ベルリンを拠点に活動。カッセル芸術大学美術学部教授(2003年～)。主な展覧会に、「The Theory of Freedom」(クストハル美術館、オランダ、2015)、「アーティスト・ファイル2011ー現代の作家たち」(国立新美術館、東京、2011)、「第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ」(ラテンアメリカ館、2011)など。

Born in Kirchheim/Teck, Germany. Lives and works in Berlin. Professor for fine arts (virtual realities) at Kunsthochschule Kassel (2003-). Selected exhibition: The Theory of Freedom (solo exhibition), Kunsthal Rotterdam, Netherlands, 2015

リサーチ・レジデンス・プログラム Research Residency Program

フェルメール & ヘイルマンズ VERMEIR & HEIREMANS

滞在期間：2015.9.1～9.28

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Images for In-Residence Magazine 03
(scheduled 2017)

カトリーン・フェルメールとロナルド・ヘイルマンズによるアーティスト・ユニット。2006年に結成。ブリュッセルを拠点に活動。主な展覧会に、「transmediale 2016」(世界文化の家、ベルリン、2016)、「堂島リバービエンナーレ2015」(堂島リバーフォーラム、大阪、2015)など。

アート、建築、金融の受動する相互関係に着目し、経済の取引とアートの価値形成の関係を映像や雑誌のかたちで作品にしています。滞在中には、日本の経済と株式市場、不動産、アートマーケットの関係について専門家に取材をしました。

Focusing on the correlation between art, architecture, and finance, the artist duo Vermeir & Heiremans create videos and magazines reflecting the relationship between economic transactions and the formation of a value system in art. While in Japan, the artist duo interviewed experts about the relations between the Japanese economy and the stock market, real estate, and art market.

The artist unit formed in 2006, consisting of Katrien Vermeir and Ronny Heiremans. Lives and works in Brussels. Selected exhibition: Transmediale 2016, Haus der Kulturen der Welt, Berlin, 2016

ハディン・シャーベル Hadin CHARBEL

デボラ・ロペス Deborah LOPEZ

滞在期間：2016.9.1～9.27

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

建築家の視点から、住宅前の沿道に置かれた鉢植えや、ホームのベンチで読書や飲食をする人々を観察し、東京における公共とプライベート空間の境界を探究。また、家の中の私物を外に快適に持ち出すためのキットを構想しました。

Hadin Charbel and Deborah Lopez investigated the boundary between public and private spaces in Tokyo from an architectural perspective. Referring to Toyo Ito's 1985 Nomad Woman Project, the research and field studies sought to re-interpret what the pre-furniture's are and who they serve today, 30 years later, in a city able to supply its inhabitants with virtually everything.



Local Intelligence 3

シャーベル：ロサンゼルス(アメリカ)生まれ。2012年カリフォルニア大学ロサンゼルス校芸術・建築学部卒業。ロペス：カカペーロス(スペイン)生まれ。2012年マドリッドヨーロッパ大学卒業。(専攻：建築と応用美術)2015年、デザイン・リサーチ・スタジオ(n) approximationsを共同設立。

Hadin CHARBEL : Graduated from UCLA School of Arts and Architecture in 2012.
Déborah LÓPEZ : Graduated from European University of Madrid in 2012.

ホンソン・チャン JANG Hong Seon

滞在期間：2015.9.2～9.26

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



ソウル生まれ。ニューヨークを拠点に活動。2003年ロチェスター工科大学大学院修士課程修了。主な展覧会に「Waxed/Waned」(David B. Smith Gallery、アメリカ、2014)、「TXT: art, language, media」(Sugar Hill Children's Museum of Art & Storytelling、アメリカ、2015)など。

活動拠点のニューヨークで体験した同時多発テロ、それにより喚起された母国・韓国での兵役や北朝鮮に対する警戒感を常に意識して活動を展開。滞在中は、日本のアーティストと東日本大震災後の活動について対話し、問題意識を共有しました。

Experiencing the September 11th attacks in New York where he is based, Hong Seon Jang's works always imply his consciousness of Korea's compulsory military service and an alarming feeling toward North Korea. Jang engaged in dialogues with Japanese artists about activities after the 2011 Great East Japan Earthquake and tsunami and shared related issues.

Born in Seoul. Lives and working in New York. Graduated with an MFA from Rochester Institute of Technology in 2003. Selected exhibition: Waxed/Waned (solo exhibition), David B. Smith Gallery, America, 2014

リサーチ・レジデンス・プログラム Research Residency Program

アレックス・デイヴィーズ Alex DAVIES

滞在期間：2015.9.5～9.30

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Futute Robotics Technology Center (fuRo)
Photo: Alex Davies

メディア・アーティストとして、社会におけるロボットの存在やロボットが生み出す文化を研究し、人とテクノロジーの関わりを考察しています。今回の日本滞在では複数のロボット工学者と話し合いを重ね、コラボレーションの可能性を探りました。

As a media artist, Alex Davies investigates the presence of robots in society and culture created by them and researches the relationship between people and technology. In this residency, Davies had a series of conversations with several researchers specialized in robotics and explored possibilities for future collaboration.

シドニー生まれ、在住。2013年ニューサウスウェールズ大学大学院にて博士課程修了(メディアアート)。主な展覧会に「Cosmic Love Wonder Lust」(Campbelltown Art Centre, オーストラリア、2015)、「Sydney Festival」(Artspace, オーストラリア、2014)など。

Born and lives in Sydney. Earned his Ph.D in Media Arts from College of Fine Arts, the University of New South Wales. Selected exhibition: Cosmic Love Wonder Lust, Campbelltown Art Centre, Australia, 2015

ナタリ・アドニョ Natale ADGNOT

滞在期間：2015.10.5～11.26

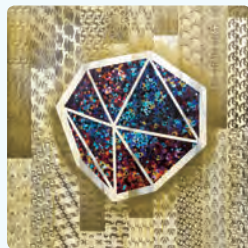
活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

鉱物学の用語と、人の性格を表す言葉を結びつけた絵画シリーズ「ミネラル(鉱物)」の日本版を制作。日本人が鉱物を指す言葉から連想する歴史上の人物や、政治家、芸能人などを選ぶためのリサーチを進めました。

Natale Adgnot worked on a Japanese version of "Mineral", a series of paintings that combine terms in mineralogy with words describing personality traits. Adgnot researched about historical figures, politicians, and entertainers whom people associate with terms related to minerals.

カリフォルニア生まれ。2015年より東京を拠点に活動。ニューヨーク州立ファッション工科大学(2009-2010)などで教鞭を取る。主な展覧会に、「Perceptions」(ロジャー・スミス・ホテル、ニューヨーク、2015)、「True Colors」(Littlefield Art Space、ニューヨーク、2015)ほか。

Born in California. Lives and works in Tokyo since 2015. Selected exhibition: Perceptions, Roger Smith Hotel, New York, 2015

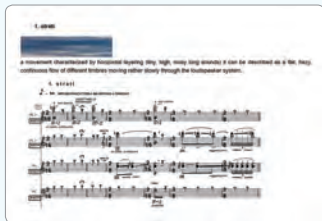


Chalcocite II

ヴァレリオ・サニカンドロ Valerio SANNICANDRO

滞在期間：2015.10.7～11.28

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



A Book of clouds, 2015

作曲家として、音の空間配置・立体化についてリサーチを行い、さまざまな日本文化の体験を通して創作のインスピレーションを得ました。また、日本の演奏家らの協力を得て、両国門天ホールで作品を発表しました。

Conducting research on the spatialization of music, Valerio Sannicandro gained creative inspiration as a composer through his experiences in various aspects of Japanese culture. Sannicandro also presented his works at Ryogoku Monten Hall in partnership with Japanese musicians.

イタリア生まれ。パリを拠点に活動。2014年ベルリン工科大学博士課程修了(音楽学)。ダラムシュタットやヴェネツィア・ビエンナーレ、ドナウエッセンゲン音楽祭、バイエルン国立管弦楽団など、委嘱多数。2014年クラウディオ・アバド作曲コンクールにて第1位受賞。

Born in Italy. Lives and works in Paris. Earned his Ph.D in Musicology from TU-Berlin in 2014. Sannicandro was awarded the Claudio-Abbado-Kompositionspreis.

リサーチ・レジデンス・プログラム Research Residency Program

バーバック・ハシェミ=ネジャド Bahbak HASHEMI-NEZHAD

滞在期間：2015.10.15～11.15

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



墨田区の協力を得ながら、区内の革職人や江戸切子の工場、時計会社などと連携して、「地域プロダクト」の在り方を追究。職人、文化機関、コミュニティに働きかけて、工芸とデザインの新たな関係を模索しました。

In cooperation with Sumida City, Bahbak Hashemi-Nezhad collaborated with local leather craftsmen, workshops specialized in Edo cut glass, and watch manufacturers to explore the concept of local product. Engaging with artisans, cultural institutions, and communities, Hashemi-Nezhad searched for a new relationship between crafts and design.

バーミンガム生まれ。ロンドンを拠点に活動。2008年ロイヤル・カレッジ・オブ・アートにて修了(プロダクト・デザイン)。主な活動に「Mapping Mapusa Market」(British Council, AHRC、インド、2014)、「Edgware Road Project」(Serpentine Gallery、ロンドン、2014)など。

Born in Birmingham lives and works in London. Graduated with an MA in Design Products from Royal College of Art in 2008. Selected activity: Mapping Mapusa Market, British Council, AHRC, India, 2014

ミーシャ・クラニックスフェルト Micha KRANIXFELD

滞在期間：2016.1.6～2.2

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

東京ジャーミィ・トルコ文化センターを通じて、イスラム教徒に改宗した日本人女性を取材し、社会における選別や人種的分離の問題を考察しました。また、ヒジャブで顔を覆う習慣を研究し、日本のマスクにも調査の対象を広げました。

With the assistance of Tokyo Camii Center, Micha Kranixfeld interviewed Japanese women who have converted to Islam to examine issues of social classification and racial segregation. He also researched the custom of wearing the hijab to hide the face and extended his study to include Japanese surgical masks.

1988年ギーセン(ドイツ)生まれ。ハンブルクを拠点に活動。2015年ハンブルク・ハーフェンシティ大学大学院にて修了(都市計画)。主なプロジェクトに「Schleier Mayer」(Schwankhalle Bremen、ZZZ、Explosive Festival、ドイツ、2015)「Club of Peccadillos」(EXPLOSIVE Festival、ドイツ、2015)など。

Born in Giessen, Germany in 1988. Graduated in urban design from HafenCity University Hamburg in 2015. Selected project: Schleier Mayer, Schwankhalle Bremen, ZZZ and Explosive Festival, Germany, 2015



ジョシュア・D・ゴンサルヴェス Joshua D. GONSALVES

滞在期間：2016.1.7～2.2

活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



日米の映像メディアにおけるプロパガンダを比較研究し、日本の戦時下や戦後の映画を調査しました。ワークショップを実施し、当時の映画に描かれた戦後日本の社会状況、倫理観について参加者と議論を交わしました。

Joshua D. Gonsalves compared Japanese and American propaganda films to research cinema produced during and after World War II. In the workshop Gonsalves held, he engaged in a lively discussion with participants about the postwar social conditions and ethical values depicted in the films.

モントリオール生まれ、バイルート在住。2002年ニューヨーク大学博士課程修了(英文学)。現在、バイルート・アメリカン大学(レバノン)にて助教を務め、映像文化や美術に見られる、政治や軍事の歴史とロマン主義の系譜を比較研究している。

Born in Montreal. Earned his Ph.D in English literature from New York University in 2002. Publication: Bio-Politicizing Cary Grant: Pressing Race, Ethnicity and Class into Service in "Amerika," Zero Books, 2015

リサーチ・レジデンス・プログラム Research Residency Program

イサベル・デ・セナ Isabel DE SENA

滞在期間：2016.2.7～3.31 活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



1954～72年に活動した「具体美術協会」が今日の東京にもたらした影響を調査。領土主義的な美術史からの脱却を目指し、オリジナル性とその延長としての「中心—辺境」モデルに疑問を投げかけるキュレーションを探究しました。

Isabel de Sena conducted research on Gutai Group, which was active between 1954 and 1972, and examined its legacy in present-day Tokyo. Working towards a deterritorialized art history, de Sena sought artistic and curatorial strategies that question originality and in extension the center-periphery model.

ビーゴ(スペイン)生まれ。ベルリン在住。2015年ライデン大学修士課程修了(美術史)。現在フリーランスのキュレーター、アート・ライターとして活動。主な活動にCTM(ベルリン)とCalArts & Caltech(ロサンゼルス)の共同プロジェクト「Time after Time」(2016-2017)ほか。

Born in Vigo (Spain), de Sena is an independent curator and writer currently based in Berlin. She graduated with an M.A. (Hons.) in Art History from Leiden University in 2015.

マヌエル・シルヒャー Manuel SCHILCHER

滞在期間：2016.2.9～3.31 活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency

展示デザイナー、キュレーターとして、明治～昭和30年頃までの日本における視覚文化を研究。東京近郊や韓国のさまざまな博物館、美術館を訪問し、戦争記憶の伝え方、それぞれの館が語るストーリーの差異を調査しました。

As an exhibition designer and curator, Manuel Schilcher investigated visual culture in Japan between 1868 and 1955. Visiting museums in Tokyo and Korea, Schilcher researched how each museum conveys the memory of war and the differences that emerged in the museums' stories.



オーストリア生まれ。リンツを拠点に展示デザイナー、キュレーター、アーティストとして活動。主な活動に、マウトハウゼン・メモリアル・サイト(マウトハウゼン強制収容所跡)の常設展示の企画、展示デザイン(2013)など。

Born in Austria. Lives and works in Linz as exhibition designer, curator and artist.

インガ・ザイドラー Inga SEIDLER

滞在期間：2016.2.13～3.31 活動拠点：TWSレジデンス TWS Residency



Photo by GetHiroshima.com
CHIM ↑ POM "HIROSHIMA!!!!!!" EXHIBITION
- "without SAY GOODBYE" CC BY-NC 2.0

メディアアートフェスティバルのプログラムマネジャーを務め、東京のアートシーンにおけるアートとアクティビズムの関係を探究。東京のオルタナティブシーンで活動するアーティストや活動家を中心に、多くのインタビューを行いました。

Working as a programmer at transmediale festival for arts and digital culture, Inga Seidler investigated the relationships between arts and activism in Tokyo's cultural scene. During the research residency she conducted a number of interviews with local artists, activists and theorists working at this intersection.

ドイツ生まれ。ベルリンを拠点に活動。2008年にハンブルク音楽演劇大学修士課程修了。後、ライプツヒの美術アカデミーの大学院にてキュレーションを学ぶ。現在「トランスメディアール」(アートとデジタル文化のフェスティバル)のプログラム・マネジャーを務めている。

Born in Germany. Lives in Berlin. Enrolled in the postgraduate study program Cultures of the Curatorial at the Academy of Visual Arts in Leipzig.

OPEN STUDIO 2015-2016

TWSレジデンスに滞在したクリエイターが、制作やリサーチの過程を公開するイベントを3回開催しました。展示のほか、クリエイターによるプレゼンテーションを毎回実施しました。第1回は、青森公立大学国際芸術センター青森(ACAC)の服部浩之氏をゲストに招き、クリエイターとのトークを行ったほか、アントニ・ムンタダスがプレゼンテーションを開催。第2回、第3回では、各クリエイターが自身の作品や活動について発表し、多くの来場者と交流しました。

Three open studio events were held to present the work and research processes of the residency artists. In addition to exhibiting works, talks were also held during each open studio.

第1回：2015.7.18(土)

第2回：2015.11.14(土)

第3回：2016.3.12(土)

会場：TWSレジデンス



プレ・オープン・スタジオ・トーク Pre-Open Studio Talk

TWS レジデンスに滞在中のオリバー・ビアが、自身の作品と制作について解説し、トークの後半では、ゲストに2015年度大和日英基金アートプライズの審査員であるジョナサン・ワトキンス氏（IKON ギャラリー、ディレクター）と片岡真実氏（森美術館チーフキュレーター）を迎え、日英のアートシーンの今を紹介しました。

TWS Residency participant Oliver Beer gave a presentation on his work and his artistic practices. In the second half of the presentation, he was joined by two jury members for the Daiwa Foundation Art Prize 2015, Jonathan Watkins (Director, Ikon Gallery) and Mami Kataoka (Chief Curator, Mori Art Museum), to discuss their views on the contemporary art scenes in Japan and Britain.

2015.11.12(木)

会場：TWSレジデンス



ラモン・ピアグアヘ トーク・イベント Ramón Piaguaje Talk Event

セルバンテス文化センターで開催された展覧会の関連イベントとして、アマゾン熱帯雨林の先住民、セコヤ族の画家、ラモン・ピアグアヘ氏のトークをエクアドル大使館との共催で実施しました。トーク終了後は、作品の制作からアマゾンでの暮らしや社会にいたるまで、参加者との間で交流が深められました。

A talk by Ramón Piaguaje, a painter from the Secoya tribe in the Amazon rainforest, was organized in cooperation with the Embassy of Ecuador as a satellite event for an exhibition at Instituto Cervantes. After the talk, Piaguaje had further dialogues with participants about his creative process as well as life and society in the Amazon.

2015.11.4(水)

会場：TWSレジデンス



TWSクリエイター・イン・レジデンス成果発表展 トーキョー・ストーリー2015 TWS Creator-in-Residence Exhibition TOKYO STORY 2015

東京や世界で滞在制作したアーティストの成果展

「トーキョー・ストーリー2015」は、二国間交流事業プログラムで各都市に派遣された日本人クリエイターと、海外クリエイター招聘プログラムでトーキョーワンダーサイトレジデンスに滞在した海外クリエイターの計8名によるレジデンス成果発表展です。滞在都市に住む人々と接しながら、その街の歴史や文化に触れ、その多様性を体験するなかで、クリエイターは制作に向けて綿密なリサーチを重ねます。クリエイターが収集した「素材」は、滞在終了後により磨きをかけられ、プログラム参加の集大成として結実した作品がTWS本郷で展開されました。

Exhibiting the results of residency artists in Tokyo and overseas

Tokyo Story 2015 was an exhibition of the work of eight artists who were either Japanese artists sent to different cities as part of the Exchange Residency Program or invited overseas artists who stayed at Tokyo Wonder Site. The artists advanced their in-depth research while engaging with people in the respective cities, learning the history and culture, and experiencing this diversity. The “materials” collected by the participants were further refined after finishing the residencies and then exhibited at TWS Hongo as the culmination of each program.

第1期：2015.4.18(土)～2015.5.31(日)

第2期：2015.6.13(土)～2015.7.26(日)

会場：トーキョーワンダーサイト本郷



参加アーティスト

〈第1期〉

伊藤久也	Hisaya ITO
久野 梓	Azusa KUNO
鈴木紗也香	Sayaka SUZUKI
安野太郎	Taro YASUNO

〈第2期〉

川久保ジョイ	Yoi KAWAKUBO
下平千夏	Chinatsu SHIMODAIRA
西原 尚	Nao NISHIHARA
モハメド・アラム	Mohamed ALLAM

提携機関(都市)

アトリエ・モンディアル(スイス・バーゼル)、ベルリン市／クストラウム・クロイツベルク／ベタニエン(ドイツ・ベルリン)、ロンドン芸術大学(イギリス・ロンドン)、韓国国立現代美術館／MMCAレジデンス・コヤン(韓国・ソウル)、アーツ・イン・レジデンス台北／トレジャーヒル・アーティスト・ヴィレッジ(台湾・台北)

ATELIER MONDIAL, Berlin City, Kunstraum Kreuzberg/Bethanien, University of the Arts London, Taipei Artist Village, Treasure Hill Artist Village, National Museum of Modern and Contemporary Art, Korea / MMCA Residency Goyang

第1期:伊藤久也 Hisaya ITO

二国間交流事業プログラム〈ソウル〉、2014.10～12滞在

ソウルと日本の類似点や相違点を見出し、特に韓国の日常に入り込む「兵役」に着目。「父」「母」「兵役中の男性」「それを待つ彼女」というテーマで制作された4作品は緩やかにリンクし、韓国の一般家庭を俯瞰したようなインスタレーションになりました。

Finding both similarities and differences between Seoul and Japan, Hisaya Ito focused on the compulsory military service that is a significant part of everyday life in Korea. The artist created an installation of four loosely interrelated works about a father, a mother, a man doing military service, and his girlfriend who is waiting for him, presenting an overview of a typical Korean family.

1987年東京都生まれ。2014年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。弟の死をきっかけに人の存在や認識を問いかけた彫刻作品や、祖母の洋裁の技術をテーマに作成した映像インスタレーションなど、自身の身近な関係から制作を進めている。
Born in Tokyo in 1987. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2014. Since the death of his brother, Ito has been creating works inspired by relationships that are familiar to him, including a sculptural work that questions human existence and awareness, and a video installation on the theme of his grandmother's dressmaking skills.



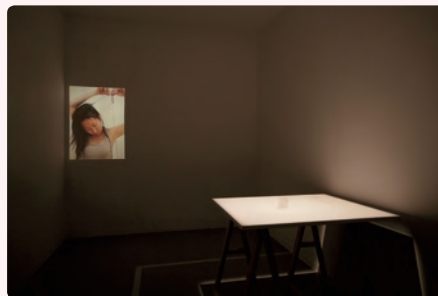
《隣のおふくろの味》2014 The taste of neighbor mom's home cooking, 2014

第1期:久野 梓 Azusa KUNO

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉在住、2014.7～10滞在

他者性の探求をテーマに、人毛を用いた作品を制作し、レジデンス滞在時には巨大なインスタレーションを制作。本展では対照的に、個人的視点、視覚的思考に重点を置き、自身の毛髪のみで立方体状に編み上げた、繊細な作品を中心に展示を行いました。

Azusa Kuno uses human hair to create her work themed around the search for otherness. During her residency she made a large installation, but for this exhibition she focused on a personal perspective and visual way of thinking, presenting a delicate work featuring her own hair woven into a cubic shape.



《Scaffolding》2014

1980年愛知県生まれ。2013年ベルリン芸術大学マイスター課程修了。身体、人、社会の相互関係への関心を起点とし、近年は特に、多岐にわたる個人情報を含む髪を媒体として使用した立体作品を制作している。

Born in Aichi in 1980. Finished Meister Course Fine Art at The Berlin University of the Arts in 2013. Kuno's starting point is her interest in the interrelationships between the human body, the individual and society. In recent years Kuno has been creating three-dimensional works using the medium of human hair, which contains a great deal of information about individuals.

第1期:鈴木紗也香 Sayaka SUZUKI

二国間交流事業プログラム〈バーゼル〉、2014.5〜7滞在

部屋の風景をモチーフとし、「内」と「外」の境界線を捉えなおすことで、絵画の持つ平面性を追求。本展では、部屋全体を作品とみなし、絵画的思考を基に、鑑賞者自身を「内」と「外」の狭間に誘う効果を狙いました。

Using the scenery of a room as her motif, Sayaka Suzuki investigates the two dimensionality of painting by re-configuring the boundary between inside and outside. For this exhibition, the artist considered a whole room as an artwork in its own right in an attempt based on pictorial concepts to create the effect of leading viewers to the gap between inside and outside.

1988年ロンドン生まれ。2014年多摩美術大学大学院絵画科油画専攻修了。自己と外の関係性を、屋内・屋外や有機・無機など相反するものに置き換え、窓や鏡を介して入れ子状になる世界を描く。

Born in London in 1988. Graduated with an MFA in Oil Painting from Tama Art University in 2014. Suzuki transposes the relationship between herself and the external world to opposing phenomena like interior/exterior and organic/inorganic, and paint worlds that nest within one another through the use of windows and mirrors.



第1期:安野太郎 Taro YASUNO

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉、2015.2〜3滞在

数年来自身が提唱する「ゾンビ音楽」を追求し、ゾンビ音楽演奏器として細工した自動掃除機ロボットを、笛吹き男の伝説で知られるハーメルンの街で走らせ演奏したパフォーマンスの記録と、滞在中のリサーチ及び制作過程を綴った日記を発表しました。

Developing the "Zombie Music" that he has advocated for several years, Taro Yasuno presented the documentation of the performance of a robotic electronic vacuum cleaner converted into a zombie music instrument he created in Hameln, the town in Germany known for the Pied Piper legend.



1979年東京都生まれ。2004年情報科学芸術大学院大学修了。自ら提唱する非人間指向の、自作のロボットによる自動演奏音楽『ゾンビ音楽』の制作、発表を中心とした活動を行う。

Born in Tokyo in 1979. Graduated with an MA in Media Creation from International Academy of Media Arts and Science in 2004. Yasuno's activity focuses on the creation and presentation of "Zombie Music," the non-human-oriented automatic performance music that he has put forward, made by robots that he build by himself.

《SEXTET》2015

第2期:川久保ジョイ Yoi KAWAKUBO

二国間交流事業プログラム〈ロンドン〉、2014.9〜10滞在

視覚、聴覚など身体感覚に直接的に訴える作品を展開。生まれ育ったトレドと、滞在したロンドンの経験を基に、時間の解釈を通して歴史と存在を問う作品に挑戦しました。

Yoi Kawakubo's work directly appeals to the physical senses such as visual and hearing. Based on his experiences in Toledo, where he grew up, as well as London, Kawakubo questions history and existence through his interpretation of time.

1979年トレド(スペイン)生まれ。2003年筑波大学人間学類卒業。形而上学性を作品の中心的なテーマとして制作活動を行う。風景の普遍性や写真行為の形而上学性を追求した平面作品、偶然性やメタ認知を主題・媒体としたインスタレーション、サウンド作品を制作。2012年以降は原子力の問題や東北の被災地に関連した活動も行っている。

Born in Toledo (Spain) in 1979. Graduated with a BA in Human Sciences from the University of Tsukuba in 2003. A central theme in his works is the metaphysical nature of reality. He creates two-dimensional works exploring the universality of landscape and the metaphysical nature of photographic actions, as well as installations and sound works with contingency and metacognition as subject and medium.



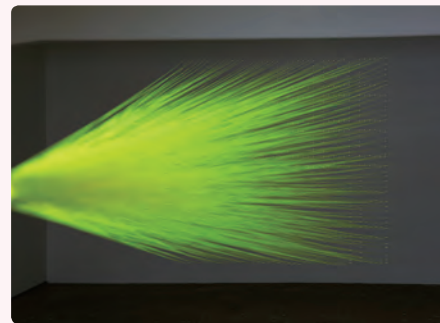
《二百万年の孤独》2015
Two Million Years of Solitude, 2015

第2期:下平千夏 Chinatsu SHIMODAIRA

二国間交流事業プログラム〈台北〉、2014.9〜12滞在

台北滞在中には、滞在先施設の屋外で建築用の水糸を用いたインスタレーションを発表。本展では同じ素材を用い、展示室を縦断する作品を制作し、規則的な配置に内包された見えない力の可視化を試みました。

While staying in Taipei, Chinatsu Shimodaira exhibited an installation outside the residential facility, utilizing a string level like the kind used in architecture. She employed the same material for this exhibition, making a work that vertically cut the exhibition room in an attempt to visualize the invisible power latent in systematically arranged string.



1983年長野県生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。日常生活の中で、無意識に支配されている行動や認識など、自身をとりまく「境界」について考察し、サイトスペシフィックなインスタレーション作品を主に制作、発表している。

Born in Nagano in 1983. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2010. Shimodaira thinks about the "boundaries" that surround us in daily life, such as unconsciously controlled behaviors and awareness. Her creation and expression focus on site-specific installation works.

《Photon》2015

第2期:西原 尚 Nao NISHIHARA

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉、2014.11~2015.1滞在

自動車のボンネットをスーパーボールで擦ることによって、コントラバスのような地を這う重低音を発生させるインスタレーション。本展では、床面のみならず壁面にも設置し、より重層的に音が重なり合う音空間へと展示を発展させました。

Nao Nishihara exhibited an installation where bouncy balls rubbed against the hood of a car, creating a deep, low sound like that of a double bass. Exhibits were placed not only on the floor but also on the wall in order to develop the space into a multiple layered soundscape.

1976年広島県生まれ。2011年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。聞いたことのない音を鳴らすことで、人が生来持っている聞く力と好奇心の再認識を促すことをテーマに、展示やパフォーマンスなどを中心に活動している。

Born in Hiroshima in 1976. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2011. Using sound, Nishihara mainly creates exhibitions and performances on the theme of encouraging people's re-recognition of their inborn power of hearing and curiosity.



《耳のみち》2015 Journey Ear, 2015

第2期:モハメド・アラム Mohamed ALLAM

海外クリエイター招聘プログラム〈エジプト〉、2015.1~3滞在

稼働中の工場で行われたダンスパフォーマンスを東京とカイロの両都市で撮影し、ビデオインスタレーションとして発表。工場内の日常的な機械音の中で繰り返される非日常的なダンサーの動きは、作品中で語られるテキストと相まって、物語性と場所性を示唆しました。

Mohamed Allam exhibited his films of dance performance in operational factories in Tokyo and Cairo as a video installation. The unordinary movements of the dancers in the factories filled with the ordinary sound of machinery was combined with spoken text to imply a sense of narrative and locale



《Let's talk about secrets》2015

1984年生まれ。2008年ヘルワン大学芸術教育学部卒業。カイロ在住。社会や政治など自身を取り巻く環境を映像やパフォーマンスといった様々なメディアを用いて表現している。自身の作品に内在する皮肉さの根源に焦点をあてることにより、作品の文脈や枠組みを構成する。これらの要素を自身の文化的本質と結びつけ、より広大なネットワークに関連づけることを試みている。

Born in 1984. Lives in Cairo. Graduated from Faculty of art education, Helwan University in 2008. Allam uses different mediums such as video, performance and sound. Usually the surrounding environment with its social and political constituents provides the context and framework form which he focuses on the derivation of irony in his work.

トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル Vol.10 TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL – Sound, Art & Performance Vol.10

既存のジャンルにとどまらない実験的なプロジェクトを紹介するフェスティバル

音楽やサウンドをテーマに、国内外から多くの実験的な公演・展示企画が集まる「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル (TEF)」は、既存のジャンルや領域にとどまらない実験的な挑戦のプラットフォームとして、今回で10回目を迎えました。「TEFパフォーマンス」では、過去最多となる応募の中から厳しい選考を経て選出された公募プログラム12企画に加え、前回の受賞企画など、推奨プログラム3企画を加えた15企画を上演。「TEFサウンド・インスタレーション」では、様々なアプローチで空間にサウンドを配置するアーティスト4組による作品を展示しました。フェスティバル終了後には公募企画を対象に最終審査が行われ、最優秀賞、特別賞、奨励賞が選出されました。

A festival presenting experimental projects that transcend existing categories

Tokyo Experimental Festival (TEF) is a music and sound festival, bringing together many experimental performances and exhibitions by Japanese and international artists. Providing a platform for experimentation that transcends conventional categories and disciplines, TEF this year marked its 10th edition. "TEF Performance" showcased 15 performances; 12 of which were selected from a record number of applications through a rigorous selection process and three other works as the Recommendation Program including previous year's prize-winning performances. "TEF Sound Installation" exhibited works by four artists who employed a range of approaches to install sound in space. After the festival, the final jury selection was made to select the Grand Prize, the Special Prize, and the Encouragement Prize from the Open Call Program.

2015.11.21(土)~2016.2.7(日)

会場: トーキョーワンダーサイト本郷、両国門天ホール

協力: 一般社団法人もんでん(両国門天ホール)

〈審査員〉一柳 慧(作曲家、ピアニスト)

畠中 実(NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]主任学芸員)

沼野雄司(音楽学者、桐朋学園大学教授)

毛利嘉孝(社会学者、東京藝術大学准教授)

黒田みのり(トーキョーワンダーサイト事業課長)

TEFパフォーマンス 素我蝶部「SELL OUR BODY 2 exp.」
TEF Performance Scarabe「SELL OUR BODY 2 exp.」



TEF パフォーマンス「Secret Room Vol.2 – 布と箱」 TEF Performance「Secret Room Vol.2 -Cloth and Box」

工藤あかね Akane KUDO

2015.11.27(金)、28(土)19:30開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷



大掛かりな舞台装置のないシンプルな空間、布と箱の孕む無限のイメージを駆使し、ケージ、シュトックハウゼン、湯浅譲二の無伴奏声楽作品をモノオペラのように縫い合わせました。新作初演となった松平頼暁「Trio for One Player」では、独立した3パート（歌、ギター、踊り）を奏者1人で行いました。

Creating a minimal space without a large-scale set, Akane Kudo made use of the infinite imagery generated with cloth and box, and interwove the work of John Cage, Karlheinz Stockhausen, Joji Yuasa, and Yoriaki Matsudaira in the form of a monopera.

千葉県出身。東京藝術大学音楽学部声楽科ソプラノ専攻卒業。2011年ソロリサیتال「Secret Room」、2015年サントリー芸術財団「サマーフェスティバル」に出演。藤田朗子とのデュオ「タムユラ」では、サティ「ソクラテス」、シェーンベルク「架空庭園の書」、ヴィエルクヌ「憂鬱と絶望」などを手がけている。

Soprano singer. Born in Chiba. Graduated from Tokyo University of the Arts (vocal music). Besides the traditional repertoires, she has performed many contemporary works such as K. Stockhausen, E. Satie, A. Schönberg, L. Viene etc.

TEF パフォーマンス「Drink Sky On Rabbit's Field (Funeral Song for Nothing)」 TEF Performance「Drink Sky On Rabbit's Field (Funeral Song for Nothing)」

アーノント・ノンヤオ Arnont NONGYAO

2015.12.4(金)、5(土)19:15開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷

アナログの映像システムとサウンド・ジェネレーターが一体となったオーディオ・ヴィジュアル・パフォーマンス。会場は虹色の光とアンビエント・サウンドで満たされ、祝祭の明るさと葬送の暗がり、時に分離不能なほどに混じりあい、客席を包み込みました。

Using a visual analog system along with a sound generator, Arnont Nongyao staged a highly unique audiovisual performance, combining rainbow lights and ambient sound which orbited around the venue.



1979年バンコク生まれ。チェンマイ大学美術学部卒業。サウンド・アーティスト、実験映像作家。サウンド、ビデオ、インスタレーション、サイトスペシフィックアート、パブリックアートなど、多様な形態のメディアと手法で作品制作を行う。チェンマイ・コレクティブ共同代表。

Sound artist and experimental video director. Born in Bangkok in 1979. Graduated from Chiang Mai University (fine arts, painting). He is also Co-Director of Chiang Mai Collective.

TEF パフォーマンス「[re]BO[u]NDS - expanded media」 TEF Performance「[re]BO[u]NDS - expanded media」

ジュリオ・コランジェロ+ヴァレリオ・デ・ボニス Giulio COLANGELO + Valerio De BONIS

2015.12.11(金)、12(土)19:15開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷



結合（ボンド）と拡散（リバウンド）を意味するタイトルが付けられたインターメディア・インスタレーション／パフォーマンス。3本のガラス製シリンドラーに滴下装置から水滴が落下すると、その落下音をトリガーに、プログラムがリアルタイムでサウンドを生成、音響の広がり照明をコントロールしました。

Triggered by drops of water, infinite sound and light were rebounded into the space. Giulio Colangelo and Valerio De Bonis created this intermedia installation

and performance using a “computing architecture” that processed sound and light in real time.

CON IL SOSTEGNO DEL PROGETTO (with the support of the project)
DE.MO./MOVING?UP I s essione 2015

ジュリオ・コランジェロ：フロッジョーネ音楽院（イタリア）修士課程修了。作曲家、インターメディア・アーティスト。ヴァレリオ・デ・ボニス：1981年イタリア生まれ。作曲家、インターメディア・アーティスト。

Giulio COLANGELO: Composer, Intermedia artist. Graduated with an MA degree cum laude in Electronic Music Composition from the Conservatory of Frosinone (Italy). Valerio De BONIS: Composer, Intermedia artist. Born in 1981 in Italy. He works in the field of Electroacoustic Music, Sound Installation, Video Art and Creative Writing.

TEF パフォーマンス「2015.8.30-9.1」 TEF Performance「30 Aug-1 Sep, 2015」

宝栄美希×山田 岳 Miki HOEI × Gaku YAMADA

2015.12.20(日)15:00開演 会場：両国門天ホール

ダンスと音楽、異なるキャリアを持ちながらも、ダンサーが歌を語り弾き、演奏家が身体表現を行う、専門性の融和を目標とした制作を行うデュオ。公演では私生活の表出、個人的な空間（プライバシー）をキーワードに、互いの専門分野を侵食しあいながら、音と身体をめぐる新しい関係の構築を試みました。

The dancer Miki Hoei and the guitarist Gaku Yamada staged a performance in which they intervened into each other's specialty on the theme of revealing private life. They attempted to construct a new relationship between music and the body.



宝栄美希：石川県生まれ。日本女子体育大学卒業。ダンサー、振付家として活躍するほか、ダンスと音楽、映像、美術分野とのコラボレーション活動も積極的に展開している。山田 岳：ギタリスト。現代音楽の演奏を活動の主軸に、他分野とのコラボレーションによる新しい表現へのアプローチにも意欲的に取り組んでいる。

Miki HOEI: Dancer, Choreographer. Born in Ishikawa. She graduated from Japan Women's College of Physical Education. Gaku YAMADA: Guitarist. He has performed a lot in the field of contemporary music and collaborative works with other disciplines.

TEF パフォーマンス「V う り い D で E お O 両国門天」
TEF Performance「V う り い D で E お O at Ryougoku Monten」

V う り い D で E お O (トマツタカヒロ+東 弘基) V う り い D で E お O [Takahiro TOMATSU + Hiroki AZUMA]

2015.12.21(月)19:30開演 会場：両国門天ホール



トマツタカヒロの肉態、東弘基のビデオ、ウッドとピアノの演奏で、日常生活を取り囲む映像メディアの本質に迫る実験的セッション。「Video」のラテン語での語源「わたしはみる／わたしをみる」をテーマに、虚構と現実、主観と客観、見るものと見られるもの、相反する物事が複雑に絡みあい、両国門天ホールの時空間に投影されました。

Based on the etymology of the term "video" in Latin-"I see/am seen"-Takahiro Tomatsu and Hiroki Azuma staged an experimental performance involving body, video, and music that entwined fiction and reality, and the subjective and the objective.

出演：トマツタカヒロ(肉態表現)、東 弘基(ビデオアート)、Paul N. Dorosh(ウッド)、大和田千弘(ピアノ)

トマツタカヒロ：東京都出身。約20年間、精神医療に関わりながら格闘技修行を続け、日常から魂と身体との融解を「肉態」と称し、様々な表現を試みる。東弘基：神奈川県出身。ビデオアーティスト。ビル・ヴィオラに感銘を受け、「VIDEO／私は見る」をテーマに作品制作を行う。

Takahiro TOMATSU: Corporeal performing artist. Born in Tokyo. He has performed in various fields of art and experimentation. Hiroki AZUMA: Video artist. Born in Kanagawa. He was impressed by Bill Viola's artworks and started his career as an artist.

TEF パフォーマンス「into the ether...」 TEF Performance「into the ether...」

TEF10最優秀賞受賞

バイナリー(リナ・アンドノヴスカ&ジャネット・マッケイ) BINARY(Lina ANDONOVSKA and Janet MCKAY)

2015.12.22(火)19:30開演 会場：両国門天ホール

オーストラリアを拠点に活動するフルート奏者2名によるコンサート。ヘビメタの影響が感じられるデ・レオン、繊細な輝きを放つ金子仁美の「雅」、オーストラリア在住のカルスキ、シュロモヴィッツの作品が続き、最後はフィリップ・グラスの「Piece in the Shape of a Square」。パワフルでエキサイティングな演奏が会場を満たしました。



This contemporary music concert was performed by BINARY, a flute duo based in Australia. Their ambitious playlist and superb musical performance exhilarated the audience and the duo received the Grand Prize in the TEF Vol.10 Open Call Program.

リナ・アンドノヴスカ：1987年生まれ。オーストラリア国立大学(音楽)卒業。フルート奏者として、国内外で演奏活動を行っている。ジャネット・マッケイ：1973年ブリズベン生まれ。クイーンズランド大学博士号(音楽)取得。フルート奏者。

Lina ANDONOVSKA: Flutist. Born in 1987. Graduated from Australian National University (music). She has performed in concert halls at home and abroad. Janet MCKAY: Flutist. Born in Brisbane in 1973. She received Ph.D in Music Performance from the University of Queensland.

TEF パフォーマンス「Tunnel Ensemble」 TEF Performance「Tunnel Ensemble」

TEF10奨励賞受賞

トンネル・アンサンブル(マーク・ヴィラノヴァ&ペーター・ブライテンバッハ)
Tunnel Ensemble (Marc VILANOVA and Peter BREITENBACH)

2015.12.23(水・祝)19:00開演 会場：両国門天ホール



エレクトロニクスの可能性を用いた多様なサックス・サウンドの実現と、新しい音空間の創造を目指して創作活動を行うデュオ、トンネル・アンサンブル。今回は4つの言語で「トンネル」を意味するタイトルがつけられた4曲を演奏、サックスとエレクトロニクスによる魅惑的なサウンドが、観客を音楽のトンネルへと誘いました。

This was a concert by Tunnel Ensemble, who explores new relations between saxophone and electronics creating pieces. Their perfectly matched musical performance led audiences into the dazzling sound of the ensemble. The duo received the Encouragement Prize in the TEF Vol.10 Open Call Program.

サックス奏者マーク・ヴィラノヴァ(1991年スペイン生まれ)とエレクトロニクス奏者ペーター・ブライテンバッハ(1987年ドイツ生まれ)により、2013年、シベリウス音楽院(フィンランド)にて結成されたデュオ。

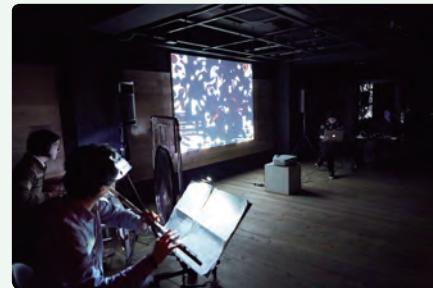
Tunnel Ensemble was founded in 2013 at the Sibelius Academy in Helsinki (FI). Saxophonist Marc VILANOVA (born in Spain in 1991) and electronic musician Peter BREITENBACH (born in Germany in 1987) are trying to open up new sound spaces with pieces composed in the tension between improvisation and research.

TEF パフォーマンス「関島岳郎と世界」 TEF Performance「Takero Sekijima and The World」

世界(勅使河原一雅+石田多朗) The World (Kazumasa TESHIGAWARA + Taro ISHIDA)

2015.12.24(木)19:30開演 会場：両国門天ホール

ピアノ、銅鑼、フルート、チューバ。即興の演奏を感知して、プログラムで自動生成された抽象的なイメージをスクリーンに映し出すパフォーマンス。映像の変化が演奏の変化をもたらし、またそれが映像に変化を与える—映像によって生じた心のさざ波に寄り添う演奏に浸りながら、自身の内面と向き合うような、不思議な体験がもたらされました。



As the work detects improvised music, abstract images were generated automatically and projected onto a screen. The World created a meditative space that led the audience to a journey of the mind.

出演：勅使河原一雅(映像)、石田多朗(作曲)、関島岳郎(チューバ、リコーダー)、伊藤寛武(フルート)

「世界」は勅使河原一雅(アート・ディレクター、映像作家／qubibi)と石田多朗(作曲家)により2015年3月から活動を開始。抽象的な映像と即興演奏等による独自の表現を用い、美術館を中心にコンサートを行っている。

「The World」consists of Kazumasa TESHIGAWARA (art director, video artist/ qubibi) and Taro ISHIDA (composer). Started from March 2015, using abstract images and improvised music, they have held concerts mainly in museums.

TEF パフォーマンス「山本和智エレクトロニクス作品展」

TEF Performance「Concert for fixed media and live-electronics of Kazutomo Yamamoto」

TEF10推奨プログラム

山本和智 Kazutomo YAMAMOTO

2015.12.25(金)19:00開演、26(土)15:00開演 会場：両国門天ホール



作曲家、山本和智による初のエレクトロニクス作品展。40歳（不惑）を前に「思う存分、惑う」ことをテーマにした“Roaming liquid set”、超自然と我々を繋ぐ役割を持つ巫女（＝媒介者）をモチーフにした“Trance-media”、オノマトペとギターのための作品など、初演3曲を含むプログラムで、特異な才能を持つ山本の世界観が観客を魅了しました。

This was the first concert of the electronic works composed solely by Kazutomo Yamamoto, whose works have attracted attention for his unique worldview. The playlist included three world premieres, performed by guitar, marimba, shakuhachi, shamisen, biwa and electronics.

出演：有馬純寿(エレクトロニクス)、山田 岳(ギター)、黒田鈴尊(尺八)、篠田浩美(マリンバ)、久保田晶子(琵琶)、守 啓伊子(三味線)

山本和智：作曲家。山口県出身。独学で作曲を学ぶ。オーケストラ、室内楽、アンサンブル、合唱、独奏曲、映画音楽など作曲活動は広範にわたる。2009 年度武満作曲賞第2 位(審査員：H. ラッヘンマン)、2010 年第5 回JFC 作曲賞(審査員：近藤謙)など国内外問わず高い評価を得ている。

Kazutomo YAMAMOTO: Composer. Born in Yamaguchi in 1975. He won the 2nd Prize in the Toru Takemitsu Composition Award in 2009 (Japan/Judge: Helmut Lachenmann), The 6th International Jurgenson Competition in 2011 (Russia).

TEF パフォーマンス「フェミニュジック音楽の女子力」

TEF Performance「femmusic - fascinating of female composers」

渡邊理恵 Rie WATANABE

2015.12.27(日)17:00開演 会場：両国門天ホール

1940年代から90年代まで、それぞれの年代に生まれた7名の女性作曲家の作品を取り上げたコンサート。女性という共通の性別をもっている、全く異なる興味や関心から生み出された音楽を、多様な楽器や道具を用いて演奏し、作曲家たちの生き方やセンスの結晶を表現した、意欲的なプログラムになりました。

This challenging concert focused on the work of seven female composers, born in each decade from the 1940s to the 1990s. The wide range of percussion instruments and unique performance entertained the audience.

出演：渡邊理恵(打楽器・P)、大田智美(P)、角銅真美(P)、浅井隆之(P)、金巻 勲(P)、美山良夫(P)、有馬純寿(エレクトロニクス)
※P=パフォーマンス

渡邊理恵：打楽器奏者。1979 年生まれ。ケルン市在住。東京藝術大学、カールスルーエ音楽大学卒業。20/21世紀の作曲家による音楽・パフォーマンス作品を中心に演奏活動を行っている。2014 年より「TRAVEL MUSICA」を主宰。

Rie WATANABE: Percussionist. Born in 1979 and lives in Cologne. Graduated from Tokyo University of the Arts and Hochschule für Musik in Karlsruhe, Germany. In 2014, she started project “TRAVEL MUSICA”.



TEF パフォーマンス「Doline」 TEF Performance「Doline」

TEF9特別賞受賞

TEF10推奨プログラム

デルフィヌ・デブレ Delphine DEPRES

2016.1.10(日)、11(月・祝)19:15開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷



砂同士、あるいは砂と他の物質との衝突によって生じる小さなノイズをキャプチャーし、リアルタイムで音と映像をコントロールするオーディオ・ヴィジュアル・パフォーマンス。前年度の受賞企画を発展させ、「砂」という極小の世界にフォーカスした、美しいステージが広がりました。

“Doline” is a performance using the staging of sand on different states, points of view and ways of listening.

Every sound and images were produced by capturing tiny noises and movements made by frictions of sand, and manipulated in real time. TEF Vol.9 Special Prize-winning project.

Supported by Swiss Arts Council Prohelvetia

ヴィジュアル・アーティスト、ビデオ・ディレクター、パフォーマー。1982年フランス生まれ。ジュネーブ造形芸術大学卒業。投影されたイメージの中のドラマ性に着目したリサーチ、実験を行い、映像機器を用いて様々なレベル間で緊張感のある「リアルタイム」の体験を創造している。

Visual artist, video director and performer. Born in France in 1982. Graduated from the Geneva University of Art and Design - HEAD Genève. Her research and experimentations are focused on exploring the question of theatricality in projected image.

TEF パフォーマンス「ダンス・プロジェクト『DP1』」 TEF Performance「DP1 (Dehumanized Project Nr.1)」

イザベラ・フレヴィンスカ & トメク・ベルグマン
Izabela CHLEWIŃSKA and Tomek BERGMANN

TEF10推奨プログラム

2016.1.15(金)、16(土)19:15開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷

ポーランド人のダンサーとミュージシャンのデュオによる、人間性の喪失とメカニズム化された社会を描いた寓話的パフォーマンス。『1984』『すばらしき新世界』などのSF名著に着想を得ており、私たちが現代社会の抱える課題にどのように向き合うかを示唆するメッセージに富んだステージが展開されました。

This performance depicted dehumanization and the powerful mechanism that affects our societies as a funny, scary, grotesque, abstract and surrealistic fairy-tale.

Social issues and people who confront them were portrayed in dance, music, video and installation.

Supported by Polish Institute in Tokyo(ポーランド広報文化センター)、Adam Mickiewicz Institute, Centrum w Ruchu

イザベラ・フレヴィンスカ：ダンサー、振付家。1980 年ポーランド生まれ。トメク・ベルグマン：ミュージシャン、写真家、アーティスト。1972 年ポーランド生まれ。二人は2013年、トーキョーワンダーサイトのレジデンス・プログラムに参加し、ダンスプロジェクト「DP1」を制作、発表した。

Izabela CHLEWIŃSKA: Dancer, choreographer. Born in Poland in 1980. Tomek BERGMANN: Musician, photographer, and visual artist. Born in Poland in 1972. They participated in the TWS Residency program in 2013 and created DP1 (Dehumanized Project Nr. 1).



TEF パフォーマンス「展示『死の祝祭』」 TEF Performance「exhibition “festival of death”」

ヒューマナムー humanamuh

2016.1.22(金)、23(土)19:30開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷



演劇という動的なフォーマットの表現に、展示という静的なフォーマットの取り込みを試みた意欲的な実験作。人生で最もエネルギーを発する「死」という出来事を、前後の文脈から切り離し、単なる行為として陳列・展示していくことで、「死」の祝祭的輝き、「生」の儚さがあぶりだされました。

Using the form of a static exhibition, this experimental theater performance exhibited the moment of death when people emit the most energy, expressing the festive spark embodied in death and the transience of life.

出演：栗原隆幸(役者)、コースケ・リートフェルト(役者)、俵谷友子(役者) 演出：吉永輪太郎(作家・演出家)

2012年立ち上げ。思考をそのまま吐き出したかのような膨大な量の台詞、変速変拍子の台詞回し、瞬間瞬間の為に酷使される身体性を武器に、怪談、コント、アングラ、ダンス、舞踏、マスゲーム、落語、狂言等、あらゆる要素を雑食した「おもしろくて、こわい」プログレッシブホラー演劇を上演する。

Founded in 2012, theatrical company humanamuh has shown "curious and scary" progressive-horror theater works, inspired by ideas and elements from ghost story, comedy skit, underground theatre, dance, butoh, mass games, Japanese traditional comic storytelling and theatre.

TEF パフォーマンス「サウンド・パフォーマンス」 TEF Performance「Sound-Performance」

TEF10奨励賞授賞

アイゼンタンツ EISENTANZ

2016.1.29(金)、30(土)19:15開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷

身の回りに溢れる日用品や金属スクラップなどを組み合わせた自作楽器を自在に操り、どことなくレトロモダンな懐かしさを感じるノイズ・サウンドを奏でるユニークなパフォーマンス。既存の音楽ジャンルとは一線を画したその演奏は、言葉では形容し難い浮遊感と開放感を伴い、エキゾチックな空間を生み出しました。

Freely manipulating the instruments that the artist made out of the everyday items and metal scraps, EISENTANZ created a noise sound performance nostalgically reminiscent of retro sentiments. He received the Encouragement Prize in the TEF Vol.10 Open Call Program.



作曲家、パフォーマー。1971年チューリッヒ生まれ。日用品や金属、木材、石などを用いた自作楽器が生み出す様々なノイズを操り、壮観なパフォーマンスを生み出す。ベルリン、グラス、サンクトペテルブルク、デリーなど、世界各地で演奏を行っている。

Composer, performer. Born in Zurich in 1971. A variety of noises Eisentanz plays by using his original instruments made from everyday items is truly spectacular. He has performed his challenging music at important locations around the world.

TEF パフォーマンス「SELL OUR BODY 2 exp.」 TEF Performance「SELL OUR BODY 2 exp.」

素我螺部 Scarabe

TEF10特別賞授賞

2016.2.5(金)、6(土)19:30開演 会場：トーキョーワンダーサイト本郷



主観／客観の非分離をテーマに、理論生命科学者の西山雄大とのコラボレーションに挑んだ実験的パフォーマンス。他者の視線に接続されたヘッドマウントディスプレイを装着、主客が混じり合った世界に落とされたダンサーが、そこから新しい身体／主体を立ち上げてゆく過程を、独特の世界観で描き出しました。

This dance performance integrated experimentation with VR equipment, focusing on the theme of the inseparability of subjectivity and objectivity.

From Scarabe's unique worldview, it depicted the process in which a new body emerges. They received the Special Prize in the TEF Vol.10 Open Call Program.

出演：藤井b泉(ダンス)、宮原由紀夫(ダンス)、篠原未起子(ダンス)、原大介(ギター)、西山雄大(実験)

2014年夏結成。劇場専属舞踊団Noismでの活動を共にした仲間である藤井b泉＋宮原由紀夫＋篠原未起子とギタリスト原大介によるダンスグループ。『SELL OUR BODY』京都単独公演を皮切りに全国各地で上演を重ね、PARASOPHIAにて石橋義正氏作品『憧れのボディ / bodhi』に映像出演するなど、ジャンルを超えた幅広い活動を展開中。

Scarabe was founded in 2014, by Fujii b. Izumi, Yukio Miyahara and Mikiko Shinohara, the three former members of the theater resident dance company Noism, and also Daisuke Hara joined as a guitarist.

TEFサウンド・インスタレーション「Are You Experienced II」 TEF Sound Installation「Are You Experienced II」

木本圭祐 Keisuke KIMOTO

2015.11.21(土)～12.20(日) 会場：トーキョーワンダーサイト本郷 スペースB



《Are You Experienced II》2015

Using 46 instruments that make sound without any physical contact and operating them to generate acoustic drone, Keisuke Kimoto “played” *Are You Experienced* by Jimi Hendrix without a musician in an attempt to reconstruct the relationship between instruments and songs.

1989年広島県生まれ。東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院音楽研究科在籍。自作楽器を用いたパフォーマンスやインスタレーションの制作を行っている。

Born in Hiroshima in 1989. Graduated with a BFA in Music from Tokyo University of the Arts and enrolled in an MFA in Music from Tokyo University of the Arts. Kimoto uses self-build instruments for his performance and installation.

弦は無音の状態でも地面から伝わる振動で細やかに震えており、それを電氣的に増幅することで物理的な接触なく弦を発音させる機構を持つ楽器を制作。ジミ・ヘンドリクスが使用したFenderストラトキャスターの全音域が発音可能のようにチューニングした46台の自作楽器により、彼のデビューアルバム「Are You Experienced」を演奏者不在のアコースティックドローンとして演奏、楽器と楽曲、両者の再構築を試みました。

TEFサウンド・インスタレーション「スタンダード・サブレッサー」 TEF Sound Installation「Standard Suppressor」

山形一生 Issei YAMAGATA

2015.11.21(土)～12.20(日) 会場：トーキョーワンダーサイト本郷 スペースC/D

人は物体に対する破壊的な衝動を実行することで精神的な昇華を覚えることがあります。山形は、そのときは物体の形状の変化を視覚的によりも、聴覚的に認識することによって、多くの快楽を得ていると仮定しました。本展では、落下する物体から当然聞こえるはずの衝突音を消音し、劇的な効果音を再生することで、視覚と聴覚のズレを前景化し、知覚するという行為を問いました。

Omitting the sound of collision heard when an object hits a floor and instead playing dramatic sound effects, Issei Yamagata shed light on the disparity between our senses of sight and hearing, and questioned the very human act of perception.

1989年生まれ。東京藝術大学美術研究科絵画専攻修了。主な展示、発表としてDigital Humanize (東京藝術大学陳列館、2015)、SPVI(Turner Gallery、2014)など。

Born in 1989. Graduated with an MFA in Oil Painting from Tokyo University of the Arts. Yamagata lives and works in Tokyo. Recent exhibitions are Digital Humanize (2015/ Tokyo University of the Arts), SPVI (2014/ Turner Gallery).



《スタンダード・サブレッサー》2015
Standard Suppressor, 2015

TEFサウンド・インスタレーション「Paleo-Pacific」 TEF Sound Installation「Paleo-Pacific」

大和田 俊 Shun OWADA

TEF9最優秀賞授賞

TEF10推奨プログラム

2016.1.9(土)～2.7(日) 会場：トーキョーワンダーサイト本郷 スペースB



《Paleo-Pacific》2016

Using long-extinct and calcified fusulina fossils, Shun Owada examined on a grand scale the distance between living species and matter produced over a period of time that humans cannot even sense, and our relationship with perception. TEF Vol.9 Grand Prize-winning project.

サウンド・アーティスト。1985年栃木県生まれ。東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院美術研究科修了。音響と、生物としてのヒトの身体や知覚、環境との関わりに関心を持ちながら、電子音響作品やインスタレーションの制作を行っている。

Sound artist. Born in Tochigi in 1985. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts. Having an interest in physical/ physiological aspects of sound, Owada explores relations between sound and perceptions of (living) things. His works vary from live improvisation using computers to sound installation.

古代生物フズリナ（ペルム紀の海洋に繁栄し、2億5千万年前、史上最大の大量絶滅で滅んだ）化石を素材に、生物—物質間の非連続な隔たりにフォーカスした作品。知覚不能なほどの長い年月を経て石灰岩化したフズリナから取り出された音は、その隔たりを保存しているのか。そしてその音を聴取することは、隔たりを知覚することといえるのか、壮大なスケールで問いかけました。

TEFサウンド・インスタレーション「リアルタイム・オペレーター」 TEF Sound Installation「real-time operator」

メラニー・ヴィンドル Melanie WINDL

2016.1.9(土)～2.7(日) 会場：トーキョーワンダーサイト本郷 スペースC/D

観客自身が作品の最後のピースを埋めることで、インタラクティブな音空間が立ち上がるオーディオ・ビジュアル・インスタレーション。室内に設置された6つの巨大な風船に、スピーカーを構成する重要なデバイスであるエキサイター（電気信号を音声信号に変換する装置）を取りつけることで、来場者が発した音がマイクを介して風船の膜に伝達され、室内を満たしました。

Through the devices called “exciter,” which transferred electrical signal to acoustic signal and were attached to six gigantic balloons, the sounds made by visitors filled the exhibition room. Thus visitors themselves formed the final piece of the sound composition, creating an interactive soundscape.

1973年ドイツ生まれ。ザール美術大学修士課程、マインツ音楽大学修士課程修了。サウンド、ビデオ、彫刻、空間の領域を様々なレベルで組み合わせ、オーディオ・ビジュアル・インスタレーションを制作している。

Born in Germany in 1973. Graduated from master course in Academy of Fine Arts and Design Saar (HBK Saar) and School of Music, Johannes Gutenberg-University Mainz. Windl works on the edges of the media sound, video, sculpture, space and merges these various levels to complex audiovisual environment.



《リアルタイム・オペレーター》2016
real-time operator, 2016



若手のための現代音楽企画ゼミ

Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

音楽の企画力とは。言葉を用いて社会に発信する力を養うプログラム

「若手のための現代音楽企画ゼミ」は、現代音楽を扱う企画を発表する意欲のある若手アーティストを対象に、より多くの人に鑑賞してもらうための企画力や発信力の向上を目的とする育成プログラムです。受講生は、企画を実現するために必要な「音楽を伝える言葉」を自ら考え、識者の知見を得ながらワークショップとコンサートが連動した企画を考案。審査員やほかの受講生の前で行われた公開プレゼンテーションでは、楽器、作曲家、演奏家などに焦点をあてたもの、特殊奏法を補助する装置、会場の特性に着眼したものなど、多様な企画が発表されました。最終的に審査員から高い評価を得た1企画が選出され、成果発表の機会を得ました。

Cultivating abilities to disseminate music through language and exploring the significance of music-planning skills

Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists was an educational program whose objective was to improve the organizational and communicative ability of young artists who are motivated to present projects involving contemporary music, in order that such performances reach wider audiences. The participants considered words with the capacity to convey music that are essential to the realization of their projects, devising proposals for a workshop and concert while gaining the knowledge of experts. The presentations given by the participants to the other students and the jury were diverse, focusing respectively on the musical instruments, composers, musicians, devices for special performance techniques, or drawing attention to the character of the venue. To conclude the program, the proposal that received the highest praise from the jury was selected, and the winner was given an opportunity to make a workshop and concert.

2015.4.19(日)～12.19(土)

会場：東京芸術劇場 シンフォニースペース・ミーティングルーム、東京文化会館 小ホール

協力：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館、東京芸術劇場



審査会(公開プレゼンテーション)

2015.4.19(日)

会場：東京芸術劇場 シンフォニースペース

審査員：中川賢一(ピアニスト、指揮者)、沼野雄司(音楽学者、桐朋学園大学教授)、楠瀬寿賀子((公財)せたがや文化財団音楽事業部)、梶 奈生子(東京文化会館事業企画課長)



ブラッシュアップ講座

2015.7.29(水)、8.25(火)、9.21(月)、10.15(木)

会場：東京芸術劇場 ミーティングルーム

講師：楠瀬寿賀子、中川賢一



ワークショップ(成果発表)

2015.11.21(土)

会場：東京芸術劇場 シンフォニースペース

出演者：薬師寺典子



コンサート(成果発表)

生誕90周年 A.C. -After Cathy- 「声の逆襲」—声楽家キャシー・バーベリアンの革命—

2015.12.19(土)

会場：東京文化会館 小ホール

出演者：薬師寺典子(企画/ソプラノ)、渡辺秋香(ピアノ)、丹野恵美子(フルート、バス・フルート)、秋山幸生(テオルゴ)、久野幹史(バロック・ギター、テオルゴ)、Concerto Sotto l'Albero[中村康紀(テノール)、鈴木秀和(テノール)、目黒知史(バス)]、ワークショップ参加者

既存の「声楽」という概念を超越して声の可能性を追求した声楽家キャシー・バーベリアンの生誕90周年を記念した企画。バーベリアンの自作曲やレパートリー、声や言葉の持つ響きや表現力を引き出した作品、オノマトペが持つ表現に注目し、ワークショップ参加者と創作した作品などを披露しました。

The 90th anniversary of birth A.C. -After Cathy-

“The voice strikes back”

— The Revolution According to Cathy Berberian —

This event concert commemorated the 90th birthday of Cathy Berberian, a vocalist who has transcended the existing notion of “vocals” in pursuit of the possibilities for the human voice. Berberian's fascinating work was introduced, including pieces in which she sought the sonorous and expressive power of human vocal chords and words, and workshops that pushed the possibilities of expression through onomatopoeia.





第9回展覧会企画公募

The 9th Emerging Artists Support Program

新しい才能の発掘の場を目指し、「展覧会を公募する」プログラム

「展覧会企画公募」は展覧会を企画・開催する意欲をもった若手の支援・育成を目的とした公募プログラムです。選ばれた企画は、各審査員のアドバイスやトーキョーワンダーサイトの支援を受けながら、展覧会コンセプト、展示構成、イベント、予算など具体的な実施計画に磨きをかけ、最終的に展覧会として実現されます。今回は「なぜ、今ここで、その展覧会を行うのか」という問いに答えていると審査で認められた3企画が選ばれました。企画者は展示だけでなく、ゲストを招いたトーク・イベントや来場者との対話をとおして、企画開催の緊急性や批判性を訴えるなど、展覧会をさらに充実させるさまざまな試みを行いました。

An open-call program for exhibition ideas, aiming to discover new talent

The Emerging Artists Support Program is an open-call development program that aims to help ambitious young artists and curators organize exhibitions. The selected proposals are advised by the juries and assisted by Tokyo Wonder Site in honing the concrete planning for the concept, layout, events, and budget until finally the exhibitions can be realized. This year, three proposals were selected, all of those were considered to respond to our question; why this exhibition needs to realize in here and now. In addition to exhibiting artworks, the organizers also included a wide range of endeavors to enhance their exhibitions, such as exploring the urgency and criticality of organizing the show through talks and other related events with guests as well as dialogue with visitors.

2016.2.27(土)～3.27(日)

会場：トーキョーワンダーサイト本郷

審査員：遠藤水城(インディペンデント・キュレーター、HAPSエグゼクティブ・ディレクター)、

高嶺 格(現代美術家、秋田公立美術大学准教授、国立台北藝術大学客員教授)、

高山 明(演出家、Port B主宰)、黒田みのり(トーキョーワンダーサイト事業課長)

※HAPS＝東山アーティスト・プレースメント・サービス

企画者：門馬美喜、エ☆ミリー吉元、高川和也



オープニング・トークの様子

門馬美喜〈Route／59ヶ月〉

Miki MOMMA〈Route / 59 months〉

福島県相馬市にアトリエを構える門馬は、東日本大震災を機に再び絵筆をとり、寸断された鉄道以外のルートで、相馬―東京間を何十往復もしながら目にした風景を、数百枚に及ぶキャンバスに描き続けてきました。本展では、自身の視線だけでなく、震災の混乱の最中に生まれ、もうすぐ5歳になる知人の子供の視線も加え展示を構成。その景色ひとつひとつを描き出すことで、東京では実感できない福島沿岸部の現状を真に伝えようとしてしました。

Based out of an atelier in Soma City, Fukushima Prefecture, Miki Momma started painting again after the Great East Japan Earthquake. Her exhibits comprised art depicting the landscapes she saw while traveling multiple times between Tokyo and Soma using an alternate route to the railroad that was cut off by the disaster. Her work asks viewers to consider the present-day situation for the coastal region of Fukushima, from which people in distant Tokyo feel disconnected.



1981年福島県生まれ。2005年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域概念コース卒業。翌年中国へ留学し、中国美術学院書大法班(書道)、2007年中央美術学院中国画系山水班(水墨画)で学ぶ。水彩、油彩、写真、水墨画など多様な手法を用いて制作をする他、パフォーマンスも行う。

Born in Fukushima in 1981. Graduated with a BFA in Painting from Tokyo Zokei University in 2005.

エ☆ミリー吉元〈バロン吉元の脈脈脈〉

E☆mily YOSHIMOTO〈Baron Yoshimoto: Pulse! Pulse! Pulse!〉

エ☆ミリー吉元が、2014年に実父・バロン吉元の数百点にも及ぶ初見の作品を倉庫で見つけた時の衝撃が本企画のきっかけでした。漫画家であり、また、画家・龍まんじとしても活動し続けるバロン吉元が描き出す漫画と絵画をつなぐ“脈（パルス）”を、展覧会企画者の視点から見出しました。会期中には、バロン吉元による公開制作やゲストを招いたトーク・イベントも開催し、バロン吉元の魅力を最大限に引き出しました。

E☆mily YOSHIMOTO's plan for this exhibition started from the her shock at discovering hundreds of her father's artworks for the first time in a warehouse in 2014. Also known by the name Ryu Manji, Baron Yoshimoto is a manga artist and painter whose distinctive "pulse" that beats through all his works was revealed in this exhibition from the perspective of the organizer.



1993年東京都生まれ。2015年女子美術大学芸術学部美術学科洋画専攻卒業。2010年よりアート団体「愉鳴呼社」のメンバーとして国内外で作品を発表。近年は、「シブカル祭。2014」（渋谷バルコ、東京）、「TRANS ARTS TOKYO」（東京、2012、2013）、「六本木アートナイト2013」（東京）などに参加。

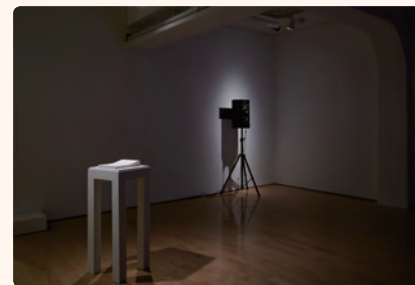
Born in Tokyo in 1993. Graduated with a BFA in Oil Painting from Joshibi University of Art and Design in 2015.

高川和也〈ASK THE SELF〉

Kazuya TAKAGAWA〈ASK THE SELF〉

高川は自身の行為が複数の自己に委ねられていることに気づき、その存在を確かめようと「自身に問う」や「自身を呼び起こす」という意味をもつ「ASK THE SELF」をテーマとしました。分身（オルターエゴ）をとおして、自己の「救い」が実現される可能性を問う試みを心理学的なアプローチから映像インスタレーションとして表現。自己を外在化し、真の自己を追求すると同時に、その存在が曖昧であることを私たちに提示しました。

Conscious that our actions are entrusted to multiple selves, Kazuya Takagawa expressed an attempt to question the possibility that salvation could be realized through the alter ego as a video installation created from a psychological approach.



1986年熊本県生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術学科修士課程修了。これまでに、ソウルなど国内外のレジデンスプログラムに参加。主な展覧会に「screen」（HIGURE 17-15cas、東京、2014）、「Kazuya Takagawa solo show」（3331 Arts Chiyoda、東京、2012）、「Reflection of an outsider on outsider」（Seoul Art space GEUMCHEON、ソウル、2011）、「BEDAH VIDEO & KOPI SORE」（S-14、インドネシア、2011）など。

Born in Kumamoto in 1986. Graduated with an MFA in Painting from Tokyo University of the Arts in 2012.

エ☆ミリー吉元 関連イベント

E☆mily YOSHIMOTO Events

パロン吉元による公開制作

2016.3.5(土)、20(日・祝)

トークイベント：パロンの解剖学会

2016.3.3(木)

出演：荒俣 宏(作家、博物学者)×パロン吉元

聞き手：エ☆ミリー吉元

2016.3.5(土)

出演：都築響一(編集者、写真家)×パロン吉元

聞き手：エ☆ミリー吉元

2016.3.13(日)

出演：山下裕二(美術評論家、明治学院大学教授)
×パロン吉元

聞き手：エ☆ミリー吉元

2016.3.20(日・祝)

出演：山田参助(漫画家)×パロン吉元

聞き手：エ☆ミリー吉元



高川和也 関連イベント

Kazuya TAKAGAWA Events

ダイアログ #1

2016.3.13(日)

出演：大澤真幸(社会学者)×高川和也

ダイアログ #2

2016.3.26(土)

出演：高川和也×高川和也



トーキョーワンダーサイト アニュアル 2015：レビュー Tokyo Wonder Site Annual Report 2015：Reviews

TWS-Emerging 2015 p.106

TWS-Emerging 2015

北出智恵子／野口玲一／小野寛子／

米田尚輝／椿 玲子／安田篤生(アーティスト・トーク ゲスト)

OS-XX p.117

～都市未来のオペレーション・システムへの序章～

OS-XX -Prelude to the operation systems of the future city

小淵祐介／田中功起(参加クリエイター)

クリエイター・イン・レジデンス・プログラム p.119

Creator-in-Residence Program

建畠 哲／小沢 剛／杉田 敦(レジデンス運営諮問委員)

トーキョー・エクスペリメンタル・ フェスティバル Vol.10 p.122

TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL

- Sound, Art & Performance Vol.10

一柳 慧／沼野雄司／畠中 実／毛利嘉孝(審査員)

若手のための現代音楽企画ゼミ p.126

Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

楠瀬寿賀子／中川 賢一(講師・企画講師)

第9回展覧会企画公募 p.128

The 9th Emerging Artists Support Program

遠藤水城／高嶺 格／高山 明(審査員)

TWS-Emerging 2015 第1期 文＝北出智恵子^{〔きたで・ちえこ／金沢21世紀美術館学芸員〕}

長田堅二郎「In between」

→ p.037

長田堅二郎は彫刻という表現行為を通して、事物の普遍性、存在の本質を模索している作家である。そして彫刻という出来事に常に付帯する構造やボリューム（質量）、対象とその関係性について考察を続けているようである。本展示では展示場所を意識した2作品《Floating Two Surface》と《between》を発表していた。いずれも糸を両壁面にピンと張り、その行為の反復により、かたちが浮かび上がるものである。一方は面を、もう一方は円筒を成す。

このかたちの在り方は、軽やかで無機質なもののように見えるだろう。長田自身、糸という素材を用いた理由として量感を削除することを意図し、糸同士の間隔を十数センチ程開けて配列することにより空間に解け込むあるいは消えいくようなイメージも持っていたようだ。しかし、作品は観るものの前に確かな存在として立ちはだかっていた。鑑賞者の目は線の繰り返しを示すかたち

を認識し、縫うという手業や触感を想起させる糸という存在、それらのかたちを成り立たせる位置、さらには照明とそれによりできる影をとらえるのである。線、関係性、さらに動的平衡という言葉が本人にしばしば用いられる彼の表現は、そのアウトライン＝線とその線を境にあちら側とこちら側をどのようにに現前させていくかという試みであろう。素材の多様さ、芸術行為の場の多様化とともに彫刻という表現領域が広がる一方、その境界自体が曖昧となっている。「在る」ということ、三次元の立体が認識されるということ、そうたらしめている物質と周囲の関係の考察が作品であるべきだ。今回の展示では、建築、つまり、展示場所への意識は強かったものの、作品が置かれることによる効果と役割、特に物質的な側面への意識とのバランスは疑問であり、今後の課題であろう。

大山紗智子「ない(ある)場所」

→ p.037

大山紗智子の絵画は、主題、モチーフ、手法、構図のいずれもが絵画という一面上に在りながら、分散して在るように感じた。彼女の近作では、自身の経験から、死と愛の両方を象徴するものとしてミリタリープラモデルを核としたものが主要のようだ。今展示では、いずれの絵画にもプラモデルの戦闘機が、レストラン、夜店、クラブ、銭湯、披露宴、リビング・スペース、バスルームのシーンといった彼女の記憶や経験した日常のシーンと並置されて描かれていた。幅が1メートル弱から大きいもので2メートル強となる絵画9点と別室にドローイング群で今回の展示は構成されていた。大山の言葉から、日常に潜む死や異世界、それに伴う恐怖を日常空間に顕在させ、滑稽視する試みが絵を制作のテーマであると理解した。淡々とした絵画である。この絵画の強みは何か。絵画は、いずれも、くすんだ淡いピンク、パープルの色調である。上述の日常の場面に、戦闘機が、とても大

きなもの、目の前に迫ってくるかの如く描かれている。一方、場面の中にいる人物の表情は描かれていない。いずれの場面にも、シャンデリア、提灯、ミラーボールなど、光を想起させるものが添えられる。感情を抑制し、死、恐怖、愛といった感情の錯綜状態、そのことによる不安を、光により照射し肯定し、日常に新たな眼差しを向けようとする。彼女が散りばめた記号、構造から読み取るとしたらこのようなことであろうか。大山の絵画には、アンバランスな要素が多くある。それが強みなのかもしれないが、そのことを補強するためにも、絵画という領域、手法、色など、描くということひとつひとつに在る事柄や要素と自身の対話を深めてほしい。

村上賀子「HOME works 2015」

→ p.037

3つの写真シリーズで構成された村上賀子の展示「HOME works 2015」。《HOME works “Modality”》(2015)は、宮城県の実家の室内を撮影したもの。何気なく置かれている家具や日用品は作家によるセッティングとのことだ。「Unity」と名付けられた3点の写真(2015)は、プリズムのような、光が交錯するような淡い色調の写真。これまで作家が住んでいた家からの庭の眺めを、作家曰く、自身と「結びつきの深い」カメラを場に応じて選択し、撮影した写真が幾重に重ねられ出来上がったイメージとのこと。《Authentic》(2014)は、村上が高校で使用していた学習帳で成形された折り紙を写したものの。折り紙の背景は自宅の壁紙や床で、補正、加工により意図的に細部が消され、前景と背景が均質化されている。記憶と経験について、意識と無意識、つまり、見えるものと見えていないものの両極を複合的に写真という手段と行為によりイメージに映し出そう

とする村上の試みは、その手法とプロセスのひとつひとつの意図に説得力があった。写真は現前する事象をとらえる記録媒体としての機能が突出している。そのため、記録されたイメージは客観的な事実として受け入れられがちである。アナログからデジタル化、さらに技術が更新されていく中、村上の写真の主観性を根底におく。本展覧会において発表された写真作品は、いずれにおいても、ものの物質性とカメラという装置、そして現像や加工というプロセスにより、不在のもの、見えないものの存在あるいは空気感を映し出そうとしていた。そして村上にとって身近な存在である住環境、生きてきた経験やその記憶を素材とし、歴史という命題（への問い）を意識して制作している。単なるプライベート・フォトに収まらないよう、今後の制作方向性をしっかり見据えて活動してほしい。

第2期 文＝野口玲^{〔のぐち・れいいち／三菱一号館美術館学芸グループ長〕}

謝花翔陽「Magical Heteronomy」

→ p.038

1階の中央では回転する人体像、その周囲にはバイクやペイントを施した日用品等が並ぶ。灯りの明滅や扇風機の風、動画なども含みダイナミックだ。2階では中央に、黒いテーブルの上に端正に並ぶ品々。周囲にはギターやペインティング、塑像など階下に比べると静かな展示となっている。取り上げられたオブジェは殆ど日用品であり、そこに施された彩色や加工もラフで精緻というのではない。キツチュと言っても良い。しかし作家によると、そのオブジェが採用された意味、置かれた位置、与えられた色彩などには根拠があるのだという。そう言いながら引き合いに出したのは、フランスの神秘主義思想家エリファス・レヴィ(Eli-phas Levi, 1810-75)による『高等魔術の教理と祭儀』だった。それらは黒魔術、錬金術、カバラ、陰陽道といった神秘思想に基づいて配列、配色されているのだと。彼は制作のプロセスにおいて、作家による自律的

な決定を信じない。作家自身のインスピレーションによって対象、構図や色彩を決定するのではなく、魔術や宗教を援用してそこに意味を与えている。その手法を彼は「魔術的他律性(Magical Heteronomy)」と呼ぶ。これは芸術家の主体の否定である。しかし考えてみれば、このような制作の方法は、美術が宗教から自律する中世以前であれば当たり前だった。彼はこれによって、近代的な芸術家像を相対化しようと試みている。興味深かったのは、このような制作を通して語ろうとしているのは「愛」だと作家が述べたことだった。中世であればそれは神への愛に通じただろう。神無き世にあって、制作のインセンティブとしての愛と他律性、それがどれ程の豊かさを産み出す事が出来るのか、事の成否はそこにかかっていると思う。

大崎土夢「さいしんみどうとさんしん」

→ p.038

三方の壁にペインティングが並ぶ。残る一方の壁には一本の赤い線が引かれ、そこに沿って水平に紙のドローイングが貼られている。その右下にはペインティングの前に神棚のようなインスタレーション。彼のペインティングは異なるモードの描法を混在させているが、正面性やシンメトリーが強調され、端正なコンポジションにより、どこことなく祭壇のような宗教的な印象がある。作家自身は平野のような広がりを出したいと語っていた。一方でドローイングは同じイメージをモードを替えて描いたり、紙を貼り合わせたり、より実験的である。これらのドローイングはペインティングの前段となる準備的な素描ではなく、さらに下描きがあり、それ自体完成作として描かれているという。彼にとってペインティングとドローイングに主従関係があるのでなく、それぞれにしか出来ないことを探究するメディアなのだ。ドローイングは意識的に描き、ペインティングは前意識的に

描かれるという。

また彼は上手くなることを拒否したいと、同じように描くことには興味がないとも語っていた。自分が変わっていくことに関心があるのだ。だから別の表現方法に対しても貪欲なのだろう。もうひとつの会場では、実際に赴いた土地からの触覚的な知覚を表現するため、刺繍の作品を展示している。トークの最後には、どこかノスタルジックなイメージと過剰さを散りばめた自身の詩の朗読を披露してくれた。メディアがどれ程多岐に涉っても、どれほど多くの実験を繰り返しても、観る側はそこに大崎土夢らしさを読み取ろうとする。それをどこまで欺き続けることができるだろうか。それは困難な遁走に違いないが、見極めてみたい気がする。

笹本明日香「かけらと浮かぶ」

→ p.038

壁にはペインティングの間に、カラフルな発泡スチロールの立体が散りばめられている。床にモニターが一台、断片的な動画を流す。正面に見える文字「わたしだけが異星人」というのは、作家が構想したアニメのタイトルだという。人間関係における疎外感から抱かれた被害妄想にまつわる作品で、実際の製作には至らなかったが、実現した際のタイトルロゴとして用意したものだという。文字はその一点のみで、他は爆発によって生じた瓦礫が飛び散り、浮遊している様をアニメのタッチで描いたもの。立体はその瓦礫が形象化したもののようなのだ。ザクザクとした削り跡が露わで、中には平仮名の一部のような形もある。ペインティングと立体が繋がって空間を形作る。作家によると、この空間は自らの頭の中を再現したものなのだという。自己嫌悪や後悔、執着といった負の感情こそ自分がここにいる根拠であって、そのことを受け容れるために、呈示したパーツのひ

とつひとつにその感情を託し、自分の精神空間として作品を提示したのだと。床の映像は何を意味するのだろうか。ラジオをチューニングしている際に、受信しようとせずに思いがけず入ってくるノイズ的な放送のようなものだという。「図らずも受け取ったものがリアルになる」のだと。壁に囲まれた空間が脳内を意味するなら、外からランダムに受け取る情報を投影するモニターは外界を示すのだろう。正直に言えば、この作家の資料を事前に見たとき、アニメ好きのフェティシズムか、妄想の産物に付き合わされるのかと思っていた。しかし壁の展示と床の映像をトータルに観たとき、その予断は裏切られた。この作家は壁の内面と床の外界と、両者を扱うことでバランスをとっている。それらをどのように共存させるのか、それが作品の今後のあり方を左右することになるのだと思う。

第3期 文=中野仁詞[なかの・ひとし/キュレーター、神奈川芸術文化財団]

阿部友美「records」

→ p.039

阿部友美の作品から現代における人と人の関係はどのように読み取れるのか、と考えた。ロシアの思想家、ミハエール・バフチン（1895-1975年）は、ドフトエフスキーの小説などをもとに、ポリフォニー（多声）論、ダイアログ（対話）論、モノログ（独白）を展開した。本展の阿部の作品では、常に一人の人物がその画面に登場する。《far》は、草原の彼方を傍観する少年を背景から描いている。《table land》には、雪景色と暗い森を背景に何かことを終えて帰路に着くような寂しげに力なく歩く男が描かれている。バフチンは、小説の中でも一人しか登場しない状況をもってしても対話は生まれていると論じる。私としての個は、他者の存在なしに語れない。他者と自分の対比関係、お互いを反映しあうことによってわれわれは、具体的な個を見出す。この他者は、必ずしも人でなくともよい。絵画という、四角く切り取られたキャンバスに独自の世界を思い描き構築する表現

の中で、阿部は自画像ではなくモデルの使うことによって、まず他者と会話をする。そして、そのモデルは、絵画の中において彼を取り囲む草原や降り積もった雪という他者（自然）と向き合い語りあう。《flight》や《a reat》に登場する青年は、消失した背景にある日常空間であるがゆえにより対話をする相手を求めている様が強調されている。これら、阿部友美の世界には、日本画という画材の使用方法などに反映される決まった規律の世界への疑問とそこからの逃避、そして新たな世界を見つけ出しそこに実現の場を見出したいという強い願望をも読み取ることができる。

須藤美沙「フォールスカラー」

→ p.039

NASA（アメリカ航空宇宙局）が開発し現在も宇宙空間を浮遊しながら観測を続けるハッブル宇宙望遠鏡。須藤美沙は、この望遠鏡が撮影した鮮明な宇宙の写真が切欠となり、宇宙をテーマに作品を制作する。撮影された宇宙の写真は、実は研究者の手により着色されることによって見えにくい部分が事実より、鮮明に描き出されているようだ。須藤は、この加工を知ることによって「目に見える世界だけが唯一の真実ではない」と認識する。宇宙開発という、世界の科学技術の粋を結集する最先端の研究においても、画像に着色をするというアナログな手法が用いられていることはとても興味深い。《Hubble Telescope》は、須藤が宇宙に関わる事物のなかで最も関心を寄せる望遠鏡を鉛筆で描いたものだ。漆黒の宇宙に見立てた黒い壁面に掛けられたこの絵画は、超高速で宇宙の軌道を移動している望遠鏡が、あたかもゆったりと定点に浮かんでいるような印象をあたえる。黒

白、2枚のケント紙に穴をあけ天の川銀河の星群を描く《Milky Way Galaxy》。展示室では、照明の光が穴を貫通し漏れて出していることで立体的な宇宙様相が空間に浮かび上がっている。これまで多くの研究がなされるも、未だ夥しい不確定、不鮮明、そして不思議が潜む宇宙。われわれは、空を見上げ天空へのロマンを思い描く。展示室に広がる須藤の宇宙を体感することをもって、われわれの宇宙はより身近になり、より大きなロマンとして広がっていく。

菅 雄嗣「Enter the 2.5D -No paint noform-」

→ p.039

自らの思想を表そうとする時、建築家は図面をもとに建築物として、作曲家は譜面を書き楽器のソロ、または集合体の演奏でそれを実現する。菅雄嗣は、画家である。ゆえに、まずはキャンバスという平面が自らの思想の実現の場といえる。彼とのトークの際に、筆者は、彼の表現を劇場に例えた。菅は、まず「塗り絵」というあるフォーマットで区画された平面上の域に、様々な着色をすることで世界を構築する。劇場がもつ機構の巧みな活用によって、舞台上では、時に赤毛のアンの家庭にある、穏やかで慎まじやかな「居間」が出来上がり、時に、R. ワーグナーの楽劇《神々の黄昏》に観る、天上界で繰り広げられる荘厳な神々の世界が創られる。展覧会のタイトル「2.5D」は、2次元と3次元の間にある、「半立体」という概念ではなく、奥行きにある現実感から導かれる3次元とアニメ、漫画などのモニター上にある2次元の狭にある世界に自らの作品を位置付けること、と

第4期 文=小野寛子 [おの・ひろこ／練馬区立美術館学芸員]

江藤佑一「漂流シマ」

→ p.040

江藤佑一の作品には、彫刻が内在している。江藤の主たる作品は映像であるが、彫刻科出身の彼が映像制作に到る動機は、彫るという行為から得られるという。「彫ることで培ってきた彫刻的感覚」が、人間や物の物質的な存在に対する疑問と関心と呼び起こした。今回の出品作品のひとつ、《Moving Park》では公園にいた自分が公園の土と共にTWS渋谷に移動することで、移動した時点においてもまだ公園に存在するという。実際に自らの足がその土地と結びついている限りそこに存在していると断定するならば、移動した時点でTWS渋谷に在るとするのか、また公園の土の上に立っている限りは移動をしてもまだ公園に在るとするのか。つまりは、存在することに対する不確かさと事実の狭間で、江藤は存在することそのものについて考えているのだろう。しかし、本来、存在に対する疑問はもっと複雑であるべきだ。実際に、人がそこにいるというだけ

作家は語る。菅は、作品に取り入れる対象を型取りフレーム化されることにより一旦イメージを解放する。大恐慌時代の実在の銀行強盗、ボニーとクライドの半生描いた映画「俺たちに明日はない」に登場するこの男女の姿を型取り3パターンの異なる着色をした《Couple》。解放されたイメージに、青を基本にその濃さのバランスを微妙にずらす、赤・青・グリーンの関係を巧緻に関係させる、黒とオレンジを背景に紫と青を対比させる、など菅の巧みな色のバランスにより2人の人物の存在は、全く異なる相となる。そこで、菅は、われわれに、イメージの曖昧さをも問いかけるのだ。展示空間の3つの壁に1点ずつ掛けられた作品。部屋をステージに見立てるならば菅は、その中心に立ち3重唱を歌い上げる3人の歌手を的確に導く、指揮者なのかもしれない。

で、本質的に存在することになるのか。映像作品の制作における動機を彫刻からもらったとして、次なるステップへと思考を進めて欲しいと思う。江藤が彫刻を通して得た「気づき」は、新しい映像作品を生み出す可能性を秘めている。作品制作において新しい表現方法を求めるのは困難であっても、自らの思考を深めることは独自性を追求することに直結するはずである。

豊田奈緒「MISS SCOROPUS」

→ p.040

豊田奈緒は、物語を描く。過去には北欧神話などよりインスピレーションを得ていたようだが、現在の彼女にとって物語とはテキストのあるものではなく、視覚的に気に入ったモチーフを組み合わせて作り上げる世界である。モチーフは、映画や舞台など様々なものから集められる。《Build creature》においても、映画から得たインスピレーションを脚というひとつのモチーフで表現している。豊田自身がインスピレーションを得たものから、モチーフは選ばれるのだ。カラーージュするかのようにモチーフとモチーフが重なり合い、形を作り上げていく。色彩においても同様で、カンヴァスの白を意識しつつ、色彩の重なりによって独自の色を導き出そうとする。彼女の作品は、選ばれたモチーフと色彩の重なり、白、余白に対する意識が組み合わせることで、ひとつの世界を築いている。豊田のもつ世界観は一貫していて、強靱である。外部のものに影響されたり、刺激を

受けたりすることはあっても、根本的に自らの抱くイメージの世界を覆すことはないだろう。そのイメージ世界が決壊することのないよう、より広い視野で様々な物を見て欲しいと思う。彼女の制作活動において、自身のイメージ世界ほど重要なものではなく、それは描く動機とも直結している。他者の目など気になるはずもないが、頑固なまでの物語世界を貫いてもらいたい。

石川里美「錯覚の生」

→ p.040

石川里美の問題意識は、あまりにも明確である。都市における植物や自然と人工物の関係などを常に意識し、自然を通して社会における人間の有り方を問いたいと言う。今回の「錯覚の生」では、植物に輸血がなされる設定で作品が組まれている。擬人化された植物に、赤い水溶液が血液に見立てられることで「生かされている生命」を表現している。それをあくまでも主体的に生きていると錯覚する我々人間のイメージと重ねることで、大都市の中で、この植物のように我々は生かされているのだとメッセージを送る。石川の創作のベースになっているのは草月流の生け花で、その技量に裏打ちされた作品はきちんとした形になっていて完成度が高い。視覚的にも印象的であるし、わかりやすいメッセージというのは芸術分野に留まらず、彼女に広く活躍の場を与えることになるだろう。しかし、やはり気になるのが、石川の制作の原動

力となっている問題意識の厚みである。都市における人間の生や都市と自然との関係などという問題は、これまで様々な分野で繰り返し取り上げられてきた。このようなテーマから展開する問題意識は、作品にわかりやすいメッセージを付与するが、同時に堅固な考察に裏付けられていないと表面的で薄っぺらな印象を与えかねない。社会、自然、都市、人工、人間、生命について問題意識を持つのであれば、それらをより深く考察する必要がある。技術があり、そこに思考が伴えば、問題意識をもった作品はますます力強いものになるはずである。

第5期 文＝米田尚輝^[よねだ・なおき／国立新美術館研究員]

大人倫菜「ドローイングルーム」

→ p.041

《Drawing Room》と題された大人倫菜のインスタレーションは、主としてファウンド・オブジェクトによって構成され、一階と二階のフロアを跨いで展示された。Drawing Room、すなわちそこは応接間でありドローイングを行う部屋でもある。そこは客人（＝鑑賞者）を迎え入れるための歓待と、主人（＝作家）がドローイングを行う創造とを兼ね備えた場である。インスタレーションの構造は、大人の言葉に従えば、一階が作家本人の「外面」として、そして二階の部分は「内面」として設計されている。確かに、建物の一階の展示室の入り口に掛けられた小ぶりのサイズの風景画は、あたかも玄関口に飾られる家を想起させる。また、室内と室外の境界に存在する物質である洗濯物が、一階（＝外面）と二階（＝内面）を繋ぐ階段に設置されていることは、作品の構想をよく体現しているだろう。他方、文学的テキストの断片、あるいは大人が訪れた場所のドローイングによる壁面

のカラーズは、大人の「世界地図」を構築している。これらイメージが想起する地図は、文字通りの地理的（＝現実的）な地図を指し示すこともあれば、作家の内面の地図を描く（＝Drawing）こともある。総じて、作品の構想はうまく体現されていたように思うが、イメージにせよリアリティにせよこれら二つの概念はきわめて多義的で深淵なもので、さらなる追求が可能であろう。

木浦奈津子「過ぎゆく景色」

→ p.041

鹿児島を基盤に活動する木浦奈津子を選択する風景は、きわめて日常的で平凡なものだ。自ら撮影した写真に基づいて描かれた絵画群は、風景の細部を緻密に描写するのではなく、風景の瞬間を切断したかのような画面に仕上げられている。写真を基に絵を描くという営みは決して珍しいものではないが、木浦は写真におけるスナップショットに近い仕方を絵画において探求しているようだ。何ら特別な要素を含まない凡庸な風景は、写真から絵画へ翻訳されるに際して、絵具のマチエールと色彩の自律化によって新たな相貌を示して立ち現れる。木浦自身が言うように、絵具の物質性と色彩体系の解放という点において、彼女の絵画は19世紀フランスの印象派の画家たちを想起させるかもしれない。しかし印象派とは異なって、画面には自然の力動感や生命力というよりも、静寂な雰囲気や醸し出している。これは、人物形象が色で塗りつぶされていることや、風景描写の遠近

法を破壊するような仕方で色面が平坦に塗られていることに起因する。こうすることで、目の風景（＝写真に切り取られたイメージ）を精緻に描き上げるというよりも、イメージを圧縮（＝抽象）することに成功している。こうした圧縮の方法は、ジョルジョ・モランディやリチャード・ディーペンコーンの営みと通底するかもしれない。こうした先例の作品群を分析することで、同じ方法で描いて行くにせよ、結果として作品にさらなる幅がでてくるのではないかと思う。

野島良太「絵くんと絵さんが絵しても絵はできない」

→ p.041

野島良太の絵画には、しばしば人物形象が現れる。写実的な人物形象をラディカルに歪曲して抽象化が進められるのではなく、むしろそれらは絵画にあらかじめ与えられた要素であるかのようだ。野島は「男と女」というクラシックなモチーフを採用しているが、アンリ・マチスやパブロ・ピカソがしばしば取り上げた同様のモチーフにおいて現れる、見る者と見られる者、描く者と描かれる者といった、二項的権力構造は見いだされない。《男と女》は主として二色の色面で構成されており、画面にはしばしば二つの黒い点が置かれている。今回の展示ではそれらを複数同時に見せるという方法が採用されているが、空間の使用法としてではなく、この方法が「複数性」を暗示していることのほうが興味深い。野島の抽象的カンヴァスにしばしば置かれる二つ黒い点は、観者に避けがたく顔貌性を想起させるものだ。このシリーズに顕著に見いだされるように、顔の表象と

いう点においてはピカソが取り組んだ問題、すなわち顔として認識しないことの不可能性という問題を野島も引き継いでいる。非＝形象化の不可能性とともいうべきこの課題それ自体はきわめて興味深いもので、意識的であれ無意識的であれ画家には引き受け続けて欲しい。この問題機制は、何らかのエッセンスを引き出す（＝抽象）という抽象絵画における本源的な営みを問い直す際にいまなお有効なものとしてあり続けているだろう。

第6期 文＝椿 玲子^[つばき・れいこ／森美術館アソシエイト・キュレーター]

渡邊拓也「作った(られた)ものから考える。」

→ p.042

《道具と作ることのインスタレーション -case1-》では、渡邊の回りのありとあらゆる道具が土器のような赤茶けた陶土で再現され、考古学的遺物のように並んでいる。人間が作るものは土偶も含めて全て道具であることは、同時に日本的なアニミズムにも繋がるだろう。同時に、近未来には、現代の道具類も遺物として博物館に収蔵され得るかもしれないことを想起させる。《ノベルティ（防護服）》では、1930年代から瀬戸でアメリカへの輸出目的のためにマイセン人形を模して製造されていたセット・ノベルティの歴史と、アメリカとの関係の中で建てられた54基もの原子力発電所の存在が重ねられている。防護服の大変精巧にできたノベルティ・ドール達は、不釣り合いに装飾された台上で危うい均衡を保ち、私たちに警鐘を鳴らすようだ。《グレーシリーズ「事故現場 画像」》では、テレビやネット上の様々な交通事故現場の模型がグ

レーの粘土と潰れた空き缶によって再現されている。事故というイメージは、物質的なオブジェに変換され、かつ実際に圧力を掛けられて凹んだ空き缶という現実と重なり合い、様々なレベルの現実を提示する。このように、渡邊拓也の作品には、人間の表現手法の中でも古くから存在する「陶」というメディアへの問い掛けが伺えるが、同時にその問い掛けが文化人類学的、社会学的な視点を持つことで、現代社会への問い掛けとなる。すでに社会に疑問を呈するやり方を確立しつつある故に、今後は「陶」にこだわらずに表現の幅を広げて良いのではないか。

北村拓之「Desire/Fixation」

→ p.042

北村拓之の木炭画では、裸の人間から不思議な生物までが、時には部分のみで描き出されている。制作は北村にとって自らのアイデンティティを探索し、それを形として残す作業として行われているという。

作家のアイデンティティとの格闘を感じさせるのは、自らの顔型を石膏で取っている《Desire》、仮面を被った《Breath》、仮面を抱えた《見る男》、横顔を見せる《地に対する》、顔を布で隠した人間が光と向かい合う《丘の上》などであろう。顔が巨大な手鏡と化したような《面影》は、人の存在が記憶とリンクすることを暗示する。

一見して人間ではないものの、その筋肉や肉の質感によって身体性や生命をより強く表現しているのは、肉の塊のような《置き土産》、角の生えた頭を振りつつ不均衡な四肢を持つ怪物《四本の足で踏みとどまる人体》、空洞を孕んだ肉塊の《寂しい筋肉》、三本指のある掌が擬人化された《トルソ》

やぶくぶくと太った胴体と二本脚からなる《抱擁》である。目と拳と舌、すなわち視覚、触覚、味覚が擬人化された《Eye Fist Tongue》は、「私」が現実を捉えるために必要な最小限の感覚を象徴する。

あくまでも「自分」から出発した作品群でありながら、荒唐無稽でありつつ独特の因果関係を示すストーリーは、神話的な要素も感じさせるのが印象的である。ただし、「自分」をよりよく把握するためにも、現代社会において表現する意味について、もう少し考えてみてよいのではないかと感じた。

黒河 希「畳からの眺め」

→ p.042

黒河希の絵画の特徴は、何が描かれているのか題名を観ても判然としない、その構図と色彩の奔放さであろう。それは、作家自身が実際に観たイメージや記憶の中に立ちあがらるイメージという「現実（リアリティ）」を出発点に、それらをより「リアル」に表現するために形を選び、色を重ね、「もう一つのリアリティ」と呼べるものを作り出すことに因る。油彩を選んだ理由として、半透明で滑りのある皮膚に近い素材が、リアリティを表現するのに最適だと感じたからだという。

例えば、《洗濯》では、黄緑色の屋根のようにも見える洗濯物の下に不思議に長い身体を持つ人物が腰を折り曲げて地面に手を付いている。《ウェイトレス》は面白いポーズをする友人をモデルに描いたそうだが、デフォルメされて首が折れたような緑色の人物は宇宙人にしか見えないシュールさを醸し出している。また《個室》、《滑り台》、《左右に架かる橋》などは、油彩の皮膚としての物質感

のみが現実であるほどに、抽象化されている。「畳からの眺め」というタイトルには、日本社会の日常から世界を眺める視点が伺える。黒河が、敬愛する海老原喜之助、小出檜重といった20世紀初頭の画家が戸惑いながらも西洋油彩画の手法を取り入れて行ったことに共感を覚えるのであれば、現代のグローバルな現代美術界における絵画の手法についてもっと学び、考えてみてよいのではないだろうかと感じた。

第7期 文＝安田篤生^[やすだ・あつお／原美術館副館長、学芸統括]

朴 ジヘ「Freezing love」

→ p.043

吹き抜け二層の展示空間を埋め尽くすインスタレーション。それは鑑賞者の進入を拒むのかと思えるほどである（作品のよしあしとは別に、もう少し鑑賞者が入りやすいようにすべきだと思う）。「Freezing Love」と題されたインスタレーションは、朴ジヘ自身の言葉では「冷蔵庫のイメージ」と言うことだが、家庭用のそれではなく、精肉工場のそれであろう。階下では、単管で組んだフレームとともに、たくさんの人型が吊り下げられ、あるいは置かれている。しかも頭部はなく、中にはトルソ（胴体のみ）もある。女性型もあれば男性型もある。まさに精肉工場を思わせる光景。グロテスクさが感じられないのは、人型が空気で膨らませるタイプで無機質な質感だからだろうか。その中に、空調ダクトのような銀色のチューブがランダムに這い回り、デュシャンを想起させる自転車の車輪や、ディスク（CD）があちこちに配置される。チューブは連続あるいは循環しているの

か、チューブの後ろを辿るように螺旋階段で階上に行くと、カラフルなテントが隠れ家のように置かれ、その中でついに人型の頭部と遭遇する。「Love」なのだから愛の単なのかと思えば、その頭部には刃物のようにディスクが何枚も突き刺さっている。ディスクには何が書き込まれているのだろうか。書き込まれているとすれば、この人型の記憶であろうか。あるいは何も書き込まれていないのだろうか。《生と死》《記憶》《欲望》——様々な言葉が鑑賞者の頭をよぎる。そこにありながらその内容を見られないディスクのように、どこかもどかしさがつきまとう一方で、題名の「Freezing」とはうらはらに、混沌の中に熱量を感じる作品である。

福本健一郎「夢の中へ」

→ p.043

美術館スケールの2点の巨大な絵画。それは熱帯雨林の風景なのか、色彩豊かで象徴性と比喩性に富み、同時に、風景と言うよりも舞台装置を思わせる、いわばレイヤーが重なったような絵画空間である。あわせて配置されるのは、対照的に小さな絵（しばしば粗いジュート布に描かれる）の数々と、素朴な（と敢えて言う）木彫や陶芸の小品がこれも多数。福本健一郎は「景色」というキーワードを挙げているが、与えられた決して広くはない展示スペースを埋める大小様々な作品が作り出す《景色》には、どこか心地よさが漂う。それは、アーティストが表現行為としての《造形》の根本に向き合っているからだろうか。絵画から出発しながら《門外》の陶芸にも手を伸ばし、画材・素材と触れることを通して——まさに素材を《メディア＝媒介》として自分と他者・個と世界の間を確認しようとしている。21世紀になった今、絵画はどのようにでも描くことができるし、彫刻はどの

ようにでも作ることができる。だからこそ、自分の《造形》を手に入れることは難しい。福本健一郎は、4年前のシンガポール留学と東南アジア体験がその意味で大きいと語るが、単にトロピカルなモチーフと色彩を選ぶというのではない。むしろ今回の新作絵画には日本的な《かたち》の参照さえうかがえる。おそらく、《美術》《工芸》《民芸》《装飾》の様々な《造形》の中から自分の《かたち》《イメージ》を見つけようとしているのだろう——事実、小品の中には花瓶といった《用の形》もある。この次はどのような《景色》が創り出されるのか、興味を引かれるところである。

大岩雄典

「わたしはこれらを展示できてうれしいし、あなたはこれらを見てうれしく、これらは展示されてうれしい」
→ p.43

長い饒舌な題名の印象とはやや違い、大岩雄典のインスタレーションは様々な小さな断片で構成され、朴ジへのインスタレーションとは好対照である。構成要素は雑多である。水槽と電球。英語で書かれた注意の標識。ビデオをループするモニター。扇風機。ゴディバの包み紙、等々。ひとつひとつを確認していくうちに、壁や床の随所に貼られた黄色いマスキングテープの断片に気づく。職業柄、それは作品の設置位置を決めるための目印のテープだと理解するのだが（演劇などでは「バミ」と言うのだろうか）、普通なら作品の展示が終わったら剥がしてしまうものである。もちろん、意図的にテープは残されている。ここでは《展示》の空間が、作者と鑑賞者による《演劇＝Play＝遊戯》の空間として意図されているのだろうか。実際のところ、インスタレーションの構成要素のひとつとして、壁にプリントされた短い《戯曲》が貼られている。その中で寸劇を演じるキャラク

ターは、展示されているモノたちである。モノたちが人間のように会話することも面白いが、ユーモアに富んでいて一気に読んでしまう。あるいはアーティストが事前に提出した展示計画資料では《犯行現場》という表現もあったのだが、これはひとつの探偵小説的な《ゲーム》の場でもあるのだろうか。鑑賞者は、インスタレーションの多様なピース＝証拠から犯行＝作者の物語を再構成するように仕向けられているのだろうか。このインスタレーションが探偵小説的（？）に優れているかという点、ピースのひとつである《戯曲》の面白さに比べれば、いささかもどかしいものはある。次の《舞台》（あるいは犯行現場？）に期待したい。

 **OS-XX** ～都市未来のオペレーション・システムへの序章～ → p.052

サイバネティック・アーバンイズム

文＝小淵祐介〔おふち・ゆうすけ／東京大学准教授〕

2015年の「OS-XX」展では、東京大学建築学専攻Advanced Design Studies (T_ADS) 小淵研究室で5年間にわたって行った研究課題「サイバネティック・アーバンイズム Cybernetic Urbanism」で作成した15のプロジェクトを紹介しました。サイバネティック・アーバンイズムの主な目的は、「都市」における「建築」「ゴミ」「資源」のあり方と可能性について考えることです。通常のリサイクルの目的は、「ゴミ」を効果的に「資源」に戻し再利用することですが、私たちの研究では、「ゴミ」と「資源」を単に循環させるのではなく、その二極端の間にたくさんの「消費／生産」の関係性を作り出すことを目標にしました。これまでの「スクラップ&ビルド」によって建築が最終的に都市のゴミ、または単なる資源になるのではなく、都市を流通する素材の循環の一部として、素材が変換され続けるネットワークをデザインすることを目指しました。

展示した15のプロジェクトは生活の中で消費されるモノの頻度を軸にして、「日」、「月」、「年」の3つのカテゴリーに構成しました。「日」のプロジェクトの素材はリサイクル割り箸、使用済みコーヒー、下水、「月」の素材は汚染された土壌、美容室で集められた髪の毛、段ボール、「年」の素材は竹、汚染された川、海に漏れた原油でした。各プロジェクトの素材の新しい使い方をポスターにまとめ、論文、模型そしてビデオとともに紹介しました。この展示の目標は、都市が生み出す「素材」と私たちのライフスタイルをどのようにネットワークするかを考

えることであり、「素材」が変換され、循環し続けるデザインの可能性を紹介することでした。私たちT_ADSでは、建築のデザインを単体の箱でなく、都市のエコシステムである素材循環の一環と考えることによって、持続性のある都市システムのアイデアを議論していきたいと思っています。

別の社会のために

文＝田中功起 [たなか・こおき／アーティスト]

もしこの社会がクリエイティブであらねばならないという要請のもとに隔々まで管理されたとしたらどうなるだろうか。ぼくたちの日常は消費の欲望に満ちている。目にするこの世界はどこまで行っても洗練されたデザインに覆われ、ぼくたちは常にそのデザインされたものに見合った何かを購入し身につけ行動するようにその欲望さえも方向付けられている。この社会では、ひとはまず消費者として生まれる。

新しい社会の仕組みが考えられはじめている。消費者としてのぼくたちは、2020年の東京オリンピックに向けて、さらにもうひとつの役割を与えられようとしている。ぼくたちが担うべき役割はクリエイター（創造者もしくはアーティスト＝芸術家）であるということ。東京都による「東京文化ビジョン」概要版によればぼくたちは消費者であると同時に「芸術家（創造者）」として存在するように求められている。「東京は、一人ひとりが芸術家であり鑑賞者＝消費者でもあるという歴史を持っている。」（「東京文化ビジョン」概要版より。またその節には、明治期以降の華道や茶道を行う人口の増加、市民の創作活動が活発であること、アニメや漫画が庶民の生活から生まれたものであることが、その理由として上げられているが、それは理由になるだろうか）。ぼくたちは鑑賞し（消費し）、作る。作り、鑑賞（消費）する。確かにぼくたちの社会は、無数のアノニマスな創作活動とその消費に満ちている。インターネットが無名の創作活動を可視化したように。そこにはもちろん理想主義的な響きがある。すべての人びと

がクリエイティブで、アーティストであるような社会。

しかし消費者と鑑賞者と芸術家を同じ位置に置く、この世界観は少しおかしい。創造性のカニバリズム。自己完結的な創作活動。ここで目指されている世界観には、批評の原理が消されている。創造者、芸術家のもっとも過酷な部分のひとつは、批評にさらされるということである。賞賛されることに比してより多くの場合、むしろ作品はあら探しをされ、批判され、否定されるだろう。作られたものが、作った人びとによって消費されるとすれば、そこに批評の入り込む余地はない。そうやってできあがったものがいくら増えていったとしても、そもそもクリエイティビティとは無縁の、自己完結した「ビジョン」しか提示しないだろう。ウロボロスの蛇のように、自らを自らで食べ尽くすような社会。他者の批評／意見を排除し、自閉した世界。批評され、解体され、それでも再び作られるような、そんな厳しいプロセスは、オリンピックに向けたこの日本においてもはや必要ないのだろうか。

🌀 クリエーター・イン・レジデンス・プログラム → p.057

スリリングなノマドたち

文＝建畠 哲 [たてはた・あきら／詩人、美術評論家、多摩美術大学学長、埼玉県立近代美術館館長]

日本における美術館制度のひな型がまがりなりにも1950年代に整えられたのに対し、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）の方は40年程も遅れて登場してきた。私も企画に関わった多摩地区の「TAMAらいふ21」（1993年）は東京における嚆矢となる試みのはずだったが、恒常的な施設であったにもかかわらず存続することはできなかった。1年後にスタートした茨城県のアーカスタジオがきちんとした活動を維持していることと比較するなら、専門的な関心とスキルをもったスタッフが常駐することが絶対条件であるに違いない。

その点でいえば21世紀になってスタートしたトーキョーワンダーサイトは、規模的にも活動内容においても、きわめて充実しているという。それもAIRの標準的なありかたではなく、むしろかなりユニークなバイタリティーにあふれた施設なのである。都心にスペースを持ち企画力に富んだイベントを開催し続けていることもあるが、なによりも評価されるべきなのはスタッフの方々が海外各地のAIRとの緊密な情報網を構築し、幾つもの二国間プロジェクト、つまり受け入ればかりではなく派遣をも含めたアーティストの相互交流事業を展開していることであろう。

ここ2年、私は海外への派遣と受け入れのアーティストの選定に携わってきた。若手のアーティストの注目度は高いが、それは登竜門として注目されていることに加えて、この春にトーキョーワンダーサイト本郷で開催されたベルリンやマドリッドから帰還

したアーティストによる「リターン・トゥ」展（キュンチョメ、地主麻衣子、谷中祐輔、花崎 草）のように海外での成果を紹介する機会が設けられていることもある。2016年度、派遣アーティストに選ばれたのは8人で、たとえば山田健二は新潟の豪雪地帯で法外な大きさの「雪室宿」や、別府の進駐軍が残した古代遺跡のような地下道を調査した「別府地熱学消化器美術館」など不思議なプロジェクトを実現してきたが、今回はロンドンの元刑務所の地下道を探索するという。ノマド的というそのスタンスは、まさにAIRの申し子というべきであろう。大和田俊はベルリンで「フズリナ石灰化石岩」なるものを素材にした音のインスタレーションを企画している。おびただしい量の太古の生物の化石を床に配し、そこに薬剤を垂らし二酸化炭素が発生する化学反応で、2億5千年前の音を聞かせるというプロジェクトである。今回も、こうしたスリリングな挑戦をするアーティストたちを見い出せたことを喜ぶたい。

レジデンスでの体験

文＝小沢 剛[おざわ・つよし／美術家、東京藝術大学准教授]

私は2013年の8～9月にトーキョーワンダーサイトのレジデンスプログラムでロンドン芸術大学に滞在し、制作をした。過去の経験から考えるとアーティスト・イン・レジデンス（以下、AIR）は比較的若い作家を対象にしている印象だ。すでに若くもなく作家としてのキャリアを重ねてしまった自分としては、いささか気が引けなくもなかった。しかし、私には2つの明確な目的があった。一つは美術学校内のレジデンスが興味深かったこと。もう一つは日本から遠く離れたヨーロッパで制作する必要があったからだ。

2012年から大学の教員となったこともあり、多くの有名作家を生み出した海外の美術大学のシステムや環境をじっくり体験してみたいと思った。特に、学校の構造だが、町との融合を図る開放的な広場を中心に設計されつつも、安全な環境に大変配慮できたセキュリティシステムだった。ちょうど卒業展の時期だったので、学生の作品を見るだけでなく、その運営のシステムを教授らから聞くことが出来た。

一方、今回の滞在制作内容はペインティングと写真撮影で、エルフリーデ・イエリネクというオーストリアの作家の戯曲『光のない。』を元に制作するものだった。家からもほとんど出ることのない彼女が福島震災をテーマに描き上げたものだ。私は今回の作品のために切実なほどに日本と距離を置いて作品を作る必要があった。震災からわずか2年後の心の落ち着かないあの頃には、自分が制作するためにはとても必要なことだったと思っていた。程よい大きさの

アトリエを与えられ、連日孤独と向かい合いながら制作に集中できた。必要な物は事務局に頼る必要もなく、画材屋で手に入るし、レジデンスの施設やスタジオの不具合があれば設備の担当者が迅速に解決してくれ、ストレスの溜まることもなかった。卒業展のツアーに参加し、担当教官による作品解説を他のゲストと共に聞いた。それは僕と同様海外から一時滞在の作家やキュレーターや、批評家や企業の人達だった。教員が自分の言葉で責任をもって直接言葉で語りかける態度は、まさに学校という場と社会をつなぐ役割をしている。

また、レジデンス作家のミッションとして講義室でトークをした。その後、数人にスタジオに来てもらい、作品解説をして、意見交換をした。帰国が迫った頃、一人ぐらいはロンドンのアート関係者にスタジオ訪問してもらおうと思い、旧知のキュレーターに声をかけてみた。なんと今は学校の隣の美術館、テート・ブリテンにいたことがわかった。

こうして長くもない滞在を終えた。自分に果たした目標はおおむね達成でき、満足の行く結果となった。なかなか思うように時間やりくりが出来ない自分には、この非日常のような日常を送れるシステムは大変重要と思っている。現在世界中たいへん多くの国に様々なAIRがある。日本の作家たちは意欲的に参加し、アートを介しての交流をして文化の交換をしてみたいと思う。それはどんな政治家にも商人にも出来ないことだからだ。

どちらのものでもなく、どちらのものでもある

文＝杉田 敦[すぎた・あつし／美術評論家、女子美術大学教授]

複雑な想いに囚われている。レジデンスの審査に関わるようになってから、どうにも解消できない想いを抱いている。もちろん、これまでもレジデンスのプログラムに関連する発表や報告に接する機会はあったし、レジデンスの機会を得た知り合いのアーティストから、終了後に意見を聞くこともあった。しかしそのとき、特別な違和感を抱くということはほとんどなかったと記憶している。ただ、いまになって思い返してみると、そうした折に、レジデンスの実施地に対して、そこでなくてはというある種の必然性や、そこならではの固有性を、そもそもそう強く期待することがなく、ある種の方便としてそうした体をなしていたとしても、実態としてそのような意識に基づくものと出合うこともまたほとんどなかった。レジデンスを終えたアーティストが、心情を漏らすような場合、必然性や固有性について言及するようなことがあればむしろ特殊なことだった。もちろんそこでの経験が、得難いものとして、彼女や彼のその後に大きく影響することがあったとしても、それは滞在中の生活による場合が多く、かの地での芸術表現の実践過程における相互作用が何かをもたらすということはきわめて稀なことだ。しかし一方、審査においては、そのいわばほとんど顕現することのない作用への意識を強く求めることになる。この埋めようのない隔たりは、一体どこからくるものなのだろうか。アーティストたちの声を正直な心情の吐露だと考えれば、当然、審査する側の期待は分が悪い。硬直した、紋切り型の、表面を取り繕ったものだと感じられるのは仕方のないことだ。けれども

一方、審査する側の一方的な期待も、ある意味ではきわめて常識的なものに過ぎず、むしろそれをはなから放棄するようなアーティストの姿勢に、欺瞞や怠惰を認めることも難しいことではない。しかしおそらくこれは、どちらか一方を矯正するべきだというような解決に収束させてはならない問題なのだ。選考する側は社会資本の提供に対して一種の責任を求め、一方アーティストは、制度化に抗うために既存の基準を裏切り続ける。レジデンスプログラムは、実施する側のものでもなければ、それを利用する側のものでもない。それが両者のものであり続けることに健全さを見るならば、この隔たりと、そしてそれがもたらす複雑な想いに向き合うことこそ、レジデンスが秘める本来の意味があるのかもしれないのだ。

TEF トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル Vol.10 → p.087

「実験的な場」の創造へ期待すること

→ 柳 慧 [いちやなぎ・とし／作曲家、ピアニスト]

「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル (TEF)」は2006年度に始まり、私は翌年度の第2回から審査員を務めている。TEFは当初、若い音楽家たちが現代音楽を発表する場であったが、やがて「実験的な場の創出」を掲げ、あらゆるサウンドを扱う表現全般に門戸を広げるようになった。それまで日本にはなかった価値ある事業だと言える。

かつて私が経験した1950年代のアメリカ、また1960年代の日本でも、音楽や美術といった分野を超えた、多様な実験が試みられていた。それは現在の若手アーティスト、そこに集う観客を含め、半世紀前とは当然異なる。それらを比較してみると一言では表せないが、当時のアーティストはハングリー精神や夢にあふれ、勇気をもって先の社会を見据えた実験的な挑戦を行っていた。またそうした公演に足を運ぶ観客は参加意識が高く、公演後に意見を述べたり、出演者と議論したりする活発さがあった。戦時の苛酷な精神的抑圧から開放され、自由や理想への渴望が強かったからであろう。

対して現在の社会では、文化芸術を取り巻く状況が大きく変化し科学技術の進歩や情報ネットワークの向上に、芸術は拮抗する立場を確立するよりも、むしろ追いつめられてきている。さらにアーティストや事業の運営側をはじめ、社会全体としての自由度や許容度が低くなっていると感じることがある。社会の組織化が一層強まるなか、個人の行動範囲も、より制約を受けているのではないだろうか。アーティスト個々人にはそれらを打ち破っていくだけの内在的

な力を持つこと、何かに寄りかかるのではなく、社会と相互浸透するような表現と批判精神を期待している。そういった意味でも、TEFの審査をするなかで興味を惹かれたのは、洗練された表現技術の卓越性よりも、内在する哲学的、思考的な部分であり、その具体的な行動だった筈である。

これまでトーキョーワンダーサイト (TWS) はどの事業もさまざまな分野に開かれた、自由な環境を提供してきたと思う。多分野の専門家によるトーク・イベントなどの取り組みは、ぜひ続けていくべきだろう。また、かつてTEFはレジデンス事業や「インターナショナル・アンサンブル・モデルン&トーキョーワンダーサイト アカデミー」など他の音楽事業とも連携していた。国内外のアーティストが交流したり、海外からの参加者がイベントに集まるような状況は半世紀前には見られなかった点であり、このような状況がTWSならではの良い環境をつくり出してきた。これからも、アーティストに刺激や影響を与えるような事業が展開し続けることを期待している。(構成＝佐藤恵美)

コンセプトは「いいもの」か「わるもの」か? ——TEFの10年間——

文＝沼野雄司 [ぬまの・ゆうじ／音楽学者、桐朋学園大学教授]

この10年間、トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル (TEF) を審査員という立場から見てきたわけだが、このフェスティバルはまさにトーキョーワンダーサイト (TWS) の理念である「若手育成」「国際交流」「実験支援」をそのまま凝縮したような感があった。開始当初はこちらも応募者も手探り状態で、現代音楽の演奏会、音響インスタレーション、あるいは身体を張ったパフォーマンス等が、かなりデジタルに分離してしまった覚えがある。しかし、回を重ねるにつれて、これらは徐々に接近・融合してTEFでしか触れることのできない作品が産みだされたように思う。また、これに比例するようにしてヨーロッパ、アジア、南北アメリカを含む幅広い国から応募が来るようになった。全く異なったバックグラウンドを持つ人々のプロポーザルを英語で読み、スカイプで面接するのは難儀だったが、優秀なTWSスタッフが助けてくれたおかげで、毎回新鮮な感覚で審査に臨むことができた。日本において、これくらい開かれたコンペティションはほとんどないはずで、この点でもTEFはその実績を誇ってよいはずだ。

一方、音楽学者、音楽批評家としては忸怩たる思いもあった。というのも、音楽に関わる日本のアーティストの言葉が、少なからぬ確率で貧しいように感じられたからだ。「音楽」寄りになればなるほど、その傾向は強かったように思う。もちろんセールスマンのようにプレゼンが見事だったり、科学者のように論理的でなければいけないわけ

ではない。しかしコンセプトが語れないのでは審査はできない。どうも音楽界においては、コンセプト、というマーケティングあるいは外付けの「思いつき」のように捉えられがちな気がする。実際、「コンセプトばかりでは仕方ない」「コンセプトではなく音が大事」みたいなことをあちこちで聞いたりするし、そもそも言葉で音楽を説明すること自体が不純だと思われるふしさもある。しかしそれは間違っている。実験的であろうとすれば、先進的であろうとすれば、独創的であろうとすれば、自分の営みを客観的に眺めて、この世界の中に位置づける必要がある。単なる意志ではなく、感情でもなく、情性でもなく冷静に自分を定位すること。それこそがコンセプトに他ならない。そして幸か不幸か、おそらく、それは言葉の力を借りないとできないことなのだ。このことに気づいてから、審査に際しても応募者の言葉に格別の注意を払ってきたつもりだが、まだまだこの点では悔いが残る。今後も、音楽界に身を置く一人として、コンセプトと言葉の必要性をさらに訴えていかなければならない。

新しい表現のための試行としての実験

文＝**畠中 実**〔はたなか・みのる／NTT インターコミュニケーション・センター〔ICC〕主任学芸員〕

もともと現代音楽を対象にした公募企画として実施されていた「音楽企画公募」（当時の企画名）が、これまでの現代音楽を対象とした公演だけではなく、即興音楽、民族音楽、電子音楽、ノイズ、サウンド・アートといった隣接するジャンルへも、その対象領域を拡張することになったということ。審査員の話をしていただきました。私は第3回からの参加になります。この公募企画については第1回から知っていて、でも現代美術の施設という印象があったトーキョーワンダーサイトで現代音楽の企画をやっていたということで印象に残っていました。その入選公演のラインナップを見て感じたことは、企画者たちの応募するいくつかの意欲的な企画は、取り上げる作品を現代音楽という枠の中に収めてしまうことの物足りなさ、現代音楽というジャンル自体を閉じたものとしてしまうことへのリアクションのようなものに思えたということでした。現代音楽は、その手法をひとつの理念のように研ぎすませ構築してきた表現である一方、芸術にとどまらない同時代の出来事から影響を受けて多様に変化・解体してきた表現でもあります。第4回目以降の「EXPERIMENTAL SOUND, ART & PERFORMANCE FESTIVAL」という命名は、そうしたことから必然的に、音楽やその周辺の音を扱った表現を出発点とした同時代の実験的な表現を並列的に対象とすることを表していました。それによって、まだ名付けられていないような、あるジャンルに分類できないがゆえに発表する機会のなかったような音楽や、コンサートホールのような場所を飛び出してきたような現代音楽を出

自とする音楽家たち、音や映像を駆使した美術を出自とするパフォーマンスなどへと、応募者の傾向は劇的に変化したように思います。第8回目以降は、サウンド・インスタレーション部門を新設、これまでを引き継ぎつつ、パフォーマンス部門には演劇やダンス、メディア・アートなどの多様なジャンルから応募されるようになりました。

このように、フレームを逸脱してしまう、ゆえに居場所のない、あるいは、新しい表現のための試行としての実験を、国内だけではなく国外も対象に支援してきたことは、この企画の独自性だと言えます。その上で、応募作品のヴァリエーションの増加に伴う応募者同士の横断的なシーン形成や、入選公演以降の機会の提供など、活動のサポートへとどうつなげるかといったことはまだ可能性としては残されているように思います。そして、企画名に冠された「実験」という言葉が、ずっとこの企画の大きな指標となっていたと思います。それは、オルタナティブであることでもあり、この道以外の可能性を選択できる方法をつねに持っていられるかということだと思います。それは、これからもっと重要なことになっていくような気がしています。

まだ見ぬ新しい芸術の「かたち」のために

文＝**毛利嘉孝**〔もうり・よしとか／社会学者、東京藝術大学准教授〕

たとえば「音楽」というカテゴリーは、それほど自明のものではない。現在私たちが知っている音楽の形式、たとえばコンサートやライブ、CDやデータなどの音源などは、私たちの属している時代の社会的、経済的、技術的条件の制限の下で歴史的に形成されてきたものだ。21世紀に入り、政治経済、社会、そしてメディアテクノロジーが劇的に変化する中で、音楽もまた大きく変容している。これは、「音楽」だけではない。「芸術」と呼ばれた営為すべてが今大きく再編成されているのだ。

トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル（以下、TEF）の意義は、何よりもその変化をなんとかして捉えようという試みだったことだろう。それは、しばしば自明とされていた「音楽」や「芸術」という枠組みを再検討し、時に解体し、新しい芸術の「かたち」を生み出そうとしたプロジェクトだったのだ。TEFの公募企画の審査員として興味深かったのは、公募作品の多様性であり、領域横断性である。その中には、音楽ともインスタレーションとも演劇ともパフォーマンスともつかない混然とした企画が多く含まれていたが、このメディウム（媒体）の領域横断性は何よりも21世紀の芸術の一つの特徴である。TEFは、依然としてメディウムによって分断されがちな芸術の領域において、現在の芸術の分類ではどのジャンルにも属さないかもしれないが、未来の芸術においては主流となるかもしれない新しい形式を生み出そうとしていた貴重な実験だった。

とりわけ、パフォーマンス部門において「音楽」を単なる作曲や演奏など狭い意味に閉じ込めず、広い意味での時間芸術として位置づけ直した一方で、インスタレーション部門において「音楽」の領域に積極的に空間的な実践を導入しようとしたことは高く評価すべきだろう。

まだ形をとっていない未来の芸術を作り出しているアーティストにとって、TEFは日本国内だけではなく国際的なネットワークのハブだった。特に優秀作品に選ばれた作家が、その翌年さらにそのプロジェクトを進化させ、作品を発表するという仕組みは、審査員としてはプロジェクトの継続性と浸透を実感させる幸運な体験だった。10年間の間に蓄積されたアーティスト、演奏家、パフォーマーたちの作品とそのネットワークは、トーキョーワンダーサイトはもちろん、東京という都市の貴重な財産である。この財産を元手としながら、これから新しい芸術の「かたち」が生成することを期待している。

♪ 若手のための現代音楽企画ゼミ → p.098

他者への想像力が現代音楽をおもしろくする

文＝楠瀬寿賀子 [くすのせ・すがこ／公益財団法人せたがや文化財団音楽事業部]

「若手のための現代音楽企画ゼミ」の話を聞いてたいへん関心をもった。なぜなら、現代音楽を含むクラシック音楽をより深く聴き味わうためには、ワークショップなどによって音楽そのものを解きほぐしていくことが、聴き手にとってとても有効な手段だと、これまでの自身の経験をとおして考えるからだ。とくに現代音楽においては、その体験を経ることによって、単なる分析に留まらぬ、より「自由に」味わうための感覚が磨かれると実感している。

これは聴き手だけの効果ではない。演奏家が作品を分析し、その魅力がどこにあるのかを、感覚的にだけでなく、言語化していくことは、演奏自体の説得力を増していく。

とはいえ、そう簡単ではない。今回、受講者の企画書を拝見してまず思ったのは、行なってみたいことはあっても、実際に行なっている状態を具体的に想像できていないということだった。たしかに、経験がなければそれらに意識がいかないのもしかないが、再提出された企画書ではより実際に意識して改善されたものが増えたことから、受け手への想像力の重要性が理解されたことがわかる。どのような人が体験し、どのような発見をして意識が変化していくのか、などを想像しながら企画を考えていくことを大いに楽しむ。これは演奏家自らのワークショップ体験と言ってもよいかもしれない。

練り直された企画書をもとに行われた企画プレゼンテーションでは、せっかくの企画内容を効果的に魅力的に表現できていない

受講者がけっこう多かったことも惜しまれた。しかし、プレゼンテーションも頭の中で考えたことを表現していくという意味では、ワークショップを行うこととまったく同じであり、それほどむずかしいことなのだということが実感できたと思う。お互いの企画書やプレゼンテーションを見合ったことも大いに参考になったと思うし、今後もぜひ、ほかの演奏家や音楽以外のジャンルのワークショップに関心をもってほしい。選考によってワークショップとコンサートを実施した企画、薬師寺典子の『「声の逆襲」—声楽家キャシー・バーベリアンの革命—』は、そういった中で抜きん出て可能性を感じさせるコンセプトと実効性をもったものであった。ワークショップの4回のブラッシュアップでは、回を追うごとに要素が整理され、密度の濃いものになり、より体験者側への想像力が深まり、実施への自信も高まって、その成長ぶりは期待以上であった。

また、今回は「現代音楽企画ゼミ」ではあるが、これからの若手演奏家には、ひとつ現代音楽の探求ばかりに向かうことなく、現代に至るまでのさまざまな音楽についても知見を深めながら、今回の経験も踏まえて自身の極める道を見つけてくださるよう願っている。

なぜ今現代音楽企画ゼミが必要なのか

文＝中川賢一 [なかがわ・けんいち／ピアニスト、指揮者]

私の活動の中で現代音楽の演奏も大きな部分を占めますが、常々どのようにしたら沢山の方に素晴らしい曲を聴いていただけるかを考えておりました。「現代音楽」の中でも特に20世紀半ばから後に作曲された作品は、なかなか一般に広まるのが難しいと言わざるをえません。

その中で特に後世に伝えたい曲を、現代音楽を聴く機会がない方々にどのようにお伝えすれば良いかを考えるのは、少なくとも現代音楽が好きで演奏している私にとって深く考えなくてはならない内容だと認識しておりました。

ベートーベンやワーグナー、マーラーなどの現在これぞクラシック音楽と言われている作曲家も、その時代では発想が先を行った過激なものであったので、当時の聴衆には受け入れてもらえなかったものがありました。それにも関わらず、その時代の少ないながらも忍耐強く演奏家が度々演奏することによって、後世に残って参りました。

さて、では現代の音楽も同様に忍耐強く演奏を続けていくだけで良いのかと言うと、そういうわけでもない、私は感じています。また、現代音楽を聴くには、各々の作曲家の音楽的な言語を一から学ばなくてはならず、相当の時間と忍耐力が必要になると思われませんが、言語と音楽では、多少事情が違ふと私は思います。例えば、言語では「赤」と言ってしまうとかなり意味が特定されてしまっていますが、音楽はある程度の秩序に基づいた空気の振動の集合体ではあるけれども、その意味をそれなりに特定化、意味化させるのは聴衆各々にかかなり委ねられ

ているのだと思うからです。鳥のさえずり、そよぐ風の音を心地よいと言う人がいたら、それが音楽かどうかは別として、耳がその中に心地よさを感じとったということではないでしょうか？ その様な事を様々な手段を使って沢山の方にご紹介していく、これがまさに今の現代音楽を演奏する人に必要となってくる能力ではないかと、私の活動の中で思うに至りました。

若い音楽家が、今という時代を深く見つめ、今作られている、ないし我々に近い時代の作曲家の曲と深く語り合い、その言語を沢山の方に理解してもらえる様に咀嚼し、提示する、それがどれ位大変かという事も今回のゼミで少しは気づいて頂けたのではないのでしょうか。

現在行っている、ないし行おうとしている現代音楽の企画が、ただ演奏したいから演奏するのではなく、それがどの様な意味を持って何を聴衆に伝えたいことなのか、言語化して他人に理解してもらわなくてはならない事が、非常にスキルを要することであり、また企画を受け入れてもらうためのプレゼンテーションの仕方如何で、その内容も全く正反対に受け取られる可能性もある事を気づけたのなら、今回のゼミに関わらせて頂いた私としては本望です。若いからこそフレキシブルな発想で素晴らしいアイデアを持った現代音楽の企画が今回のゼミをきっかけに沢山出てくることをとても楽しみにしております。

📖 第9回展覧会企画公募 → p.100

高川和也「ASK THE SELF」講評 → p.103
「自分探し」ではなく「自己を問う」こと

文＝遠藤水城[えんとう・みづき／インディペンデント・キュレーター、HAPSエグゼクティブ・ディレクター]

「自分探し」という言葉の中には、いつも不毛な響きが含まれている。自分の本性や特性の理解を通じて、最適の「自己実現」に至ることを目的としているそれは、実際のところ効率的に「社会」と「自分」に折り合いをつけるための経済行動でしかない。それは、この社会を所与の前提とした上で、自分の利益を最大化するような心性に支えられている。しかし、社会は変わりうるし、変えうる。それに伴って自己は変わりうるし、変えうる。そして社会と自己の間には不断の闘争と和解が続いていく。高川和也の「ASK THE SELF」では、自己の拡散、転移、飽和状態が示されている。自己の外殻が崩壊し、多くの孔が穿たれ、そこに他者が侵入してくる。自己ならざるものの言葉が溢れ、その言葉が自己を満たしていく。自己が外へ流れ出していく。この状況を積極的に引き受ける

こと。ツイッターのようなソーシャルメディアは、自己の物語を強化し、結果的には「ソーシャル」の中に「自分」を受益者として位置付けていく。現行の情報環境において「自分探し」は微分化されている。一見するとあまりにも使い古された「自己」というテーマを持っているながら、高川の作品が現代性を有していると感じられるのは、この情報環境への鋭い批判性が作品に備わっているからである。私が発する言葉は、私のものではない。私を誰よりも理解しているのは、私ではない。私は私にだけ属しているのではない。この認識を前提とした時に現れるのは、新しい自己像ではない。それはもはや新しい社会像である。

門馬美喜「Route / 59ヶ月」講評 → p.101
目撃した者の責任

文＝高嶺格[たかみね・たけす／現代美術家、秋田公立美術大学准教授、國立台北藝術大学客員教授]

以前パレスチナのガザに行ったときに、人々に取り囲まれ生活の困窮を訴えられるという経験をしたことがある。お前が美術家だろうがなんだろうが構わない、とにかくこの現状を世界に伝えてくれと。それほどこの場所は世界から無視されているのだと。作品「Route/59ヶ月」とガザの経験は私にとって同じである。ガザを訪れた時には「ガザを訪れた者の責任」という言葉を持ったし、「Route/59ヶ月」を目撃した時にも見た者の責任について思った。「Route/59ヶ月」は、鑑賞に覚悟を必要とする作品なのだ。ただの風景画？という最初の印象はくつがえされ、「告発」の風景であることを知らされるのは時間の問題だ。犯され、見捨てられた土地。さらに新たな開発の対象として爪を立てられる土地。破壊された故郷をじっと見据

え、対話を続ける作者の眼差し。穏やかな筆致に込められた告発の意図は、明らかな意思を持って南へ、首都へと向かっている。作品がそういうモノとして機能することを、この風景画はあらためて思い出させてくれる。作者は油彩という時間のかかるメディアをあえて選び、それは見事に成功している。作者が風景に對峙した時間を観客が追体験する時、その膨大な時間が胸に突き刺さるように感じるのである。

エ☆ミリー吉元「バロン吉元の脈脈脈」講評 → p.102
トーキョーワンダーサイト本郷で体験した外

文＝高山明[たかやま・あきら／演出家、Port B主宰]

エ☆ミリー吉元が企画した「バロン吉元の脈脈脈」では、父親であり漫画家／画家であるバロン吉元氏の巨大な絵がところ狭しと並べられていた。氏が考案した体操の映像が小さくプロジェクションされ、漫画本も展示されていた。エ☆ミリーがこの企画をやろうと思ったきっかけは、倉庫で大量の絵を発見したことだそうで、これを何としても展覧せねばと決意したという。その時のエ☆ミリーの思いを、そして絵との出会いを、私は会場で追体験することになった。倉庫に眠っていた絵と時間が、トーキョーワンダーサイト（TWS）本郷の2階に持ち込まれたのだ。一般に美術と呼ばれるものからはみ出しているような外部が、美術を成立させるための展示スペースに体当たりしている。あまり美術館では見かけられないような鑑賞者や、お祝いの花や、オープニングでなされたバロン氏のスピーチも

よく機能して、展示全体が持つパフォーマンス的な性質をさらに強くしていた。それで思い出すのが2014年度の「第8回 展覧会企画公募」で見た田中沙季・三上亮の企画「Find Default and Rename It - 幻談 -」（TWS本郷、2015）で、あの展示にはここで触れない訳にはいかない面白さがあった。二人は会場に入れ子状の部屋を作った。その部屋には二重に外部があり、一つは部屋の外（同じ空間内に作られた廊下と隣室）、もう一つはかつてそこにいたのに今はそこにいない人や声。現実と幻の境界をずらし、揺さぶるような時空間を実現し、外部を来場者に体験させたことを高く評価したい。今後も、意欲的な若手企画者の展覧会を期待している。

キュレーションの擁護に向けて

文＝遠藤水城[えんとう・みずき／インディペンデント・キュレーター、HAPSエグゼクティブ・キュレーター]

今回の応募で問題なのは、やはりと言うべきか、普通の「展覧会」の企画を作家が自分で提示するという体裁のものが大半を占めていたことである。もちろん、作家は展覧会をやりたい。作品を見て欲しい。自分の作品が見られるべき展示空間への意識も高い。従ってそれらのプランには濃みがない。ある意味、シンプルである。

しかし、そのシンプルさは、この企画公募のフレームを前提としたものである。つまり、予算、期間、空間が決まっている。トーキョーワンダーサイト本郷という公共機関が持つ特性も、なぜかある限界を伴って理解されている。これらの前提あつてのシンプルさである。

このシンプルさは、結果的に「まあまあ」の展覧会に収斂してしまうし、さらに言えば、この「まあまあ」は容易に「なあなあ」に転化する。企画の中に、数万人の集客が見込めちゃう展覧会はなかった。展示の派生的効果によってかなりの収益が見込めそうな企画もなかった。展覧会場が壊れてしまいそうなものもなかった。美術の範囲を超えて、学術的に大きな貢献をしてしまいそうなものもなかった。政治の領域に大きな影響を与えるメッセージを持ったものもなかった。実はすでに終わっているものや、始められているものはなかった。全体として、公募要項に展覧会を適合させるかたちで展示プランが作成されており、作家たちが萎縮しているように感じられてしまったが、その萎縮は「前提」の設定ミスによるものだと思う。

作家たちの自選以外で着目したのは、キュ

レーションの技術分析が導入されているプランである。パフォーマンスやディスカッションなどイベント性・時間性が導入されているもの、カタログやキャプションがコンセプトチュアルに設計されているもの、など。もっと言えば、照明、壁や台座、導線、監視員の振る舞い、広報のコントロールなど、キュレーションの技術を細かく分析すれば展覧会の形を従来とは一風異なるものにすることはできる。しかし、僕個人はこの方向性に先はないと思っている。今の段階で必要なのは制度批判の精緻化ではなくて、もっと大きな「問題」を芸術制度に接合させることができるかどうかだと思うからだ。

今回選考された作家たちは、上記二つの問題を回避しており、そこにある種の風通しの良さが感じられる。外部性との交通があること。「問題」と「制度」の新しい組み合わせであること。こういったことが自然に示されている。望むらくは、企画者である以上そこに意識を集中してほしい。

この「企画公募」というフレームはまだまだ先に行ける。今回審査をして強くそう感じる事ができた。広く、深い反省性を有し、実践と実現への高い意識を持ち、世界的な問題に対して適切な技術をもってアプローチする。そういった企画をするインディペンデント・キュレーター（この際、肩書きはどうでもいいのだが）が、いま、必要だ。トーキョーワンダーサイトのような公的機関は、そういった企画こそ積極的に採用できるだろう。この公募の枠組みが、日本の「キュレーション・ヒストリー」の大きな部分となることを強く期待してやまない。

TWS-Emerging 2015 Part.1 Text: Chieko KITADE (Curator, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa)

Kenjiro NAGATA [In between]

→ p.037

Kenjiro Nagata is an artist who explores the universality of things and the essence of existence through sculpture as a means of expression. It seems that he is continuously examining the aspects of structure and volume that are always incidental to the event of sculpting, as well as the object and his relationship with it. The two works he presented at this exhibition – “Floating Two Surface” and “between” – were both made in consideration of the venue. Both works gradually took on shape through a repetitive process in which the artist put up threads between two opposing walls by pinning them to the walls one by one. In the one case, the threads formed a flat surface, in the other, a cylinder.

These shapes may look/sound like light, inorganic structures. Nagata himself explains his reason for using threads with his intention to create works devoid of volume, and the idea that keeping spaces of just over 10 centimeters between the threads would make the works blend into their environment, or disappear altogether. However, the works were towering with a doubtless presence in front of those who came to look at them. The visitors' eyes could recog-

nize the shapes rendered by the repeated straight lines; the presence and positions of threads as materials that bring to mind the manual work and feel of sewing; and in addition, the lighting, along with the shadows it produced.

In his works, which he often uses such terms as lines, relationships, and dynamic equilibrium, Nagata is perhaps experimenting with ways of utilizing such lines and outlines as borderlines to separate “this side” from “that side.” While the field of sculpture as a genre of artistic expression keeps expanding with the growing variety of materials and the diversification of the creative process itself, its boundaries are becoming increasingly obscure. The very consideration of matter and the relationship with the environment that make a work one that “exists,” one that is perceived as a three-dimensional object, is what is supposed to be the actual work. Although this exhibition was realized with a strong awareness of architecture, or more precisely, of the exhibition venue, the artist's awareness especially in material terms of the function and effect achieved by installing the works seemed somewhat off-balance, which is something that Nagata will have to work on in the future.

Sachico OYAMA [There are no memories]

→ p.037

In each of Sachico Oyama's paintings, the aspects of subject, motif, technique and composition all exist together within a single frame, but appeared to me to be scattered apart. Based on her own experience, Oyama's recent works are revolving around a core of military type plastic models as personifications of both love and death. Shown at this exhibition were paintings in each of which plastic fighter plane models are depicted alongside scenes at restaurants, night stalls, clubs, public baths, banquets, living spaces, bathrooms and other settings of everyday life, drawn from the artist's own memory or experience. In addition to these nine paintings ranging from just under 1 meter to over 2 meters in width, several drawings were on display in a separate exhibition space.

From Oyama's comments I understood that the central idea behind her works is an attempt to place aspects of death and the otherworldly that lurk in the everyday, together with the sense of fear they evoke, into settings of daily life in comical ways. Her paintings are matter-of-fact affairs. So what exactly is their

forte? All of Oyama's paintings are kept in subdued shades of pale pink and purple. Within the above-mentioned everyday life situations, fighter planes – and very big ones at that – are painted in a manner as if attacking the viewer directly, while human figures are depicted without facial expressions. Appearing in all of these scenes are chandeliers, lanterns, mirror balls or other objects that conjure images of light. Guessing from their compositions and interspersed symbols, these paintings seem to represent the artist's fresh approach to daily life using light to affirm and irradiate the state of insecurity of constrained emotions and complicated affections caused by death, fear and love. Oyama's paintings are full of imbalanced elements. This may actually be one of their strong points, and in order to reinforce this, I would recommend the artist to intensify her dialogue with the realm of painting, its techniques and colors, and the matters and factors behind every single act of drawing.

Iwauko MURAKAMI [HOME works 2015]

→ p.037

The “HOME works 2015” exhibition of works by Iwauko Murakami combined three series of photographs. The pictures in “HOME works ‘Modality’” (2015) were taken inside the artist’s family home in Miyagi, whereas the seemingly casually placed furniture and commodities are in fact parts of settings arranged by the artist. The three items titled “Unity” (2015) are softly colored photographs in which rays of light intersect like in a prism. According to the artist, these are images made by overlapping several photographs of gardens seen from the houses she has previously lived in, shot using cameras with a “close relation to [herself]” chosen according to the situation. For “Authentic” (2014), Murakami photographed *origami* made from the sheets of her old high school notebook. The objects are set off against the wall-papers and floors of her home, but foreground and background were eventually homogenized by deliberately removing details in a subsequent revision process. Murakami’s attempts to capture in compound images such polar opposites as conscious and unconscious, visible and invisible in terms of memory and experience

through the act and means of photography, were executed in persuasive ways regarding the artist’s intentions behind her respective methods and processes.

The function of photography as a medium for recording real occurrences is most prominent, which is why recorded images tend to be understood as reflecting objective facts. Against the backdrop of technology evolving from analogue to digital and further, Murakami builds her work upon the subjective quality of photography as an underlying element. In each of the items presented in this exhibition, she aims to highlight the presence and atmosphere of absent and invisible things through the materiality of objects, the mechanism of the camera, and the processes of developing and processing. The works were made in consideration of (and questioning) the proposition of history, using the artist’s living environment, previous life experience and memories as familiar elements. I hope that Murakami will keep the direction of her work firmly in mind, so that her photographs never end up being merely private snaps.

Part.2 Text: Reiichi NOGUCHI (Chief Curator, Mitsubishi Ichigokan Museum, Tokyo)

Shoyo JAHANA [Magical Heteronomy]

→ p.038

Displayed in the center of the ground floor space was a rotating human-shaped body, and around it, a motorbike and various painted commodities. Together with blinking lights, wind from fans, and videos, it was quite a dynamic affair. Set up in the middle of the 1st floor space was a black table, on which a variety of objects were arranged neatly. With things like guitars, paintings and figures placed around the table, it was a much more quiet scenery compared to that downstairs.

Objects used were mostly articles of daily use, the coloration and other processing of which was rough and anything but sophisticated. It would be fair to sum it up flatly as kitsch. However, the artist claims that there are reasonable grounds for the use, positioning and coloration of those objects, and cites as such the “Transcendental Magic, its Doctrine and Ritual” by French occultist Eliphas Levi (1810-75). According to his explanation, the objects were arranged and colored according to the mystical ideas of black magic, alchemy, cabala and yin-yang philoso-

phy.

In his creative process, Jahana does not believe in such things as autonomous determination. Accordingly, it is not inspiration that makes him determine materials, colors and compositions, but the meanings of his works stem from the elements of magic and religion they incorporate. This method Jahana calls “Magical Heteronomy”. It is a method that negates the artist’s independence. However, come to think about it, in pre-medieval times, before art liberated itself from religion, such creative methods were perfectly common. What Jahana tries to do here is to relativize the image of the modern artist.

What I found rather curious was the fact that the artist himself claimed that it was matters of “love” that he aims to discuss through his creative endeavors. In medieval times it would probably pass as “love of god”. I guess the point of success is connected to the question how love and heteronomy can inspire creative work, and how much richness this can generate, in a world without god.

Tomu OSAKI [The New Temple and Sanshin]

→ p.038

Paintings are lined up on three of the exhibition space’s walls. Onto the remaining wall the artist has drawn a red horizontal line, along which he mounted a number of paper drawings. On the lower right in front of the drawings is a shrine-like installation. Osaki’s paintings are drawn in a mixture of different technical modes, whereas their neat composition with an emphasis on frontality and symmetry creates a religious kind of atmosphere comparable to that of altars. The artist himself states that he is trying to create the sense of expanse of open fields.

The drawings on the other hand are of a rather experimental nature, showing the same images depicted by different modes, or drawn onto pieces of paper that are glued together. Rather than being preparatory sketches as preliminary steps toward the realization of paintings, these drawings are made as full works in their own right for which further sketches are being made beforehand. Without seeing a subordinate-superior relationship between paintings and drawings, Osaki explores things that are only possible in either

one of the two different formats. He explains that the drawings are being made consciously, while paintings are realized in a preconscious state.

Osaki further claims that he is not interested in improving technical skills or painting things always in the same way. His interest focuses on how the artist himself gradually changes, which probably explains his hunger for different means of expression. At the second exhibition space, Osaki displayed an embroidered work, with the aim to express the tactile perception of a place he actually visited. The talk session ended with Osaki’s recital of a self-made poem studied with expressions of nostalgia and excess. No matter how broad the range of media, and how varied the artist’s experimentation, the viewer always ends up trying to find that characteristic quality of Osaki’s work in the result. I wonder how long the artist will be able to carry on with this, and even though it must be a rather difficult flight, I think I’m going to keep an eye on this artist.

Asuka SASAMOTO [Floating with my pieces]

→ p.038

Various colorful Styrofoam objects were scattered between the paintings on the wall, while fragmentary videos were played back on a monitor on the floor. Letters in the foreground spell the phrase “Watashi dake ga is-eijin (Only I am an alien)”, the title of a fictional animated film plotted by the artist herself. The piece is about the paranoia caused by a sense of estrangement in human relationships, and although it wasn’t actually produced, the artist created this title logo just in case. It is the only work involving letters, while all other items depict in an anime kind of style debris floating around after an explosion. The objects, with traces of chopping and parts of hiragana characters visible, seem to be representing such debris. Paintings and three-dimensional objects are interconnected to create one scenery.

According to Sasamoto, this scenery is supposed to be a reconstruction of the things on the artist’s mind. Negative feelings of self-disgust, regret or fixation are the very grounds for her being here and now, and in order to be able to accept this, the artist charged every single part of the display with such emotions, and exhibited

the whole thing as a reflection of her own mental world.

I wondered what the visuals on the floor were supposed to mean. The artist described them as being “like the noisy transmissions one involuntarily receives while trying to tune a radio to a station,” after which “the things one unwittingly received become real.” If this space surrounded by walls represents the space of her mind, the monitor onto which information received in a random fashion from the outside is projected must be showing the world outside.

Frankly speaking, when browsing through materials on this artist beforehand, I expected to be confronted with the fetishistic creations of an anime freak, or products of delusion, but experiencing the combination of displays on the walls and on the floor proved me wrong. The artist achieves an exquisite balance using the walls to mirror her inner world, and the floor to represent the outside. I guess it is the way she juxtaposes these elements that will define the further direction of Sasamoto’s work.

Part.3 Text: Hitoshi NAKANO (Curator, Kanagawa Arts Foundation)

Tomomi ABE [records]

→ p.039

Looking at Tomomi Abe's works, I thought about what they tell the viewer about human relationships in the present age. Russian philosopher Mikhail Bakhtine (1895-1975) developed his discourse about polyphony, dialogue and monologue based on Dostoevsky's novels etc. In Abe's works shown at this exhibition, there is always one character appearing in each picture. In "far," the artist depicts a boy from behind as he gazes across a grassland, and in "Tableland," it is a somewhat lonely and exhausted looking man who seems to be on his way home through a dark, snowy forest. According to Bakhtine, a dialogue can be established even when there is only a single character appearing in a novel. Every individual can only be discussed in consideration of the existence of others. Through the contrasts and mutual reflections between ourselves and others, we discover our concrete individual features. These others don't necessarily have to be human beings. In her work orchestrating her own original narratives within the confines of square canvases, Abe engages in dialogues with others by por-

traying models rather than herself. In the paintings, those models face and talk to the "other" – here in the form of nature such as grasslands and snowy landscapes that surround the artist. The everyday kinds of settings with vanished backgrounds in which the boys in "flight" and "a rest" appear seem to emphasize their longing for conversational partners. These depictions of Abe's own personal world communicate the artist's doubts about a world with fixed disciplinary rules as reflected in the usage of materials in Japanese-style painting, and her strong desire to escape from it and find a new world with new creative possibilities.

Misa SUDO [False color]

→ p.039

The NASA developed Hubble Telescope continues its observations while floating in outer space. The vivid photographs shot by this telescope inspired Misa Sudo to create artworks themed on cosmic space. The pictures taken in space were in fact subsequently colored by scientists in order to highlight details and make them better visible than they are in reality, and when learning about this process, Sudo realized that "there is more to the truth than just the visible world." The fact that the analogue method of coloring images is being applied even in the realm of space exploration, a field of research that sums of the leading edge of science and technology in the world, is quite intriguing. "Hubble Telescope" is a pencil drawing of a telescope – the one object that Sudo's interest in things related to space focuses on in particular. In this drawing, put up on a pitch-black wall that represents outer space, the telescope that travels on its orbit at ultrahigh speed appears almost as if hovering at a fixed point up there in space. For "Milky Way Galaxy" the artist cut holes into a black and a white sheet

of Kent paper. The lighting in the exhibition room penetrates the holes, and represents in a three-dimensional space the stars that make up the Milky Way. In spite of all the various studies being conducted, there still remain countless uncertainties, obscurities and mysteries out there in space. We look up to the sky and dream of the roof of heaven, and by experiencing the cosmic world of Misa Sudo in this exhibition, space turns into a rather familiar place, while our dream of it further inflates.

Yuushi SUGA [Enter the 2.5D - No paint no form -]

→ p.039

The architect expresses his ideas in the form of plans for a building, the composer in a score for an instrumental solo or orchestral performance. Yuushi Suga is a painter, and thus it is primarily the planar surface of the canvas on which he casts his ideas into shape. In our talk session, I likened his art to that of a theater performance. He takes the flat surface and divides it into areas that are to be colored with different colors, which is the next step in the composition process of Suga's paintings. Through the elaborate application of the theater's mechanism, the stage turns into the calm and modest living room in "Anne of Green Gables", or into the unworldly empyrean realm of gods in Wagner's "Götterdämmerung." "2.5D" in the exhibition title does not refer to a "semi-plastic" sort of concept somewhere between two- and three-dimensional, but the artist himself positions his work between the realistic sense of depth that characterizes the three-dimensional, and the format of anime or manga on two-dimensional displays. By casting and framing the objects he incorporates in his works, Suga

temporarily liberates images. "Couple" is made up of three differently colored patterns showing the protagonists in "Bonnie and Clyde," a movie that portrays the famous gangster couple in the days of the Great Depression. In the liberated images, the two characters take on completely different aspects thanks to Suga's elaborate color balancing – slightly shifting the balance of different shades of blue; artfully connecting red, blue and green; or counterpointing purple and blue against a background of black and orange, etc. Here Suga reminds us of the vagueness of images. One work each was put up on each of three walls inside the exhibition space. If we look at the exhibition room as a stage, Suga is perhaps the conductor who stands right in the center and unerringly conducts the three singers' *terzetto*.

Part.4 Text: Hiroko ONO (Curator, Nerima Art Museum)

Yuichi ETO [Drift]

→ p.040

The works of Yuichi Eto apparently contain an inherent aspect of sculpture. While video is the medium he primarily works with, it is the act of sculpting that provides an incentive for him to create artworks in the first place. Through sculpting he has developed something like a "sculptural sensibility," which has aroused his interest and questions regarding the physical presence of humans and objects. In "Moving Park," one of the works on display here, the artist stands in a park, from where he moves to TWS Shibuya. As he does so together with the ground he stands on, he hasn't really left the park even though he is at once somewhere else. Given that we consider someone to be at a place as long as his or her feet touch that place's ground, does this mean in this case that the artist is now at TWS Shibuya, or is he still in the park as long as he stands on the park's soil? Somewhere between reality and our uncertain perception of "being present" at a place, Eto's thoughts seem to be revolving around the question of "presence" itself. But if we question presence, that should be a much

more complex affair. When we say that someone is there, does this automatically mean that the person is in fact physically present? Assuming that his sculpting work inspires the artist to create video pieces, I'd like to see him take his thoughts a step further from there. The "awareness" that Eto obtained through sculpture does hold the promise to create new video works. Even if it's difficult to seek new means of expression in creative work, to deepen one's thoughts is something that should be possible for anyone.

Nao TOYODA [MISS SCORPIUS]

→ p.040

Nao Toyoda illustrates narratives. While her previous works were apparently inspired by such things as Scandinavian myth, today Toyoda defines narratives not as something in a text format, but she assembles her own narrative worlds out of visual motifs that appeal to her. Such motifs she collects from cinema, theater, and various other genres. In “Build creature,” she translates the inspiration drawn from movies in the single motif of legs. Toyoda selects motifs from the things she finds inspiration in, and creates shapes by layering them on top of each other in a collage-like style. This goes also for the aspect of coloration, where Toyoda applies colors in layers with the aim to create original hues – always aware also of the white color of the canvas. In her works, the artist constructs a singular world by combining layers of selected motifs and colors with her awareness of white and blank space. Toyoda’s world-view is consistent and strong. Even when there is some influence or stimulation from the outside, it generally doesn’t happen that those things overturn the artist’s own ideas.

I would suggest her to look at a variety of things with an even broader vision to ensure that her own imagined world can never collapse. In her creative work, there is nothing more important than the world of her own imagination, which is directly connected also to her motivation to paint in the first place. Without really needing to care about the eyes of others, I hope that Nao Toyoda will thoroughly carry through her almost stubborn own narrative world.

Satomi ISHIKAWA [A perceptual illusion of Life]

→ p.040

Satomi Ishikawa’s problem consciousness is perfectly clear. Constantly aware of the relationship between artifacts and plants or other forms of nature in urban environments, she claims to be exploring through nature the position of human individuals within society. This time’s “perceptual illusion of life” features a set of works in which plants are being given blood transfusions. Using a red water solution to resemble blood, the artist expresses how these personified plants are “kept alive,” and superimposes this onto our human idea/illusion of independent life, in order to convey her message suggesting that we are being kept alive in the city just like the plants. Based on the Sogetsu school of ikebana, and backed by such workmanship, Ishikawa’s works are manifested in proper shapes and with a high degree of perfection. They are quite striking also visually, and her clear message is surely going to broaden the scope of Ishikawa’s activity also beyond the realm of art.

However what keeps bothering me is the depth of the problem consciousness that is the driving force be-

hind Ishikawa’s work. Issues such as human life in the city, and the relationships between urban and natural surroundings, have been repeatedly addressed in various artistic fields in the past. While charging her works with clear-cut messages, the problem consciousness that develops from such subjects can at once appear superficial and shallow if it isn’t supported by sound consideration. Given that she is conscious about issues related to society, nature, cities, artifacts, humans and life, Satomi Ishikawa needs to look at those in greater depth. She possesses the technical skills, so if only that is coupled with proper thinking, the works in which she addresses such problems will no doubt become even more powerful.

Part.5 Text: Naoki YONEDA (Curator, The National Art Center, Tokyo)

Rina OHITO [Drawing room]

→ p.041

Consisting mainly of found objects, Rina Ohito’s installation “Drawing Room” was exhibited across the gallery’s ground and first floor spaces. “Drawing Room” is a term that has been used to refer to a living room – or “room for withdrawing” – and that at the same time means “room for drawing.” Here it is a space for receiving guests (gallery visitors in this case), and at once a room in which the host (the artist) makes drawings. According to Ohito, the structure of the installation was designed to represent the artist’s “exterior” in the part installed on the ground floor, and her “interior” in the first floor part. The small-sized landscape painting in the entrance area of the ground floor space was indeed reminiscent of a typical picture that people decorate their entrance with. The laundry that was put up in the staircase connecting the ground floor (exterior) with the first floor (interior) as a material borderline between interior and exterior embodied the work’s concept very well. On the walls, the collages of fragments of literary texts and drawings of places the artist had visited

made up Ohito’s own “map of the world.” The maps these images recalled are sometimes indicating literally geographical (=real) maps, and sometimes drawing maps of the artist’s interior. As a whole, I think the installation was a skillful realization of the concept behind the work, and as the above two concepts are extremely ambiguous and profound in both imagination and reality, there certainly is room for further exploration.

Natsuko KIURA [The passed landscapes]

→ p.041

The objects that Kagoshima-based artist Natsuko Kiura chooses to depict are perfectly ordinary, commonplace sceneries. Rather than detailed descriptions, the works based on photographs taken by the artist herself are painted in a way that makes them look like snapshots capturing brief moments. While painting from photographs is not an unusual practice, here the artist seems to be pursuing in her paintings that same snapshot-like style of her photos. When translating the photographs into paintings, the material of paint and the autonomy of colors highlight completely new aspects in these otherwise perfectly ordinary sceneries devoid of noteworthy elements. As the artist puts it, regarding the materiality of paint and the liberation of color systems, her paintings are perhaps reminiscent of the French impressionists of the 19th century. However, what distinguishes her work from the impressionists is that her pictures are charged with a tranquil kind of mood rather than sensations of dynamic or vital energy. The artist achieves this by painting human figures all in a single color, and ap-

plying colors evenly, and thus destroying the perspective of landscape depictions. By adopting this style, she succeeds in compressing (abstracting) rather than precisely reproducing the sceneries in front of her eyes (=the clipped images in the photographs). This method of compression is an approach that Kiura may be sharing with the likes of Giorgio Morandi and Richard Diebenkorn, whereas I suppose that, even though employing the same methods, the artist’s analyses of such precedent examples will result in an even broader variety in her own work.

Ryota NOJIMA [If a painting gathers another painting, it can't become the painting]

→ p.041

Human figures frequently appear in Ryota Nojima's paintings. Rather than depicted through a process of abstraction in which realistically depicted human bodies are radically deformed, here it seems as if these elements had been added to the canvases beforehand. Nojima addresses the classical topic of "man and woman," but in his works such dual power structures as "viewer and viewed" or "painter and painted," as incorporated in the subjects that repeatedly appear in the works of Henri Matisse and Pablo Picasso, are absent. Mainly composed of two colors, many of the "Man and Woman" paintings include two black dots. For this exhibition the artist chose the method of showing several of them at once, whereas the interesting point is that this method is not about how to utilize the exhibition space, but that it is used to indicate "pluralism". The two black dots that frequently appear on Nojima's abstract canvases are elements that inevitably remind the viewer of faces. As is prominently visible in this series, regarding the representation of faces Nojima deals with the same problem as

Picasso did: the impossibility of not recognizing things as faces. This task – one may call it the impossibility of non-figurative perception – itself is a very interesting one, and I hope that Nojima continues to accept it in his work, consciously or unconsciously. When re-evaluating the practice of extracting some kind of essence (or in other words, abstracting) as a primary act in abstract painting, the mechanism of this problem certainly retains its validity still today.

Part.6 Text: Reiko TSUBAKI (Associate curator, Mori Art Museum)

Takuya WATANABE [To Think: Once it's Made (by)]

→ p.042

In "Installation on Tools and the Act of Making – case 1", Watanabe reproduced all kinds of tools from his direct environment in the form of ceramic pieces made from reddish clay, and lined those up like archaeological remains. The idea that all things man-made, including clay dolls, are tools, is connected to Japanese native forms of animism, while at once suggesting that tools we use today will perhaps be collected as remains in museums in the future.

"Novelty (protective suits)" juxtaposes the history of "Seto Novelty" ceramic Meissen figures produced in Seto for export to the USA since the 1930s, with the fact that Japanese-American relationships resulted in the construction of a total of 54 nuclear power plants. The highly sophisticated Novelty dolls wearing protective suits seem to sound a warning to us while barely maintaining their balance on disproportionately finished sockets.

In "The Series of Grey: Traffic Accidents, Pictures," the artist uses grey clay and crushed cans to reproduce scenes of traffic accidents as seen on TV or on the In-

ternet. The idea of a traffic accident is translated into physical objects, and overlaps with the real existence of squeezed and flattened cans, resulting in sceneries with different levels of reality.

In such ways, Takuya Watanabe's works apparently question the medium of ceramic that has existed for ages also as a means of human expression, and by doing so from anthropological and sociological points of view, they question at once aspects of contemporary society. As he is somehow already establishing a way of questioning society, I'd suggest the artist try other ways of creative work without sticking to ceramic too much in the future.

Hiroyuki KITAMURA [Desire / Fixation]

→ p.042

Characters appearing – sometimes only partly – in Hiroyuki Kitamura's charcoal drawings range from nude human figures to strange, non-human creatures. The artist explains that painting is for him an act of seeking his own identity, and visualizing that in the shapes he draws.

Works that particularly reflect the artist's struggle with his identity include "Desire" incorporating a plaster cast of his own face; the masked face in "Breath"; "The Gaze," in which he holds a mask; the profile view in "Facing Ground"; and "On the Hill", in which a human figure faces a light source while hiding its face under a piece of cloth. "The Monument", in which the face seems to turn into a giant hand mirror, hints at the link between human existence and memory.

Other works emphasize through the texture of flesh and muscles aspects of life and corporeality even of figures that don't look human, such as what looks like a hunk of meat in "The Residue"; the monster with disproportionate limbs and a twisted horned head in

"Hold On"; the cavernous fleshy mass in "Alone Muscle"; the personified three-fingered hand in "A Torso"; or "A Hug," consisting of a chubby body and a pair of legs. A personification of the senses of vision, touch and taste, "Eye Fist Tongue" symbolizes the minimum of senses necessary for the individual to grasp reality. These works that are first and foremost stories stemming from the artist's "self," yet depicting preposterously odd casual connections, are most impressive whenever they seem to contain mythical elements. However, in order to gain a better understanding of his "self," Kitamura should perhaps reflect a little deeper on the meaning of creating art within the environment of contemporary society.

Nozomi KUOKAWA [The view from a tatami]

→ p.042

One characteristic of Nozomi Kurokawa's paintings is how the artist recklessly combines aspects of composition and coloration in a way that one cannot guess from their respective titles. This is because the "reality" they originate from is a reality of ideas that emerge from the artist's own recollections of things she has seen, whereas she chooses shapes and colors, and creates what may be called "an alternative reality" to express them in an even more "realistic" way. The reason why she chose oil, the artist explains with the fact that its translucent, silky skin-like texture makes this material most suited for depicting reality.

In "Washing," for example, a bizarrely tall human figure bends over to touch the ground with its hands under laundry that looks a bit like yellowish green roofs. "Waitress" apparently depicts the artist's friend in a funny pose, whereas the green figure with a distorted body and seemingly broken neck projects the surreal sensation of an alien from space. Finally, "Private Room," "Slide" and "A Bridge Crosses over Right and Left" are so abstract that the texture of the oil's

skin seems to be their only reality.

The title "The view from a tatami" suggests the perspective of viewing the world from within Japanese everyday life. Given that Kurokawa sympathizes with the way her favorite early 20th century painters Kinoshita Eihara and Narashige Koide hesitantly yet thoroughly incorporated techniques of Western style oil painting in their works, it might be a good idea for the artist to study and think a bit more about painting styles in global contemporary art today.

Part.7 Text: **Atsuo YASUDA** (Deputy director and Curator, Hara Museum of Contemporary Art)

Jihye PARK [Freezing love]

→ p.043

This installation makes use of the entire 2-floor exhibition space including the open ceiling part (and – unrelated to the quality of the work – I would have liked the artist to make it a bit easier for visitors to enter the venue). According to the artist's comment, the work titled "Freezing Love" was inspired by the "image of a refrigerator," alas in this case it's obviously not an ordinary fridge, but a refrigerated chamber at a meat factory. On the ground floor, lots of human-sized dolls are hung or otherwise placed in a single-pipe frame construction. The dolls don't have heads, and in some cases they are just torsos. There are male dolls and female ones. It all looks indeed very much like in a meat factory, whereas it is perhaps the inflatable dolls' inorganic quality that makes the scenery feel not even grotesque. Silver tubes resembling air conditioning ducts are crisscrossing the room in a random fashion, with disks (CDs) and bicycle wheels reminiscent of Duchamp scattered here and there. When following the tubes and climbing up the spiral staircase to the first floor in order to find out

how they are connected or perhaps circulate, the visitor is greeted by a colorful tent like a hide-out, filled with all the missing dolls' heads. The exhibition is about "love," so this has to be the love nest one is tempted to think, just to discover that disks stick like blades in all of these heads. If there is anything stored on the disks, that's probably the dolls' memories. Or maybe there is nothing on them at all. All kinds of words begin to flash across the visitor's mind. "Life and death," "memory," "desire"... Along with that same sense of frustration one feels at the sight of disks that are physically there but the contents of which are invisible, there is a certain amount of heat radiating from the chaos that creates an intriguing contrast with the "Freezing" part in the title.

Kenichiro FUKUMOTO [Into the dream]

→ p.043

The exhibition contains two paintings of a scale as large as works shown at art museums. Richly colored and highly symbolical/metaphorical, they seem to be depicting landscapes of tropical rainforests, while at the same time, the layered pictorial space they create has perhaps more of a stage set than of a landscape. Displayed next to them in a contrasting fashion are several small pictures (often painted onto coarse jute fabric), and a number of homespun (as I would venture to call them) small ceramic and wood-carved items. Kenichiro Fukumoto mentions "scenery" as a keyword for this exhibition, and in the "scenery" these variously sized works create as they fill the not exactly large available space, one somehow feels strangely at home. That's probably because the artist is approaching his creative work from the basics of "shaping." Departing from painting, he steps out of his domain and into the realm of ceramic art in order to examine his relationship to others – or the individual's relationship to the world – through the direct contact with paints and materials that literally func-

tion as "media" here. Today, in the 21st century, people can paint any kind of painting, and make any kind of sculpture, and that's exactly why defining one's own distinctive "shape" is so difficult. Kenichiro Fukumoto explains that in this sense his experience in Southeast Asia, studying in Singapore four years ago, was elemental. He doesn't just simply choose tropical motifs and colors though, and these new paintings even seem to be referring to "shapes" of a rather Japanese nature. I suppose he is trying to pinpoint his own "form" and "image" among the various "shapes" found in the realms of fine art, industrial art, folk craft and decorative art. As a matter of fact, the small items here include such "functional shapes" as vases. I'm quite curious to see what kinds of "sceneries" the artist is going to create next.

Euske OIWA [Pleasure]

→ p.043

Somewhat different from the impression one gets from the original long-winded Japanese title, Euske Oiwa's installation is composed of various small pieces, and forms a nice contrast to that of Jihye Park. Component elements are varied. There are water tanks and light bulbs. Warning signs written in English. A looped video on a monitor. Fans. Godiva wrapping paper, and lots more. While checking out each single part, the visitor notices pieces of yellow masking tape at various places on the walls and floor. Due to the nature of my job, I interpret this to be tapes marking the positions for artworks to be installed (or, as theater people would probably say, indicating positions of actors on the stage), which are normally removed once the setup is done. In this case, the tape was of course left there intentionally, suggesting that here the exhibition space is intended to function as a "play" (in both senses of the word) space for the artist and the viewer. Items that make up the installation include in fact a script for a short "drama" pinned to the wall. The characters that perform the

play are the exhibited objects. To imagine how these objects communicate like humans is so entertaining and funny to read that one is tempted to read the entire script in one go. The exhibition plans the artist supplied beforehand contained the expression "scene of a crime," suggesting that the whole thing is perhaps also to be understood as a "detective game" of sorts. Could it be that it is made so that the viewer reconstructs the crime as plotted by the artist from the various pieces (of evidence) contained in the installation? As far as the work's quality as a detective story (?) is concerned, however, I must admit I'm slightly disappointed compared to the appeal of the "drama" that is one of the installation's components. Anyway, I'm looking forward to witnessing the next scene of a play, a crime, or whatever the artist is up to.

OS-XX -Prelude to the operating systems of the future city → p.052

Cybernetic Urbanism

Text: **Yusuke OBUCHI** (Associate Professor, University of Tokyo)

The 2015 Tokyo Wonder Site exhibition “OS-XX” shared 15 projects from Obuchi Laboratory, one of three laboratories in T_ADS (Advanced Design Studies, Department of Architecture, The University of Tokyo). These projects were representative of the “cybernetic urbanism” agenda pursued by the laboratory from 2010 to 2015.

The primary focus of the cybernetic urbanism agenda was an examination of the understandings of “architecture,” “waste” and “resource,” in the urban context. Sustainability practices have largely focused on reducing use of materials, re-using materials, or recycling them. Our research, however, is not simply to circulate materials between states of “waste” and “resource,” but to explore the many consumption and production possibilities of material flows. Our aim was not to continue in the “scrap and build” model, where in its final stage architecture becomes waste, or simple components for re-use, but to design a network for material transformation and flow as a part of the urban context.

The 15 projects included in the exhibition were organized into three categories in accordance with how frequently the materials featured in the project could be understood to link with the life of an everyday Tokyo dweller. The three categories were “daily” “monthly” and “yearly” projects. The “daily” category included projects using materials such as chopsticks, coffee, and water. In the “monthly” use category, projects examined toxic soil, hair, and cardboard. Finally, “yearly” projects included materials such as bamboo, brackish water, and oil spills. A poster for each project helped visitors understand how the material

was being re-networked and applied in a new way. Student thesis books, and models produced by the students were also included to serve as visual and textual aids for the projects. Thesis projects from 2015 also included The aim of this exhibition was to consider how materials available in the city and our lifestyles can be networked, how materials can be transformed, and to introduce new possibilities for sustainable design. At T_ADS, instead of thinking of the design of architecture as a simple box, we consider links to materials circulating in the ecosystem of a city as a system idea for sustainable cities.

For an Alternate Society

Text: **Koki TANAKA** (Artist)

What would it be like to live in a society where, in response to the demand that we should all be creative, everything was controlled down to the last detail?

Our daily lives are filled with consumer desires. Everywhere we go, the superficial world is covered in sophisticated designs, and we are driven by such desires to constantly buy and possess things that complement those designs. In this society, we are born as consumers before anything else.

A plan for a new society is now under consideration. In anticipation of the 2020 Tokyo Olympics, this plan seeks to provide us, the consumers, with a new role. We must become creators (artists). According to the abridged version of the Tokyo Metropolitan Government’s “Tokyo Vision for Arts and Culture,” we are required to exist as both consumers and “artists (creators)”: “There is a history in Tokyo of individuals being both artists and spectators/consumers.” (The same passage cites as the basis for this statement the increasing number of people practicing flower arrangement and tea ceremony from the Meiji era onwards, the vitality of the citizens’ creative practices, and the emergence of anime and manga from the lives of the ordinary people, but this logic seems questionable.) We look (consume) and make. We make and look (consume). Certainly our society is full of countless anonymous creative practices and their consumers – as has been made evident by the Internet. And of course there is a ring of idealism to this: a society where everyone is creative, and everyone an artist.

But there is something off about this worldview that would put the consumer, the specta-

tor and the artist all in the same position. A kind of creative cannibalism. A self-containing creative practice. The principle of critique has been left out of the worldview aspired to here. One of the cruelest parts of being a creator or artist is the experience of being criticized. Compared to the times it is praised, a work is far more likely to be nitpicked, criticized, disparaged.

If the things being made are consumed by their makers, there is no place for critique to enter the equation. And no matter how many things are produced in this way, they will never be able to present anything more than a self-contained “vision” that has nothing to do with creativity. It will result in an ouroboros-like society that continuously consumes itself. An isolated world, devoid of the criticisms/opinions of others. But I suppose there is no longer any need in our Olympics-oriented Japan for the difficult process of continuing to make works even after they have been critiqued and broken down.

Thrilling Nomads

Text: **Akira TATEHATA** (Poet/ Art Critic/ President, Tama Art University/ Director, The Museum of Modern Art, Saitama-)

Although the template of the art museum system in Japan was more or less in place by the 1950s, artist residencies/AIR programs would not appear until some 40 years later. In 1993, the Tama area launched the first attempt at an AIR program in Tokyo, TAMA Life 21 – a project with which I was involved. But the project could not be sustained, even though it had permanent facilities. In comparison, the success of Ibaraki Prefecture's ARCUS Project, which was launched a year later and has kept going all this time, shows that the full-time engagement of professional staff with specialized interests and skills is essential for any AIR program.

In this regard, it could be said that Tokyo Wonder Site (TWS) – established at the start of the 21st century – is quite substantial in terms of both scale and program. It is a unique institution brimming with vitality that goes beyond standard AIR practices. With its spaces in the heart of Tokyo, TWS keeps hosting events that are full of initiative, but what is most remarkable is the staff's effort to build a tight-knit information network with other artist residencies across the world, and their development of reciprocal programs that are not limited to hosting artists from overseas but also extend to sending Japanese artists abroad.

Over the past two years, I have been involved in the selection of both the artists for hosting and those for sending abroad. The program attracts a great deal of attention from young artists – not only because they see it as a path to success, but also because it provides opportunities for participants to present the results of their residencies in exhibitions like “Return To” (Kyun-chome; Maiko Jinushi; Yusuke

Taninaka; and Kaya Hanasaki), held this spring at TWS Hongo, which featured artists who had returned from places like Berlin and Madrid.

Among the eight artists selected for overseas residencies in 2016 is Kenji Yamada, who has created such unusual projects as the absurdly large Booking Void Inn MATSUNOYAMA (YUKIMUROADO), utilizing a deserted snow storehouse in the heavy snowfall zone of Niigata, and BSIM (The BEPPU Subterranean Innards Museum), exploring the underground tunnels left in the city of Beppu following the US military occupation. On his residency, Yamada will explore the tunnels beneath the former Millbank Prison in London. His nomadic stance, as it were, is truly emblematic of the AIR movement.

Also, Shun Owada is planning a sound installation in Berlin using fusulinid fossils preserved in limestone as his material. In this project, Owada will attempt to reproduce sounds from 250 million years ago through the CO2 reactions generated by pouring acid solution over scores of these fossilized, ancient creatures arranged on the floor.

This time, too, it has been a great pleasure to discover such thrilling and challenging artists.

My Residency Experience

Text: **Tsuyoshi OZAWA** (Artist/ Associate Professor, Tokyo University of the Arts)

In August-September 2013, I spent a month making work at the University of the Arts London as part of the Tokyo Wonder Site residency program. Based on previous experience, my impression was that Artist in Residence (AIR) programs are meant for relatively young artists. As someone who was no longer so young and had already built a career, I was not without reservations. However, I had two clear goals. One was that I was deeply interested in the chance to do a residency at an art school. The other was that I felt the need to make works in Europe, far away from Japan.

I had become a faculty member at university in 2012, and I wanted to fully experience the administration and environment of the kind of foreign art school that has produced so many famous artists. I was particularly impressed by the school infrastructure and its security system. The infrastructure was designed with the utmost concern for the safety of the environment, while placing at its center an open plaza to facilitate the school's integration with the surrounding neighborhood. It was right at the time of the graduation exhibition, so in addition to seeing the students' works, I was able to ask the teaching staff about the management system.

On the other hand, my work during the residency, using painting and photography, was based on the Austrian author and playwright Elfriede Jelinek's play “Kein Licht (No Light)”. An agoraphobic who rarely leaves her home, Jelinek wrote the play in response to the Great East Japan Earthquake and Fukushima nuclear disaster of March 11, 2011. For this project, I felt an almost acute need to distance myself from Japan in making the works. I think this was absolutely necessary for my practice at a tense moment still only two years removed from the disaster.

Given a suitably large studio space, I got through my daily isolation by concentrating on the work. There was no need to rely on the school administration for necessities, which I could buy at an art supply store, and the maintenance staff would immediately take care of any problems in the residence facility or studio. There was nothing to stress over.

Along with the other guests, I joined a tour of the graduation exhibition and listened to the instructors' explanations of the works. Like me, there were artists and curators, critics and businesspeople who had come from elsewhere for short-term stays. The bearing of the instructors, who took responsibility in their own words to speak directly to us, was truly instrumental in connecting the site of the school with society. As part of my obligations as a resident artist, I also gave a talk in one of the lecture halls. Afterward, I had some people over to the studio, where I discussed my work and we exchanged ideas.

When it was almost time to return home, I thought I should at least have someone from the London art scene come to visit my studio, and looked up a curator who was an old acquaintance. It turned out the curator was now working at the museum next to the school, Tate Britain.

And so my brief stay ended. I was more or less able to achieve the goals I had set for myself, and came away satisfied with the results. I am not always able to manage time the way I would like, so this system for providing a kind of extraordinary routine was incredibly important for me. Now there are AIR programs all across the world. I hope that Japanese artists can take advantage of them to make cultural exchanges through interactions based on art – because that is something that no politician or businessperson can do.

Neither One nor the Other, but Both

Text: **Atsushi SUGITA** (Art Critic/ Professor, Joshibi University of Art and Design)

I am struggling with complex feelings – irresolvable feelings with which I have been dealing ever since getting involved in the selection process of the residency program. Of course I had previously seen presentations and reports on the residency program, and asked artist acquaintances who did the residency to share their reflections once it was over. I remember that on such occasions there was nothing I found particularly frustrating. But looking back now, I did not have strong expectations regarding the location of the residency, such as the necessity of it having to be in one place over another, or the specificity of that particular place. Nor had I ever encountered a work that was actually based on such an intention, even if it appeared that way only as a kind of expedient.

When they expressed their true feelings about the experience, it was highly unusual for artists who had completed the residency to make reference to the necessity or specificity of the location at all. Even where the unique opportunity of the residency has some lasting impact on the artists, in most cases it comes from the experience of daily life during the stay, and it is rare for anything to result from the interactions that occur in the process of practicing art in that particular place.

On the other hand, I realize that in the selection of the artists I had a strong desire for this largely unrealistic effect. So where does this unbridgeable gap come from? If we think of the artist's voice as the expression of honest feeling, then naturally the expectations of the selection panel are irrelevant. They inevitably come across as rigid, conventional, and superficial. On the other hand, the one-sided ex-

pectations of the selection panel are actually quite reasonable, and it's not such a stretch to recognize an element of deception and laziness in the attitudes of artists who reject such expectations outright.

But I believe this is a problem that should not be resolved by saying one side or the other is wrong. Those who select the artists expect some kind of responsibility in exchange for the social capital they provide, while the artists continue to subvert preexisting criteria in resistance to systemization. If the residency program does not belong to those who organize it, neither does it belong to those who use it. Perhaps if we can see the desirability of it continuing to belong to both sides, then we can also discover the original significance behind the residency in our confrontations with those gaps and the complex feelings they engender.

TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL Vol.10 → p.087

Hope for the Creation of a “Site for Experimentation”

Text: **Toshi ICHIANAGI** (Composer/ Pianist)

Tokyo Experimental Festival (TEF) began in 2006, and I have served as a jury member since the following year's second edition. Initially, TEF was conceived as a place for young musicians to present works of contemporary music, but gradually, under the banner of “creating a site for experimentation,” it expanded to include all forms of expression incorporating sound. It is a valuable project – one that is unprecedented in Japan.

During my time in the United States in the 1950s, as well as in Japan in the 1960s, there were attempts at all kinds of experiments that transcended the fields of music and art. The young artists of today, as well as the audiences who come to see them, are of course different from those of a half-century earlier. These differences cannot be easily summed up, but the artists of 50 years ago were full of dreams and a hungry spirit, bravely carrying out experimental challenges that anticipated the society of the future. The audiences at those performances also had a strong sense of participation, and energetically shared their opinions and debated with the performers afterwards. No doubt this was because people then had a powerful yearning for freedom and idealism after being liberated from the harsh psychological oppression of the war years.

In contrast, the situation surrounding art and culture in contemporary society has changed dramatically, and instead of establishing a position for contending with technological advances and the rise of information networks, art is being swept along by such developments. On top of this I feel there is now less freedom and tolerance among not just artists and project organizers but in society as a

whole. As the systematization of society strengthens, the scope of individual action also seems increasingly restricted. But I believe that each individual artist has the latent power to break down these restrictions, and can achieve a voice and critical spirit that can influence society without relying on anything. In this sense, more than the excellence of refined techniques, it was the inherent philosophical and conceptual aspects of the proposals, and their concrete enactment, that most attracted me during the screening process for TEF.

I think that in all its projects to date Tokyo Wonder Site (TWS) has successfully created an open and free environment for a wide variety of disciplines. It should definitely continue holding programs such as talk events by specialists from diverse fields. Previously, TEF has also linked up with residency programs and other musical projects like International Ensemble Modern & Tokyo Wonder Site Academy. This situation where local and international artists interact with each other, and participants come from around the world for events here in Tokyo, is something that did not exist 50 years ago, and it is the kind of positive environment that only TWS could create. I have confidence that TWS will continue developing projects that stimulate and influence artists in the future. (As told to Emi Sato)

Is the Concept “Good” or “Bad”? A Decade of TEF

Text: **Yuji NUMANO** (Musicologist/ Professor, Toho Gakuen School of Music)

Having closely observed the Tokyo Experimental Festival (TEF) over the past decade in my role as a jury member, I feel that the festival is the crystallization of the mission of Tokyo Wonder Site (TWS) to “foster new talent,” pursue “international exchange” and “support experimentation.”

I remember how in the beginning both organizers and participants had to feel their way through, and there was quite a “digital” divide between the performances of contemporary music and the sound installations or body-based performances. However, I think that with each new edition of the festival, these divisions have gradually converged and fused to produce works that can be encountered nowhere else but at TEF.

In relation to this development there has also been an increase in the number of applicants from countries spanning regions like Asia, Europe and North and South America. It was a challenge to read in English the proposals by people from such completely different backgrounds, and conduct interviews over Skype, but thanks to the help of the excellent TWS staff I was able to approach the screening process with a fresh sensibility every time. There is surely no other competition in Japan that is as open as TEF, and this achievement should be a point of pride for the festival.

However, there are also things that have been shameful to me as a musicologist and music critic. I feel that the vocabulary of the Japanese artists working with music has a tendency to be deficient, and this tendency is all the more pronounced the more “musical” the artist. Of course this doesn’t mean the presentations need be as polished as a salesman’s pitch,

or reflect the logic of a scientist. But if the artists can’t explain their concepts, then it’s impossible to assess their proposals.

I have the sense that in Japan’s music scene, the word “concept” gets interpreted as a kind of marketing-style “gimmick,” something extraneous to the work. In fact, I often hear things like “the concept shouldn’t come before the work,” or, “it’s the music that’s important, not the concept,” such that even the act of using language to explain music itself seems to be considered impure.

But this is wrong. Regardless of whether it’s meant to be experimental or advanced or original, you must be able to look objectively at your work and position it in relation to the world. It’s not about intent or passion or custom, but coolly orienting oneself. This is precisely what the concept is about. And, for better or worse, it can only be achieved through the use of language.

Following this realization it was my intent to pay attention to the particularities of language when screening the applicants, but I still have some regrets on this point. As someone who is actively involved in the music scene, I must go even further in appealing for the necessity of the concept and language in the future.

An Experiment in New Forms of Expression

Text: **Minoru HATANAKA** (Senior Curator, NTT InterCommunication Center [ICC])

I was asked to be a jury member for the Tokyo Experimental Festival (then known as the On Site Lab Emerging Artist Support Program Music) when the event, originally established as an open-call program for contemporary music, was expanded to include not just performances of contemporary music but also those in related genres like improvisational music, ethnic music, electronic music, noise music and sound art. This was the third edition. I had been aware of the open-call program from its inaugural edition, and it impressed me that Tokyo Wonder Site, which always seemed to be an institution for contemporary art, should be doing a project on contemporary music. When I saw the lineup of selected performances, I felt that the ambitious proposals with which the applicants had responded were a rebuke against turning contemporary music into a closed genre and the inadequacy of compartmentalizing the chosen works into the frame of contemporary music. Even as it is a form of expression that has been built up through the refinement of its techniques according to a set of given principles, contemporary music has also evolved/fractured in diverse ways under the influence of contemporaneous events, not limited to the arts alone. The title in use since the fourth edition, “Experimental Sound, Art & Performance Festival,” was a necessary reflection of this parallel expansion of the festival’s scope to include contemporary forms of experimental expression that take music and its related sound-based art forms as a departure point. As a result I think there has been a dramatic shift in the tendencies of the respondents to include more musicians who originate from the

kind of contemporary music that has left behind the concert hall, or the kind of music which does not get to be presented because it does not have a name or genre to which it belongs, as well as performances that emerge from sound- and video-based visual art. The “Sound Installation Section” was introduced starting with the eighth edition, and, while building upon what has come so far, entries in the Performance Section are now accepted from such diverse genres as theatre, dance and media art.

It could be said that the uniqueness of this open-call program lies in its support, not only domestically but also internationally, for experiments that attempt to create new forms of expression – forms of expression that break through existing frames so that they do not belong to any genre. I think there is still potential to further develop the links between the festival and its support for artists’ activities, whether through the creation of a more interdisciplinary scene among participants, in tandem with the increase in variety among the entries, or through providing additional opportunities to participating artists even after their chosen performances.

The “experimental” in its title has always been a major guideline for the open-call program. It is also about being “alternative,” and the challenge of always having the means for choosing possibilities outside a given path. I have the sense that this will only become all the more important in the future.

For the Sake of As Yet Unseen New “Forms” of Art

Text: Yoshitaka MOURI (Sociologist/ Associate Professor, Tokyo University of the Arts)

The category of “music” is not as self-evident as it may appear. The forms of music that we currently know, such as the sounds at concerts and live shows or on CDs and in digital files, were formed historically under the social, economic and technological conditions of the eras to which they belonged. Amid dramatic changes in political economy, society and media technology, music has also been undergoing major transformation since entering the 21st century. Nor is it “music” alone. All the practices that are generally referred to as “the arts” are currently undergoing major reconstitution. More than anything, the significance of the Tokyo Experimental Festival (TEF) lies in its attempt to somehow capture these changes. That is, it is a project that seeks to reevaluate and even deconstruct frames like “music” and “art” that are so often presumed to be self-evident, and give birth to new “forms” of art.

What was most interesting to me as a jury member of TEF’s open-call program was the diversity and interdisciplinarity of the entries. Many of the entries were mixed proposals that belonged to neither music nor installation, nor theatre or performance, reflecting the multi-media interdisciplinarity that is one of the main characteristics of art in the 21st century. In a field that still tends to be divided by medium, TEF is an important experiment for producing new forms of art – forms that may not belong to any genre among the current categories, but which may some day become the mainstream of the art of the future.

Especially commendable were the repositioning of “music” in the performance section in the broad sense of time-based art, rather than

the narrow definition of composition and performance only, and the initiative to actively introduce spatial practice into the field of “music” in the installation section. Not only in Japan but internationally, too, TEF has become a network hub for artists who are creating an art of the future that has yet to be formalized. In particular, the program for prize-winning artists to further develop and present their works at the following year’s festival was a beneficial experience for me as a jury member, convincing me of the program’s sustainability and reach.

The works by artists, musicians and performers that have accumulated over the past decade, and the network constituted by the festival’s participants, are a valuable asset not only for Tokyo Wonder Site but also for the city of Tokyo itself. Building on this capital, we can look forward to what even newer “forms” of art will generate.

Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists → p.098

The Imagination of Others Makes Contemporary Music Interesting

Text: Sugako KUSUNOSE (Setagaya Arts Foundation Music Project Department)

I was greatly intrigued when I heard about the “Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists.” This is because I have come to believe from my own experiences that unpacking the music through workshops is a highly effective method for listeners to gain a deeper appreciation of classical music, including contemporary music. With contemporary music in particular, I am convinced that it is through such experiences that we can refine our sensibilities for not just analyzing the music but also for more freely enjoying it. And this is not only effective for listeners. In using not only the senses but also language to analyze a work and articulate what makes it so interesting, performers, too, can increase the persuasiveness of their performances. But it is not always so simple. My first thought upon reviewing the proposals of the seminar participants this time was that even though they had things they wanted to try doing, they were not concretely imagining how they would work in practice. Certainly, this lack of awareness in part boils down to a lack of experience, and I could also tell that the participants understood the importance of imagining the audience from the number of revised proposals that showed improvements through better practical considerations. It is such a joy to think up a proposal while imagining things like the kind of people who will experience it, and what kinds of discoveries might lead to changes in their thinking. Perhaps we could even say that this is the performers’ own workshop experience.

It was unfortunate that so many seminar participants were unable to effectively and engagingly realize the contents of their reworked

proposals in the presentations that followed the revision process, but I think they came away with the understanding that, in the sense that it is also about expressing one’s thoughts, a presentation is exactly the same as holding a workshop, and just as challenging. I think that reviewing each other’s proposals and presentations was a major learning experience for the participants, and sincerely hope that in future they continue to show an interest in workshops with other performers and people from genres beyond music.

Among the proposals, the workshop and concert program chosen by the jury, Noriko Yakushiji’s “the voice strikes back” – The Revolution According to Cathy Berberian, showed outstanding potential in concept and efficacy. By the fourth brush-up of the workshop, Yakushiji’s growth had exceeded expectations, as with each turn she had reorganized the contents of her proposal so that it was richer, showed a deeper understanding of the audience experience, and displayed better confidence in execution.

Even though it was a “seminar on planning contemporary music,” my hope is that this experience will help young performers to find their own paths while deepening their knowledge of all kinds of music from past to present, rather than single-mindedly pursuing contemporary music only.

Why the Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists is Necessary Now

Text: **Kenichi NAKAGAWA** (Pianist/ Conductor)

Performing contemporary music is a big part of my practice, and I have always thought about how to get as many people as possible to listen to its wonderful works. But it must be said that even within the field of “contemporary music,” it is quite difficult for works composed from the latter half of the 20th century onwards to find a broad audience. I have come to realize that thinking about how best to share the works that should be passed down to later generations with people who do not usually listen to contemporary music is a subject that requires deep consideration – at least for myself, as someone who enjoys and performs contemporary music.

As their ideas were quite advanced and radical for their own time, even the composers who have come to define classical music, like Beethoven, Wagner and Mahler, were not always embraced by contemporaneous audiences. And yet, their works were saved for posterity by those few yet committed musicians who continued to perform them. Now, if you say that the same holds for contemporary music – that all we have to do is to keep playing it – then I feel this is not necessarily true. And although people think they must devote a substantial amount of time and commitment to comprehensively studying each composer’s musical language in order to listen to contemporary music, I feel there are some differences between language and music. For example, in language the moment you say “red” the meaning is already quite determined. But with music, which is an aggregation of acoustic vibrations based on a certain order, the determination and the interpretation of the meaning, such as it is, are largely left to the listener. Setting

aside whether it is music or not, if someone says the chirping of the birds or the rustling of the wind is pleasant, isn’t it the ears that perceive the pleasantness in these sounds? Through my experiences I have come to believe that using all kinds of methods to introduce these things to as many people as possible will be an essential skill for the people who perform today’s contemporary music.

I think the young musicians were able to realize through this seminar just how challenging it is to look deeply at the current era, engage deeply with works that are being made now as well as those made by composers in the recent past, and think about and present them in such a way that those languages can be understood by many people. I will be satisfied with my involvement if they were able to realize that the kind of contemporary music programs that are being organized now, or which people are attempting to organize now, are not just performances for performance’s sake. It actually requires an extraordinary amount of skill to obtain the understanding of others by using language to express to them the significance of the proposal and what it is meant to communicate; depending on how the proposal is presented, there is also the potential for the contents to be taken in the complete opposite way.

I look forward to many new contemporary music programs emerging as a result of this seminar – programs that will possess flexible thinking and wonderful ideas precisely because of the youth of their organizers.

The 9th Emerging Artists Support Program → p.100

Kazuya TAKAGAWA [ASK THE SELF] Essay → p.103
Instead of “Finding” the Self, “Asking” the Self

Text: **Mizuki ENDO** (Independent curator/ Executive Director of HAPS)

There is always an air of futility to the phrase “finding one’s self.” Attempting to achieve optimal “self realization” through the understanding of one’s true character and specialness, “finding one’s self” is in fact nothing more than a rationalistic behavior for effectively reaching a compromise between the “self” and “society.” With society as the given precondition, this behavior is sustained by the kind of mentality that seeks to maximize individual benefits. But society changes, and can be changed. It follows that the self also changes, and can be changed. Between society and self there is an endless cycle of struggle and reconciliation. Kazuya Takagawa’s “ASK THE SELF” shows the self in a state of diffusion, transference and saturation. The outer shell of the self breaks down and gaps open through which the other infiltrates. Words that are not one’s own permeate and fill the self. The self is flushed out. The proactive embrace of this condition.

Social media sites like Twitter strengthen the narrative of the self, and ultimately position the “self” as the beneficiary in the “social.” In the current media environment, “finding the self” is becoming differentiated. While it initially appears to address the exhausted theme of the “self,” what communicates the contemporariness of Takagawa’s work is the sharp criticality it directs at this media environment.

The words I speak are not my own. The one who understands me better than anyone else is not myself. I do not belong only to myself. What emerges when this consciousness becomes the starting point is not a new image of the self. It is a new image of society.

Miki Monma “Route / 59 months” Essay → p.101
The Responsibility of the Witness

Text: **Tadasu TAKAMINE** (Artist/ Associate professor Akita University of Art / Guest Professor, National Taipei University of Art)

Once, when I visited Gaza in Palestine, I had the experience of being surrounded by people appealing to me about the desperation of their lives. We don’t care whether you’re an artist or whatever, just tell the world about what’s happening here, they said. That’s how badly this place is being ignored by the rest of the world.

For me, the work Route/59 Months is similar to my experience in Gaza. In Gaza, I thought about the idea of “the responsibility of someone who has seen the situation in Gaza,” and when I saw “Route/59 Months,” I also thought of the responsibility of the “witness” of the work.

“Route/59 Months” is a series of works that requires determination in its viewing. It is only a matter of time before the first impression that these are just normal landscape paintings is upended, and one realizes that these landscapes are meant as “accusations.” A land that has been destroyed and forsaken; a land that is under threat as the object of

new development. The gaze of the artist who continues the dialogue while unwaveringly staring at this devastated homeland. The accusatory intent behind these placid brushstrokes is directed to the south, to the capital, Tokyo, with a clear purpose in mind.

This series of landscape paintings is a fresh reminder that artworks can function like this. The artist has achieved a great success in intentionally choosing the time-intensive medium of oil paint. As the viewers relive the time the artist spent facing this landscape, they can feel that massive accumulation of time piercing their breasts.

E☆mily Yoshimoto “Baron Yoshimoto: Pulse! Pulse! Pulse!” Essay → p.102
 An Experience of the Outside at Tokyo Wonder Site Hongo

Text: **Akira TAKAYAMA** (Leader of the Theater Port B, Director)

Massive drawings by the manga and visual artist Baron Yoshimoto overflowed the venue in “Baron Yoshimoto: Pulse! Pulse! Pulse!” – the exhibition organized by the artist’s daughter, E☆mily Yoshimoto. Also on display were Yoshimoto’s manga publications, and the physical fitness video he had created, which was projected at small scale. E☆mily says she was inspired to organize this project when she discovered a huge collection of works in her family’s storage space, and resolved to exhibit them at all costs.

As I walked through the exhibition, I was able to relive E☆mily’s encounter with the works and her feelings in that moment. Both the works and the time they spent slumbering in storage had been brought into the second-floor space of Tokyo Wonder Site (TWS) Hongo. It was an attempt to bring into an exhibition space for realizing art something that is outside the conventions of what is generally called “art.” The visitors, who were not the kind usually seen at museums, and the congratulatory flower arrangements and even Baron Yoshimoto’s

speech at the opening reception were all effective, reinforcing the performative qualities of the overall exhibition.

Another thing I recall is Saki Tanaka and Ryo Mikami’s “Find Default and Rename It – visionary tales – ”(TWS Hongo, 2015), presented as part of the 8th Emerging Artists Support Program, which was so compelling I must mention it here. The artists created two rooms within the room of the venue. Each room had a double-exterior: one being the physical surroundings of the room (the corridors and the neighboring room that had been built in the same space), and the other being the people and voices who had previously been there but were no longer present. I have high praise for Tanaka and Mikami’s realization of a space-time that shifted and disturbed the boundaries between reality and “vision” to give visitors an experience of the outside.

I look forward to more such exhibitions by ambitious young organizers in the future.

In Defense of Curation

Text: **Mizuki ENDO** (Independent curator/ Executive Director of HAPS)

The problem with the open-call project, it must be said, comes down mainly to the formal issue of having artists present a normal “exhibition” proposal on their own. Of course artists want to make their own exhibitions, and want their works to be seen. They also have a high awareness of the kind of environment in which their works should be viewed. So there is no faltering in their plans. In a sense, it is simple.

But that simplicity is predetermined by the framework of the open-call project. The “budget, time and space” are all fixed. The specificity of the public institution of Tokyo Wonder Site Hongo is also understood somehow in accordance with its limitations. The simplicity is a function of these preconditions.

This simplicity ends up getting reduced to a “so-so” exhibition, and, moreover, that “so-so” can easily turn into “whatever.” Among the exhibition proposals, there was none that could be expected to draw tens of thousands of visitors. Nor was there any from which significant returns could be expected from the secondary effect of the exhibition; or any in which the exhibition venue would be destroyed; or any that could go beyond the scope of art to provide some major academic contribution; or any with the kind of message that could have a significant effect on politics; nor even any that had actually been finished or started with the venue in mind. Overall, I felt that the proposals were designed to make the exhibitions conform to the open-call guidelines, and that the artists are atrophying as a result of the misguided “preconditions” of the project.

Aside from the artists’ self-selections, what I focused on were the proposals that included analysis of the practice of curation itself: things that

incorporated the performativity and ephemerality of performances and discussions, or those in which the catalog and work information were conceived as conceptual elements. To go further, careful analysis of the technical aspects of curation, like the use of lighting, partitions and pedestals, the flow of the space and the deployment of the invigilators or the management of publicity, makes it possible to create something that completely departs from the conventional form of the exhibition. But I personally think there is no point to this approach. What is essential now is not an elaboration of institutional critique, but rather seeing whether it is possible to connect larger “issues” to the institution of art.

I sense a kind of “openness” in the avoidance of the two above-mentioned problems by the artists who were selected this time. An interaction with externality. A new combination of “issues” and “institution.” These things appeared naturally. What I hope is that the artists will continue to focus attention on them beyond their capacity as exhibition organizers.

In reviewing the proposals this time, I got a strong sense that there is still a future for the Emerging Artists Support Program. An approach with a broad and deep reflexivity, a high awareness of practice and realization, and the appropriate tools for dealing with global issues. Independent curators (although the label doesn’t really matter here) who can make such exhibitions are what we need right now. These are exactly the kind of proposals that a public institution like Tokyo Wonder Site should be able to proactively use. I have high expectations that this open-call scheme will become a major part of Japan’s “history of curation.”

施設案内

General Information

TWS hongo

〒113-0033 東京都文京区本郷2-4-16
TEL: 03-5689-5331 / FAX: 03-5689-7501
開館時間: 11:00～19:00(入場は閉館30分前まで)
休館日: 月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始



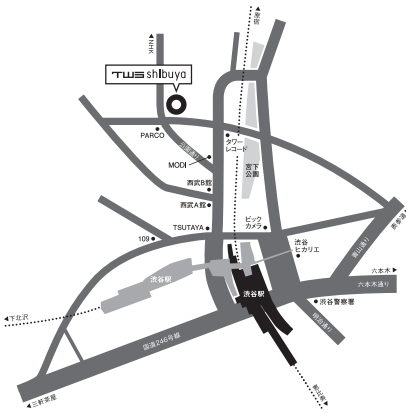
2-4-16 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033
TEL: +81-(0)3-5689-5331 / FAX: +81-(0)3-5689-7501
OPEN: 11:00-19:00 (Last Entry: 18:30)
CLOSED: Mondays (When Monday falls on a national holiday,
closed on the following weekday), Year-end and New Year Holiday



TWS shibuya

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-19-8
渋谷区立労働福祉会館1F
TEL: 03-3463-0603 / FAX: 03-3463-0605
開館時間: 11:00～19:00(入場は閉館30分前まで)
休館日: 月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始

TWSアートカフェ 24/7 coffee & roaster ※TWS渋谷併設
TEL: 03-6455-0920
営業時間: 10:00～23:30(ラストオーダー 23:00)
定休日: 年中無休(1月1日除く)



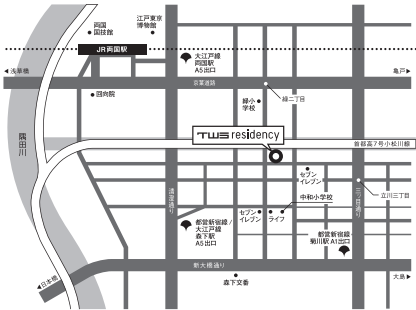
Shibuya Workers' Welfare Hall 1F
1-19-8 Jinnan Shibuya-ku Tokyo 150-0041
TEL: +81-(0)3-3463-0603 / FAX: +81-(0)3-3463-0605
OPEN: 11:00-19:00 (Last Entry: 18:30)
CLOSED: Mondays (When Monday falls on a national holiday,
closed on the following weekday), Year-end and New Year Holiday

TWS Art Cafe "24/7 coffee & roaster"
*Located in the same building as TWS Shibuya.
TEL: +81-(0)3-6455-0920
OPEN: 10:00-23:30(Last order 23:00)
CLOSED: January 1



TWS residency

〒130-0023 東京都墨田区立川2-14-7
アーツ菊川1F (オフィス501)
TEL: 03-5625-4433 / FAX: 03-5625-4434
※イベント開催時のみ一般公開

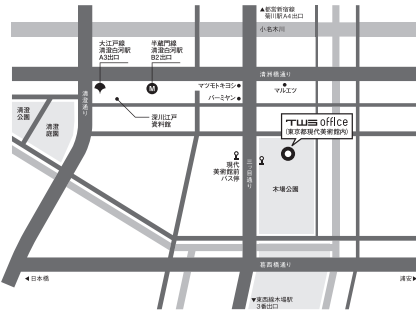


Arts Kikukawa 1F
2-14-7 Tatekawa, Sumida-ku, Tokyo 130-0023
TEL: +81-(0)3-5625-4433 / FAX: +81-(0)3-5625-4434
Open to the public when events are held.



TWS office

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1
東京都現代美術館内
TEL: 03-5602-9881/ FAX: 03-5602-9882



4-1-1 Miyoshi, Koto-ku, Tokyo 135-0022 (Located in MOT)
TEL: +81-(0)3-5602-9881/ FAX: +81-(0)3-5602-9882

[お問い合わせ/Inquiry]
contact@tokyo-ws.org
<http://www.tokyo-ws.org>

レジデンス運営諮問委員会

- 大巻伸嗣(東京藝術大学 准教授)
 - 小沢 剛(東京藝術大学 准教授)
 - 金井 直(信州大学 准教授)
 - 神谷幸江(ジャパン・ソサエティー・ギャラリー・ディレクター)
 - 杉田 敦(女子美術大学 教授)
 - 相馬千秋(アートプロデューサー、特定非営利活動法人 芸術公社 代表理事)
 - 建畠 哲(多摩美術大学 学長、埼玉県立近代美術館 館長)
 - 津村耕佑(武蔵野美術大学 教授)
 - 沼野雄司(桐朋学園大学 教授)
- ※任期:平成27年6月1日から平成29年5月31日まで

外部評価委員会

- 天野太郎(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 横浜市民ギャラリーあざみ野 主席学芸員)
 - 伊東正伸(独立行政法人国際交流基金 文化事業部長)
 - 片山正夫(公益財団法人セゾン文化財団 常務理事)
 - 川上典李子(デザインジャーナリスト、21_21 DESIGN SIGHT アソシエイトディレクター)
 - 藤幡正樹(アーティスト)
- ※任期:平成26年11月1日から平成29年10月31日まで

トーキョーワンダーサイト

- 館長 今村有策
- 副館長 馬神祥子
- 事業課長 黒田みのり

※平成28年3月時点

- Shinji OHMAKI (Associate Professor, Tokyo University of the Arts)
- Tsuyoshi OZAWA (Associate Professor, Tokyo University of the Arts)
- Tadashi KANAI (Associate Professor, Shinshu University)
- Yukie KAMIYA (Director, the Japan Society Gallery)
- Atsushi SUGITA (Professor, Joshibi University of Art and Design)
- Chiaki SOMA (Art producer/Representative Director, Arts Commons Tokyo)
- Akira TATEHATA (President, Tama Art University/Director, The Museum of Modern Art, Saitama)
- Kosuke TSUMURA (Professor, Musashino Art University)
- Yuji NUMANO (Professor, Toho Gakuen School of Music)

- Taro AMANO (Chief Curator, Program Director, Yokohama Civic Art Gallery Azamino)
- Masanobu ITO (Program Director, Visual Arts, Arts and Culture Department, The Japan Foundation, Tokyo)
- Masao KATAYAMA (Executive Director, The Saison Foundation)
- Noriko KAWAKAMI (Design Journalist/Associate Director, 21_21 DESIGN SIGHT)
- Masaki FUJIHATA (Artist)

Tokyo Wonder Site

- Director Yusaku IMAMURA
- Vice Director Sachiko UMAGAMI
- Director of Arts Program and Residency Division Minoru KURODA

トーキョーワンダーサイト アニュアル 2015

発行日	2016年7月14日
監修	今村有策(トーキョーワンダーサイト館長)
編集	一般社団法人ノマドプロダクション(橋本 誠 及位友美 佐藤恵美 高橋尚子) トーキョーワンダーサイト(伊藤まゆみ 市川亜木子 藤井宏水)
翻訳	アンドレアス・シュトゥールマン(pp.131-141)、アンドリュー・マークル(pp.143-155)
撮影	加藤 健、川久保ジョイ、河田浩明、近藤愛助、須田俊哉(bloomy)、高橋健治、ただ(ゆかい)、 一般社団法人ノマドプロダクション、トーキョーワンダーサイト
デザイン	岡部正裕(株式会社ボイズ)
印刷	株式会社 シナノ パブリッシング プレス
発行	公益財団法人東京都歴史文化財団トーキョーワンダーサイト 東京都江東区三好4-1-1 東京都現代美術館内

Tokyo Wonder Site Annual Report 2015

Publication Date	July 14, 2016
Editorial Supervisor	Yusaku IMAMURA (Director, Tokyo Wonder Site)
Editorial Staff	Nomad Production (Makoto HASHIMOTO Yumi NOZOKI Emi SATO Naoko TAKAHASHI) Tokyo Wonder Site (Mayumi ITO Akiko ICHIKAWA Hiromi FUJII)
Translation	Andreas STUHLMANN(pp.131-141), Andrew MAERKLE(pp.143-155)
Photo	Ken KATO, Yoi KAWAKUBO, Hiroaki KAWATA, Aisuke KONDO, Toshiya SUDA (bloomy), Kenji TAKAHASHI, TADA(YUKAI), Nomad Production, Tokyo Wonder Site
Design	Masahiro OKABE(voids)
Printing	SHINANO PUBLISHING PRESS CO.,LTD
Published by	Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Tokyo Wonder Site 4-1-1 Miyoshi, Koto-ku Tokyo 135-0022(Located in MOT)

©2016 Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Tokyo Wonder Site

美術館でも
ギャラリーでもない、
“ワンダー”な場所



tokyo wonder site

Institute of Contemporary Art and
International Cultural Exchange, Tokyo